鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（175）

南九州西回り自動車道建設（野田IC～高尾野IC）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（XXXV）

外畠（ほかはた）遺跡

（出　水　市）

2012年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

A
A
B
B
C
C
D
D
底部

序　文

この報告書は，南九州西回り自動車道出水阿久根道路（高尾野 IC ～野田 IC 間）の建設に伴って，平成 22 年度に実施した出水市荘上に所在する外畠遺跡の発掘調査の記録です。

外畠遺跡は，縄文時代から近世の複合遺跡であり，各時代の遺構と遺物が出土しました。

縄文時代では，後期に該当する土坑 26 基と配石状遺構 4 基が見つかりました。なかでも，土坑では，小形壺形土器が納められた土坑や，2 枚の石皿・台石が立てた状態で納められた土坑など特殊な事例が発見されています。

古代では，土坑 6 基や溝状遺構などが発見されました。土坑には，土師器の甕が納められているものや，青銅製の装身具などが出土したものがあり，当時の有力者の墓と考えられます。また，溝状遺構からは，短期間のうちに捨てられた土師器をはじめとする遺物が多量に見つかりました。古代の生活を解明する上で重要な手がかりとなるものと期待されます。

他にも中世の集落や近世の墓が見つかっていて，縄文時代から現在に至るまで，当地域で人々の生活が連綿と営まれてきたことがわかりました。

本報告書を県民をはじめ多くの方々に御覧いただき，地域に所在する埋蔵文化財の持つ多様な価値を御理解いただくことにより，国民の共有財産として文化財が保護・活用されることを祈念しております。

最後に，調査に当たりご協力をいただいた国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所，出水市教育委員会，関係各機関並びに発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成 24 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　寺　田　仁　志

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほかはたいせき
書名	外畠遺跡
副書名	南九州西回り自動車道建設（野田 IC ～高尾野 IC）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XXXV
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第 175 集
編集者名	森幸一郎　　花田寛典
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒 899 － 4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL　0995 － 48 － 5811 FAX　0995 － 48 － 5821
発行年月	2012 年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
ほかはたいせき 外畠遺跡	かごしまけん 鹿児島県 いずみし 出水市 しょうかみ 荘上	46208	45	32° 4′ 27″	130° 16′ 53″	試掘調査 2010.05.06 ～ 2010.05.07 2010.05.11 本調査 2010.05.10 ～ 2011.01.28	135.5 10,500	南九州西回り自動車道建設に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
外畠遺跡	集落	縄文時代 後期～晩期	土坑 26 基 配石状遺構４基	市来式土器，北久根山式土器，磨消縄文土器，三万田式土器，黒川式土器，入佐式土器，石鏃，磨石・敲石類，打製石斧，磨製石斧，石皿・台石など	
	散布地	弥生時代～ 古墳時代		入来式土器，黒髪式土器，成川式土器など	
	集落	古代	土坑６基 掘立柱建物１棟 溝状遺構１基	土師器，内黒土師器，須恵器，刀子，青銅製品など	
	集落	中世	掘立柱建物４棟 土師器埋納柱穴１基 方形竪穴建物１基 竪穴状遺構３基 土壙墓２基 土坑３基 焼土２基 炭化物集中箇所１基 柱穴	土師器，須恵器，瓦質土器，白磁，青磁，滑石製石鍋，洪武通寶，鉄釘など	
	墓	近世	土壙墓 15 基 区画溝１基	陶磁器類，寛永通寶，鉄釘，人骨など	

要約

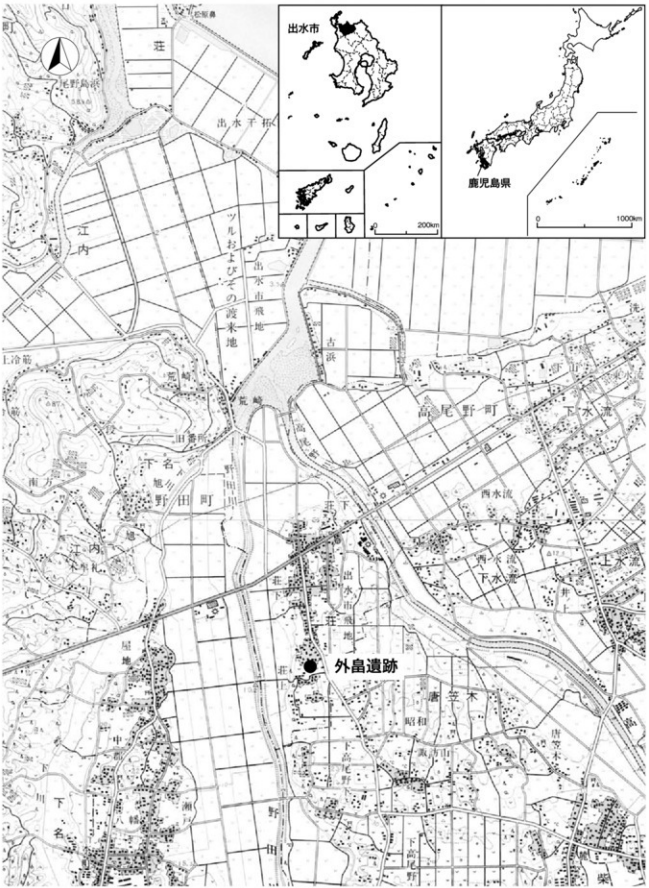
外畠遺跡は縄文時代，古代，中世，近世の複合遺跡である。

縄文時代は後期を中心に，土器や石器と共に，石材を伴う土坑が多数検出されている。なかでも，小形壺形土器が納められているものや，２枚の石皿・台石が立位で配置されているものなど，特殊な事例も発見されている。縄文時代後期の祭祀・精神活動を解明する上で貴重な資料となった。

古代は，土坑群と掘立柱建物跡，自然流路を利用した溝状遺構が検出されている。土坑からは土師器の甕が出土しており，墓としての機能が想定される。また，溝状遺構からは，短い期間で廃棄された遺物が発見された。

中世では，方形竪穴建物や掘立柱建物跡，土壙墓などが検出された。当遺跡の所在地近辺が「荘」という地名であることも併せて，古代から中世にかけての調査成果は，当地域における土地利用の変遷過程を示す貴重な成果である。

近世は，複数の土壙墓と，それを区画する溝状遺構が検出された。近世における出水地方の人々の形質，埋葬方法などを明らかにする貴重な成果が上がった。



外畠遺跡位置図 (1:25,000)

例　言

1　本書は，南九州西回り自動車道出水阿久根道路建設に伴う外畠遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は鹿児島県出水市荘上 1100 － 1 番地他に所在する。
3　外畠遺跡は，平成 19 年度に鹿児島県文化財課が実施した分布調査によって発見され，「西ノ下遺跡」として遺跡台帳に登録された。平成 22 年度の発掘調査では，「西ノ下遺跡」の名称を用いた。しかし，平成 23 年 4 月 1 日付けで「外畠遺跡」への遺跡名変更が行われたため，本報告書では「外畠遺跡」の名称を用いる。
4　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
5　発掘調査事業は，平成 22 年度に実施し，整理・報告書作成事業は，平成 23 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
6　掲載遺物番号は通し番号であり，本文，挿図，表，図版の遺物番号は一致する。
7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。
8　本書で用いたレベル数値は，世界測地系に基づく 2 級基準点「基Ⅱ－ 9」を基準にした。
「基Ⅱ－ 9」の標高は H ＝ 17.930m である。
9　物注記等で用いた遺跡記号は「H ハタ」である。
10　本書で使用した方位は，全て真北である。
11　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。また，空中写真の撮影は（有）ふじたに委託した。
12　遺構図，遺物分布図の作成及びトレースは，森幸一郎が整理作業員の協力を得て行った。
13　出土遺物の実測・トレースは，森が整理作業員の協力を得て行った。また，遺物実測の一部を（株）九州文化財研究所（石器）に委託し，森が監修した。
14　出土遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。
15　本報告に係る自然科学分析は，花粉分析及び放射性炭素年代測定，リン・カルシウム分析を（株）パリノ・サーヴェイに委託した。
16　金属器の保存処理は，中村幸一郎が整理作業員の協力を得て行った。
17　人骨の実測及び分析は，竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学教授）に依頼した。分析結果について玉稿を頂き，付論として掲載した。
18　本書の編集は，森が担当し，執筆担当は以下のとおりである。
第 1 章　森
第 2 章　花田寛典
第 3 章　第 1 節・第 2 節　森
　　第 3 節　1　森・桑波田武志
　　2　花田
　　3　森・花田
　　4　森・花田・鶴田静彦
　　5　森・鶴田
第 4 章　(株) パリノ・サーヴェイ
付　論　竹中正巳 (鹿児島女子短期大学)
第 5 章　森
19　出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

凡　例

1　陶磁器の分類および編年は，以下の文献を参考にした。

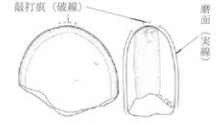
上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　pp.55 ～ 70
森田　勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　pp.10 ～ 33
太宰府市教育委員会編 1983『太宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第 7 集
太宰府市教育委員会編 2000『太宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集

2　本報告書に登場する遺構の略号は以下のとおりである。

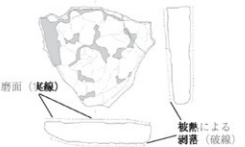
略　号	遺 構 の 種 類
SB	掘立柱建物跡
SD	溝状遺構
SI	方形竪穴建物・竪穴状遺構
SK	土坑
SP	柱穴
ST	土壙墓
SX	配石状遺構・焼土・炭化物集中箇所

3　遺構実測図において表現の都合上，土坑の断面図と遺物等の見通し図の実測位置が異なるものがある。見通し図の実測位置を ↑ で表現して区別した。

4　石器の実測表現については，表現のわかりにくい箇所には以下のような補助的な表現を行った。

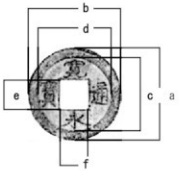


磨石・敲石類

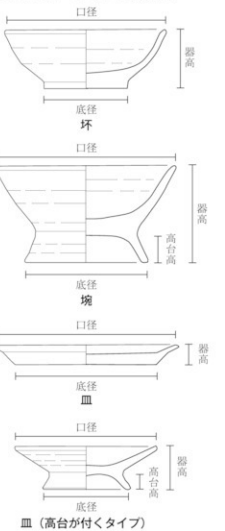


石皿・台石

5　古銭は以下の箇所を計測した。アルファベットは観察表と対応する。



6　土師器の法量は以下のように計測した。



目　次

巻頭カラー
序文
報告書抄録
例言・凡例

第１章　発掘調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　事前調査…… 1
　第３節　本調査…… 2
　第４節　調査の経過…… 3
　第５節　整理・報告書作成業務…… 4

第２章　遺跡の位置と環境…… 5
　第１節　地理的環境…… 5
　第２節　歴史的環境…… 5

第３章　調査の方法と成果…… 12
　第１節　調査の方法…… 12
　第２節　層序…… 14
　第３節　調査の成果…… 17
　　１　縄文時代の調査…… 17
　　２　弥生時代・古墳時代の調査…… 83
　　３　古代の調査…… 85
　　４　中世の調査…… 118
　　５　近世ほかの調査…… 136
　　観察表…… 147
第４章　自然科学分析…… 177

付　論　鹿児島県出水市外畠遺跡人骨…… 185

第５章　総括…… 191

写真図版…… 199

挿　図　目　次

第１図　試掘トレンチの配置図…… 2
第２図　地形分類図…… 6
第３図　周辺遺跡位置図…… 11
第４図　グリッド配置図・トレンチ配置図…… 13
第５図　基本層序…… 14
第６図　土層断面図…… 16
第７図　縄文時代の調査範囲…… 17
第８図　縄文時代の遺構配置図…… 18
第９図　SK４…… 21
第10図　SK４出土遺物①…… 22
第11図　SK４出土遺物②…… 23
第12図　SK４出土遺物③…… 24
第13図　SK６・出土遺物①…… 25
第14図　SK６出土遺物②…… 26
第15図　SK８…… 28
第16図　SK８出土遺物①…… 29
第17図　SK８出土遺物②…… 30
第18図　SK55…… 31
第19図　SK55出土遺物①…… 32
第20図　SK55出土遺物②…… 33
第21図　SK78・出土遺物①…… 34
第22図　SK78出土遺物②…… 35
第23図　SK53・出土遺物…… 36
第24図　SK54・出土遺物…… 36
第25図　SK57・出土遺物①…… 37
第26図　SK59・出土遺物…… 37
第27図　SK57出土遺物②…… 38
第28図　SK13・出土遺物①…… 39
第29図　SK13出土遺物②…… 40
第30図　SK13出土遺物③…… 41
第31図　SK20…… 42
第32図　SK20出土遺物…… 43
第33図　SK44・出土遺物…… 44
第34図　SK60・出土遺物…… 46
第35図　SK61・出土遺物①…… 47
第36図　SK61出土遺物②…… 48
第37図　SK49・出土遺物…… 49
第38図　SK50・出土遺物…… 49
第39図　SK51・出土遺物…… 50
第40図　SK42・出土遺物…… 51
第41図　SK42・SK50・SX64出土石器　接合状況…… 51
第42図　SK43…… 52
第43図　SK48・出土遺物…… 52
第44図　SK46・出土遺物…… 53
第45図　SK69・出土遺物…… 53
第46図　SK47…… 54
第47図　SK58…… 54
第48図　SX52・出土遺物…… 55
第49図　SX64…… 56
第50図　SX65…… 56

第 51 図　SX66・出土遺物 …… 56
第 52 図　SK45・出土遺物 …… 57
第 53 図　SK21 …… 57
第 54 図　遺構外出土土器① …… 60
第 55 図　遺構外出土土器② …… 61
第 56 図　遺構外出土土器③ …… 62
第 57 図　遺構外出土土器④ …… 63
第 58 図　遺構外出土土器⑤ …… 64
第 59 図　遺構外出土土器⑥ …… 65
第 60 図　遺構外出土土器⑦ …… 66
第 61 図　遺構外出土土器⑧ …… 67
第 62 図　遺構外出土土器⑨ …… 68
第 63 図　遺構外出土土器⑩ …… 69
第 64 図　遺構外出土土器⑪・土製品 …… 70
第 65 図　遺構外出土石器① …… 73
第 66 図　遺構外出土石器② …… 74
第 67 図　遺構外出土石器③ …… 75
第 68 図　遺構外出土石器④ …… 76
第 69 図　遺構外出土石器⑤ …… 77
第 70 図　遺構外出土石器⑥ …… 78
第 71 図　遺構外出土石器⑦ …… 79
第 72 図　遺構外出土石器⑧ …… 80
第 73 図　遺構外出土石器⑨ …… 81
第 74 図　遺構外出土石器⑩ …… 82
第 75 図　弥生時代・古墳時代遺物 …… 84
第 76 図　古代の調査範囲 …… 85
第 77 図　古代土師器　坏・皿　分類 …… 87
第 78 図　古代土師器　埦　分類 …… 88
第 79 図　古代の遺構配置図（J ～ L － 18 ～ 20 区）…… 89
第 80 図　SK68・出土遺物 …… 90
第 81 図　SK70・出土遺物 …… 91
第 82 図　SK72 …… 92
第 83 図　SK72 出土遺物 …… 93
第 84 図　SK73・出土遺物 …… 95
第 85 図　SK74・出土遺物 …… 96
第 86 図　SK77・出土遺物 …… 97
第 87 図　SB67・出土遺物 …… 98
第 88 図　SP106、SP107、SP117・出土遺物 …… 99
第 89 図　SD38 …… 100
第 90 図　SD38 埋土堆積状況・断面 …… 101
第 91 図　SD38 下層遺物出土状況 …… 102
第 92 図　SD38 下層出土　土師器坏① …… 103
第 93 図　SD38 下層出土　土師器坏② …… 104
第 94 図　SD38 下層出土　土師器坏③ …… 105
第 95 図　SD38 下層出土　土師器埦① …… 106
第 96 図　SD38 下層出土　土師器埦② …… 108
第 97 図　SD38 下層出土　土師器③・皿ほか …… 109
第 98 図　SD38 下層出土　土師器甕・二次加工品 …… 110
第 99 図　SD38 下層出土　須恵器 …… 111
第 100 図　SD38 上層・中層出土遺物 …… 112
第 101 図　SD38 Ⅱ層・撹乱ほか出土遺物 …… 113
第 102 図　遺構外出土遺物① …… 116
第 103 図　遺構外出土遺物② …… 117
第 104 図　中世の調査範囲 …… 118
第 105 図　中世の遺構配置図（1） …… 120
第 106 図　中世の遺構配置図（2） …… 121
第 107 図　SB16、SB41、SB119 …… 122
第 108 図　SB119 － P5・出土遺物 …… 123
第 109 図　SP79・出土遺物 …… 123
第 110 図　SB120・出土遺物 …… 124
第 111 図　SI 7 …… 125
第 112 図　SI 7 出土遺物 …… 126
第 113 図　SI11、SI40 …… 127
第 114 図　SI19・出土遺物 …… 129
第 115 図　ST62、ST63・出土遺物 …… 130
第 116 図　土坑・柱穴ほか …… 131
第 117 図　遺構外出土遺物① …… 133
第 118 図　遺構外出土遺物② …… 134
第 119 図　遺構外出土遺物③ …… 135
第 120 図　近世の調査範囲 …… 136
第 121 図　土壙墓群・SD36 …… 137
第 122 図　ST17・出土遺物 …… 138
第 123 図　ST22・出土遺物 …… 139
第 124 図　ST23・出土遺物 …… 139
第 125 図　ST24・出土遺物 …… 140
第 126 図　ST27・出土遺物 …… 140
第 127 図　ST35・出土遺物 …… 141
第 128 図　ST25、ST26・出土遺物 …… 142
第 129 図　土壙墓群・遺物出土地点 …… 143
第 130 図　土壙墓出土遺物 …… 144
第 131 図　遺構外出土遺物① …… 145
第 132 図　遺構外出土遺物② …… 146
第 133 図　暦年較正結果 …… 179
第 134 図　暦年較正結果 …… 182
第 135 図　花粉化石 …… 183
第 136 図　縄文時代の遺構変遷案 …… 192
第 137 図　小形壺形土器（1）・参考資料 …… 194
第 138 図　遺構・包含層出土石器機種別点数 …… 195
第 139 図　遺構・包含層出土石器機種別組成率 …… 195
第 140 図　剥片石器石材利用率（重量比） …… 195
第 141 図　石材利用地域別依存率（重量比） …… 195
第 142 図　SD38 下層出土　土師器坏・埦の分布と組成 …197
第 143 図　中世の遺構変遷案 …… 198
第 144 図　外畠遺跡及び隣接地の残存状況 …… 198

表 目 次

第 1 表　試掘調査結果 …… 2
第 2 表　周辺遺跡地名（1）…… 9
第 3 表　周辺遺跡地名（2）…… 10
第 4 表　石器分類表 …… 15
第 5 表　石材分類表 …… 15
第 6 表　磨石・敲石類使用状況観察表 …… 80
第 7 表　縄文時代の遺物観察表（1）……147
第 8 表　縄文時代の遺物観察表（2）……148
第 9 表　縄文時代の遺物観察表（3）……149
第 10 表　縄文時代の遺物観察表（4）……150
第 11 表　縄文時代の遺物観察表（5）……150
第 12 表　縄文時代の遺物観察表（6）……151
第 13 表　縄文時代の遺物観察表（7）……152
第 14 表　縄文時代の遺物観察表（8）……153
第 15 表　縄文時代の遺物観察表（9）……154
第 16 表　縄文時代の遺物観察表（10）……155
第 17 表　縄文時代の遺物観察表（11）……156
第 18 表　縄文時代の遺物観察表（12）……156
第 19 表　縄文時代の遺物観察表（13）……156
第 20 表　縄文時代の遺物観察表（14）……157
第 21 表　縄文時代の遺物観察表（15）……158
第 22 表　弥生時代・古墳時代の遺物観察表 ……158
第 23 表　古代の遺物観察表（1）……159
第 24 表　古代の遺物観察表（2）……160
第 25 表　古代の遺物観察表（3）……161
第 26 表　古代の遺物観察表（4）……162
第 27 表　古代の遺物観察表（5）……163
第 28 表　古代の遺物観察表（6）……164
第 29 表　古代の遺物観察表（7）……165
第 30 表　古代の遺物観察表（8）……166
第 31 表　古代の遺物観察表（9）……166
第 32 表　古代の遺物観察表（10）……166
第 33 表　古代の遺物観察表（11）……166
第 34 表　古代の遺物観察表（12）……167
第 35 表　古代の遺物観察表（13）……167
第 36 表　古代の遺物観察表（14）……168
第 37 表　古代の遺物観察表（15）……168
第 38 表　古代の遺物観察表（16）……168
第 39 表　古代の遺物観察表（17）……168
第 40 表　古代の遺物観察表（18）……169
第 41 表　古代の遺物観察表（19）……169
第 42 表　古代の遺物観察表（20）……169
第 43 表　古代の遺物観察表（21）……169
第 44 表　古代の遺物観察表（22）……169
第 45 表　古代の遺物観察表（23）……170
第 46 表　古代の遺物観察表（24）……170
第 47 表　中世の遺物観察表（1）……170
第 48 表　中世の遺物観察表（2）……171
第 49 表　中世の遺物観察表（3）……171
第 50 表　中世の遺物観察表（4）……171
第 51 表　中世の遺物観察表（5）……171
第 52 表　中世の遺物観察表（6）……171
第 53 表　中世の遺物観察表（7）……171
第 54 表　中世の遺物観察表（8）……172
第 55 表　中世の遺物観察表（9）……172
第 56 表　中世の遺物観察表（10）……172
第 57 表　中世の遺物観察表（11）……172
第 58 表　中世の遺物観察表（12）……172
第 59 表　中世の遺物観察表（13）……173
第 60 表　近世の遺物観察表（1）……173
第 61 表　近世の遺物観察表（2）……174
第 62 表　近世の遺物観察表（3）……175
第 63 表　近世の遺物観察表（4）……175
第 64 表　近世・近代ほかの遺物観察表（1）……175
第 65 表　近世・近代ほかの遺物観察表（2）……176
第 66 表　近世・近代ほかの遺物観察表（3）……176
第 67 表　近世・近代ほかの遺物観察表（4）……176
第 68 表　近世・近代ほかの遺物観察表（5）……176
第 69 表　近世・近代ほかの遺物観察表（6）……176
第 70 表　花粉分析結果 ……177
第 71 表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果 ……178
第 72 表　放射性炭素年代測定結果 ……181
第 73 表　土壌理化学分析結果 ……183
第 74 表　縄文時代の土坑・配石状遺構 ……191
第 75 表　剥片石器利用石材一覧 ……195
第 76 表　古代の土坑 ……196
第 77 表　土坑出土の土師器甕の特徴 ……196

図 版 目 次

外島遺跡全景（東から）…… 図版 1
外島遺跡近景（西から）…… 図版 2
ツル保護対策　鳥インフルエンザ対策ほか…… 図版 3
調査前風景　土層断面…… 図版 4
N-O － 24・25 区遺物出土状況ほか
K ～ P － 23 ～ 27 区　空撮 …… 図版 5
SK 4 と周辺の遺構　SK 4 検出状況 …… 図版 6
SK 4 埋土堆積状況・完掘 …… 図版 7
SK 6 検出状況・半截・埋土堆積状況・完掘 …… 図版 8
SK54，SK55 検出状況
SK55 検出状況・埋土堆積状況・完掘
SK78 …… 図版 9
N － 25 区遺構検出状況 …… 図版 10
SK53 検出状況・完掘
SK13 検出状況・半截・完掘 …… 図版 11
SK60，SK61 検出状況・完掘
SK20 遺物出土状況・埋土堆積状況・完掘 …… 図版 12
SK57 検出状況・土器出土状況
SK44，SK45 検出状況・埋土堆積状況…… 図版 13
SK45 遺物出土状況　SK 8 検出状況・完掘
SK49，SK50，SK51 検出状況　SK49 完掘 …… 図版 14
SK50 埋土堆積状況・完掘　SK51 検出状況・完掘
SX52，SX64，SX65 検出状況　SX66 検出状況
SK43 検出状況・埋土堆積状況 …… 図版 15
SK48 検出状況・完掘　SK59 検出状況・完掘
SK58 検出状況・完掘
SK69 検出状況・完掘 …… 図版 16
SK21 検出状況・埋土堆積状況・完掘
SK42 検出状況ほか
SK77，SK68 検出状況　SK77 遺物出土状況 …… 図版 17
SK77 埋土堆積状況・完掘 …… 図版 18
SK68 埋土堆積状況・完掘　SK72，SK73 検出状況
SK72 埋土堆積状況・青銅製品出土状況・完掘
SK73 埋土堆積状況・遺物出土状況 …… 図版 19
SP71・SK70 検出状況　SK70 埋土堆積状況・完掘
SK74 検出状況・埋土堆積状況・遺物出土状況
K － 18・19 区遺構検出状況 …… 図版 20
SB67 完掘　SB67 － P 7 半截
SP71 検出状況ほか
SD38 検出状況（西から） …… 図版 21
SD38 － 1 トレンチ（A － A'）
SD38 － 2 トレンチ（B － B'）
SD38 下層遺物出土状況 …… 図版 22
SD38 完掘
SI 7 …… 図版 23
SP79 遺物出土状況・完掘 …… 図版 24
SB16 検出状況　SB41 完掘
SI11 検出状況・完掘
SI19 検出状況・遺物出土状況ほか …… 図版 25
SK39，SI40 検出状況・埋土堆積状況
ST62，ST63 検出状況・埋土堆積状況・完掘…… 図版 26
ST63 骨粉出土状況　SK18　SK15
近世土壙墓群，SD36 …… 図版 27
SD36 埋土堆積状況ほか
ST23 埋葬人骨検出状況　ST27 埋葬人骨検出状況 … 図版 28
ST17 埋葬人骨検出状況　ST35 埋葬人骨検出状況
縄文時代の遺物（1）…… 図版 29
縄文時代の遺物（2）…… 図版 30
縄文時代の遺物（3）…… 図版 31
縄文時代の遺物（4）…… 図版 32
縄文時代の遺物（5）…… 図版 33
縄文時代の遺物（6）…… 図版 34
縄文時代の遺物（7）…… 図版 35
縄文時代の遺物（8）…… 図版 36
縄文時代の遺物（9）…… 図版 37
縄文時代の遺物（10）…… 図版 38
縄文時代の遺物（11）…… 図版 39
縄文時代の遺物（12）…… 図版 40
縄文時代の遺物（13）…… 図版 41
縄文時代の遺物（14）…… 図版 42
弥生時代・古墳時代の遺物…… 図版 43
古代の遺物（1）…… 図版 44
古代の遺物（2）…… 図版 45
古代の遺物（3）…… 図版 46
古代の遺物（4）…… 図版 47
古代の遺物（5）…… 図版 48
古代の遺物（6）…… 図版 49
古代の遺物（7）…… 図版 50
古代の遺物（8）…… 図版 51
中世の遺物（1）…… 図版 52
中世の遺物（2）…… 図版 53
中世の遺物（3）…… 図版 54
中世の遺物（4）・近代の遺物 …… 図版 55
中世の遺物（5）…… 図版 56

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下，鹿児島国道事務所）は，「南九州西回り自動車道出水阿久根道路建設」の施工計画に基づき，事業区内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）に照合した。

これを受けて，県文化財課は平成18年度に阿久根～野田インターチェンジ間の，平成19年度に野田～高尾野インターチェンジ間の分布調査を実施した。その結果，阿久根～野田インターチェンジ間では中郡遺跡群など６遺跡を，野田～高尾野インターチェンジ間では外畠遺跡をはじめとする５遺跡を確認した。

野田～高尾野インターチェンジ間分布調査結果

遺跡名	所在地	時代	備考
西宮ノ脇遺跡	出水市下知識町	縄文～古代	周知
野添遺跡	出水市下知識町	縄文～古墳	新発見
前原遺跡	出水市下知識町	弥生～古代	新発見
中尾遺跡	出水市福ノ江町	古墳～中世	新発見
外畠遺跡	出水市荘上	古墳～中世	新発見

外畠遺跡の試掘調査は，県文化財課が主体となり，県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）とともに実施した。また，出水市教育委員会の協力も受けた。

試掘調査は，平成22年５月６～７日と５月11日の３日間実施し，事業対象面積18,300㎡に対し，試掘トレンチを17か所設定した。調査面積は約135.5㎡である。

平成22年５月６～７日の２日間の調査では，９か所のトレンチを設定（第１図上のトレンチ番号１～９）し，小型バックホウと人力で掘り下げを行った。その結果，トレンチ番号６・７・８で遺構・遺物が確認された。そのことから，遺跡の西側（第１図上の太線Ａの範囲）については本調査が必要であると判断され，平成22年５月10日から本調査を実施することとなった。

次いで，５月11日には，さらに８か所のトレンチを設定（第１図上のトレンチ番号10～17）し，試掘調査を実施した。その結果，トレンチ番号13で遺構・遺物が確認され，遺跡中央付近（第１図上の太線Ｂの範囲）も本調査が必要であると判断された。なお，遺跡の東側はシラスまで掘削を受けており，遺構及び遺物は確認されなかったことから，本調査の必要はないと判断した。

試掘調査の結果，当初計画されていた事業対象面積18,300㎡に対し，10,500㎡（第１図上の太線Ａ及び太線Ｂの範囲）について本調査が必要であると判断された。このことを受けて，再度三者で協議を行い，設計変更等が不可能なことなどから本調査を実施することとなった。

本調査及び報告書作成作業は，埋文センターが担当し，本調査は平成22年５月10日から平成23年１月28日まで実施した。調査の結果，縄文時代から近世までの遺構・遺物が発見された。

報告書作成作業は，平成22年度中に遺物の洗浄や図面整理等を行い，平成23年度に本格的に実施した。

第２節　事前調査

１　分布調査

分布調査は，平成20年３月19日に実施した。

調査体制

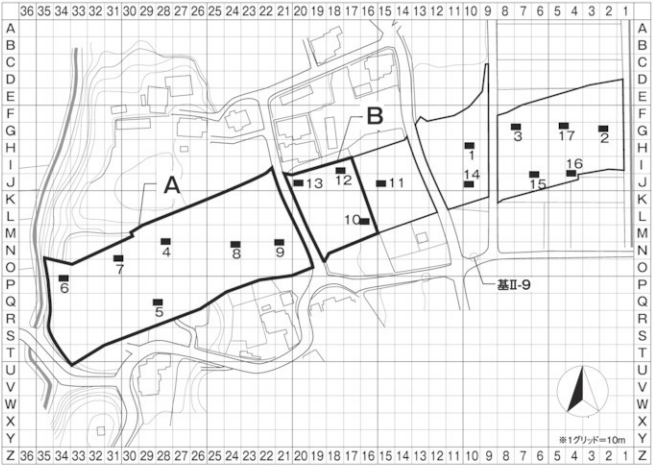
事業主体　鹿児島県教育委員会
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査総括　鹿児島県教育庁文化財課
　課長　木原　俊孝
調査企画　鹿児島県教育庁文化財課
　課長補佐　福山　徳治
　主任文化財主事兼
　埋蔵文化財係長　青崎　和憲
調査担当　鹿児島県教育庁文化財課
　文化財主事　堂込　秀人
　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財主事　日高　勝博
　文化財主事　羽嶋　敦洋
立会者　九州地方整備局鹿児島国道事務所
　調査課計画係長　松尾　和敏
　（西回り推進室）技官　祝迫　龍一

２　試掘調査

試掘調査は，鹿児島県教育委員会が主体となり，県文化財課及び埋文センターが，平成22年５月６～７日と５月11日の３日間実施した。

調査体制

事業主体　鹿児島県教育委員会
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査総括　鹿児島県教育庁文化財課
　課長　有川　昭人
調査企画　鹿児島県教育庁文化財課
　課長補佐　中尾　純則
　主任文化財主事兼
　埋蔵文化財係長　堂込　秀人
調査担当　鹿児島県教育庁文化財課
　文化財主事　川口　雅之



第１図　試掘トレンチの配置図

第１表　試掘調査の結果

トレンチ番号	規模（m²）	表土厚（cm）	表土下の層	調査最下層	調査深度（cm）	調査結果
1	6	28	Ⅳ	Ⅷ	186	なし
2	6	119	−	−		水田利用のための盛土
3・14～17	6	35	Ⅷ	Ⅷ	65	なし
4・5	12	90	Ⅴ	Ⅸ	198	なし
6・7	31	20	Ⅸ	Ⅸ	35	溝状遺構を検出
8	15	35	Ⅲ	Ⅴ	45	中世陶磁器，縄文土器，黒曜石出土
9	7.5	50	−	−	190	水田利用のための盛土
10	6	75	Ⅷ	Ⅷ	75	なし
11	6	64	Ⅷ	Ⅷ	64	なし
12	10	40	Ⅷ	Ⅷ	74	なし
13	6	30	Ⅲ	Ⅲ	35	青磁，縄文土器出土

鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　田畑　哲治
文化財研究員　森　幸一郎
調査協力　出水市教育委員会　主査　岩崎　新輔

第３節　本調査

試掘調査の結果を踏まえ，本調査は平成22年５月10日から平成23年１月28日の期間に実施した。調査組織については，以下のとおりである。

調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査責任者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所長　山下　吉美
調査企画者　次長兼総務課長　田中　明成
　　次長兼南の縄文調査室長　中村　耕治
　　調査第二課長　井ノ上秀文

	主任文化財主事兼 調査第二課第二調査係長	鶴田　靜彦
調査担当者	文化財主事	田畑　哲治
	文化財研究員	森　幸一郎
調査事務	総務係長	大園　祥子
	専門員	鳥越　寛晴
調査指導	熊本大学文学部永青文庫研究センター 所長	甲元　眞之
	鹿児島大学 准教授	本田　道輝
	教授	小林　哲夫

第４節　調査の経過

調査の経過については，日誌抄を月ごとに集約して記載する。

５月

主な調査区　Ｌ～Ｐ－22～27区

調査開始に伴う作業員オリエンテーション。調査区内グリッド設定，レベル移動。Ｌ～Ｐ－22～27区表土除去。

10日　調査開始。環境整備，プレハブ設置，重機・ベルトコンベア搬入。

24日　岩崎新輔氏（出水市教育委員会）来跡

６月

主な調査区　Ｌ～Ｐ－23～26区

主な遺構　SK４，SK６，SK８（縄文時代の土坑），SI７（中世の方形竪穴建物），SP79（中世の土師器埋納柱穴）を検出。

Ｉ･Ｊ－17～20区，Ｌ－25区，Ｍ－26区にトレンチを設定し旧石器（Ⅶ層以下）の確認を行う。旧石器時代の包含層及び遺物なし。

Ｏ－20・21区にトレンチを設定し，掘り下げを行う。遺構及び包含層なし。

11日　岩崎氏来跡

７月

主な調査区　Ｋ～Ｐ－24～27区

主な遺構　SK13（縄文時代の土坑），SB16（中世の掘立柱建物跡）検出。SK４，SI７掘り下げ。

14日　堂込秀人氏（県文化財課）視察

16日　荘小学校５年生11名遺跡見学

22・23日　甲元眞之氏調査指導

８月

主な調査区　Ｋ･Ｌ－23・24区，Ｌ～Ｏ－27～29区

主な遺構　SI19，SI40（中世の竪穴状遺構）検出。近世土壙墓群及び溝状遺構（SD36）検出，掘り下げ。

調査区西端斜面部にトレンチを３か所設定し，掘り下げを行う。斜面貝塚及び包含層なし。

２・３日　調査区西側斜面部の土砂流失対策

９月

主な調査区　Ｋ･Ｌ－23・24区，Ｌ～Ｏ－27～29区，Ｔ－33・34区

主な遺構　近世土壙墓群及び溝状遺構（SD36）の掘り下げ。

Ｍ～Ｏ－29・30区，Ｑ～Ｔ－31～34区表土除去。

６日　出水睦雄氏（出水市議会議員）来跡
　　岩崎氏来跡

10日　小里泰弘氏（衆議院議員）来跡

10月

主な調査区　Ｋ･Ｌ－23・24区，Ｌ～Ｐ－24～26区，Ｎ～Ｓ－28～34区

主な遺構　近世土壙墓群及び溝状遺構（SD36）調査終了。SD38（古代の溝状遺構）検出。

５日　後期調査開始

20日　竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学）来跡
　　有川昭人文化財課長ほか１名現地視察

22日　ツル保護対策のため，調査区境界に目隠し用遮光ネットを設置

11月

主な調査区　Ｍ～Ｏ－24～26区，Ｍ～Ｐ－28・29区，Ｏ・Ｐ－31～33区

主な遺構　SI７，SI19，SI40，SB16掘り下げ。SD38検出，掘り下げ。縄文時代後期の土坑及び配石状遺構を検出。

12月

主な調査区　Ｍ～Ｏ－24～26区，Ｏ・Ｐ－31～33区

主な遺構　SD38掘り下げ。縄文時代後期の土坑及び配石状遺構の検出，掘り下げ。

１日　ツル保護対策のため，ブルーシートから文化財保護シートへ変更

10日　空中写真撮影

16日　本田道輝氏調査指導

21日　小林哲夫氏調査指導

１月

主な調査区　Ｉ～Ｌ－16～21区，Ｍ～Ｐ－24～27区，Ｐ･Ｑ－31～34区

主な遺構　SD38掘り下げ。縄文時代後期の土坑及び配石状遺構の検出，掘り下げ。SB67（古代の掘立柱建物跡）及び古代の土坑郡の検出，掘り下げ。

Ｉ～Ｌ－16～21区表土除去。

５日　鳥インフルエンザ予防のため駐車場出入口に消毒槽設置及び消石灰散布

28日　調査終了

第５節　整理・報告書作成業務

1　整理・報告書作成作業の組織

本報告書作成に伴う整理・報告書作成作業は，平成22年度に遺物の洗浄と図面整理等を行い，本格的には平成23年４月から平成24年３月にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センター西回り整理作業所で行った。

整理・報告書作成時に係る組織は以下のとおりである。

調査主体　鹿児島県教育委員会
作業統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　所　　長　　寺田　仁志
作成企画　次長兼総務課長　　田中　明成
　次長兼南の縄文調査室長　　井ノ上秀文
　調査第二課長　　冨田　逸郎
　主任文化財主事兼
　調査第二課第二調査係長　　鵜田　静彦
作成担当　文化財研究員　　森　幸一郎
　文化財調査員　　花田　寛典
事務担当　総務係長　　大園　祥子
　主　　査　　岡村　信吾
企画委員　文化財主事　　黒川　忠広
調査指導　鹿児島女子短期大学
　教　　授　　竹中　正巳
　鹿児島大学法文学部
　教　　授　　本田　道輝
報告書作成指導委員会
　平成23年11月22日（火）　次長ほか７名
報告書作成検討委員会
　平成23年11月29日（火）　所長ほか10名

2　整理作業の経過

整理作業の経過は以下のとおりである。

平成22年度

２月　図面整理
３月　図面整理
　竹中正巳氏調査指導

平成23年度

４月　遺物の洗浄・選別，図面整理，遺構トレース，原稿執筆
５月　遺物の選別・接合・復元，図面整理，遺構図トレース，分布図作成，原稿執筆，石器実測委託，年代測定及び花粉分析委託
６月　遺物の選別・接合・復元，図面整理，遺構図トレース，原稿執筆
７月　遺物の復元・実測・拓本，図面整理，遺構図トレース，原稿執筆
８月　遺物の復元・実測・拓本，図面整理，遺構図トレース，原稿執筆，年代測定及びリン・カルシウム分析委託
９月　遺物の復元・実測・拓本・トレース，遺構図トレース，レイアウト，原稿執筆
　竹中正巳氏調査指導
10月　遺物の復元・実測・拓本・トレース，遺構図トレース，レイアウト，原稿執筆
　本田道輝氏調査指導
11月　遺物の復元・実測・拓本・トレース，遺構図トレース，レイアウト，原稿執筆，観察表作成
12月　遺物の復元・実測，レイアウト，原稿執筆，観察表作成，写真撮影
１月　校正，遺物・図面等の整理，収納作業

整理作業風景

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

外畠遺跡は，鹿児島県出水市荘上に所在する。出水平野西端の標高約 15m に位置し，紫尾水系の扇状地扇端部を流れる野田川によって形成された，河岸段丘上にある畑地帯に立地している。

現在の出水市は，平成 18 年（2006 年）３月 13 日に出水市と野田町，高尾野町の合併によって発足した。鹿児島県の北西端（北緯 32° 05′，東経 130° 21′）に位置しており，市の北側は熊本県水俣市と接し県境をなす。また，東側は伊佐市，西側は阿久根市，南側はさつま町と薩摩川内市にそれぞれ接している。

出水市の地形は，出水平野を中心に，北東は矢筈岳，南は紫尾山，北西は八代海に囲まれている。

矢筈岳は標高 687.3m の旧期火山であり，全体を構成する岩石は主なものとして，輝石安山岩である。頂上は二つの峰に分かれており，低い方を雌岳，高い方を雄岳と呼称している。この雄岳は，頂上が南北に二つに分かれており，熊本県側から見ると箭の筈のように見えた事が，名前の由来といわれている。

紫尾山は標高 1,066.8m で，九州山地の一部である肥薩地塊の主峰であり，北薩一の高峰である。西縁には花崗閃緑岩が露出しており，南部ではホルンフェルスを形成している。

この紫尾山の名前の由来には諸説ある。その一つが，継体天皇の時代に，僧侶である空覚が，山頂から麓にかけて，紫の雲がたなびいていた様子から名付けたという説である。

また，空覚により，頂上に上宮権現と呼ばれる社が建てられ，山麓には紫尾山祐答院神輿寺と，現在の紫尾神社である紫尾山三所権現が建立された。この社の名前から，別名上宮山とも呼ばれている。

出水市では紫尾山の山麓部を中心に，二種類の丘陵性でなだらかな台地が形成され，高位段丘面となり点在している。一つは，姶良溶結凝灰岩の上にシラスが覆うシラス台地である。出水平野を形成する扇状地の東側に集中して立地している。現在はシラスの採掘が行われており，一部が掘削されている。

もう一つは，不整合なシラス台地の上に砂礫層が堆積している高位段丘面である。扇状地の西側に集中して立地している。近年開発された地域であり，現在は柑橘園が広がっている。

また，出水平野には，矢筈岳や紫尾山系を水源とする多くの河川があり，河川の水城には扇状地が形成される。代表的な河川としては，矢筈岳を水源とするものに米ノ津川が，紫尾山を水源とするものに高尾野川や野田川が挙げられる。

米ノ津川は，矢筈岳山系の黒田山や朝日岳を水源としており，多くの支流と合流しながら出水市を北西に貫流し，八代海へ流入する。

高尾野川は，紫尾山を水源とし，旧高尾野町を北流して八代海に流れ込む。扇状地の中流部では，冬になると伏流水となり，涸川となる事から，古くは水無川と呼ばれていた。

野田川は，紫尾山系の一つである遠矢岳を水源とし，旧野田町の中央部を，いくつかの支流と合流しながら北流する河川である。近世以降，河口部が干拓されたことにより，高尾野川と合流するようになった。

これらの河川が，山間部から平野部に流れ出すことで，流速を低下させ，扇状に展開することによって扇状地が形成される。扇状地の扇頂には，河川が蛇行することにより，河岸段丘が形成される。出水市では，松山と野添の二つの地点を頂として扇状地が形成されており，複合扇状地となっている。

扇状地では，河川により流れ出した砂礫により，砂礫層が構成されており，下層にはローム層が堆積している。

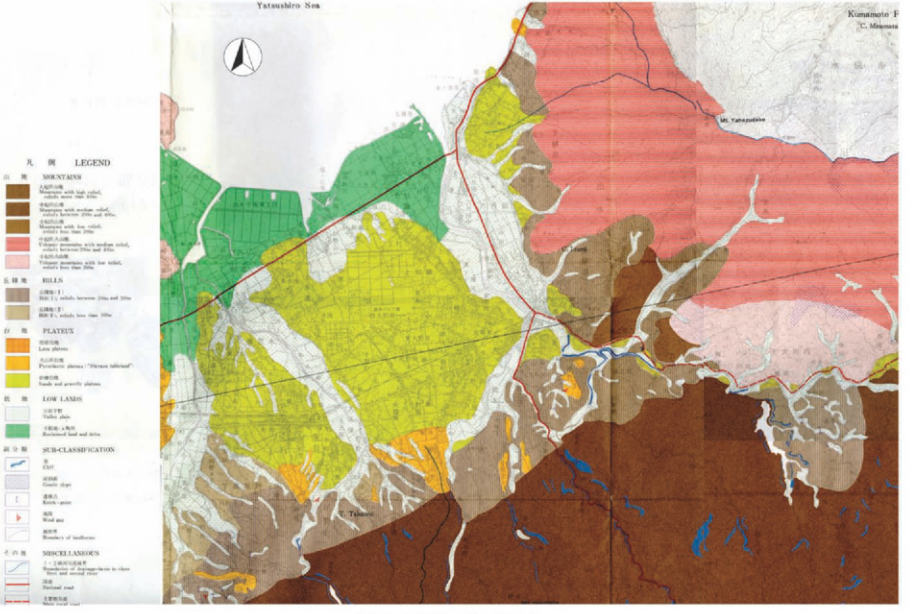
砂礫層で構成されているため，河川は地下に染み込み，ローム層の上を伏流水となって流れている。扇状地扇端部では，河川による侵食等により，河岸段丘が発達し，段丘の崖下は，ローム層が地表面に近くなる。その結果，伏流水の水面が地表に出現し，豊富な湧水がみられる。出水市では，このような地域には，古くから集落が発達している。

河川の下流では，氾濫原が沖積低地を発達させ，県内でも有数の穀倉地帯となっており，広大な水田が広がっている。また，八代海には，近世以降に作られた干拓地が続いており，水田地帯となっている。

出水の干拓地はツルの飛来地としても知られている。毎年 10 月上旬から 11 月上旬頃になると，荒崎の干拓地には，一万羽を超えるツルが飛来し，２月上旬から３月下旬頃まで越冬する。ツル及び飛来地は「鹿児島県のツル及びその渡来地」として，国の特別天然記念物に選定されている。

第２節　歴史的環境

昭和 36 年（1961 年），鹿児島県教育委員会による遺跡地名表作成事業が実施された。出水市では，当時出水高校教諭であった池水寛治氏が調査員として，出水地方の分布調査や発掘調査を行なった。これにより，旧石器時代や縄文時代の重要な遺跡が多数発見されることとなった。



第２図　地形分類図（1:200,000）

旧石器時代の遺跡としては，上場遺跡や大久保遺跡，狸山遺跡，郷田遺跡，池ノ段遺跡などがあるが，分布は上場高原一帯に集中している。その中でも，旧石器時代の代表的な遺跡として上場遺跡と狸山遺跡が挙げられる。

上場遺跡は，池水氏が分布調査の際に石器を発見し，出水高校考古学部員と共に調査を行ったことで，本県で初めて旧石器時代の遺跡であることが判明した学史的に重要な遺跡である。昭和40年（1965年）の1次調査に始まり，昭和50年（1975年）の5次調査まで行われている。

上場遺跡は，上場高原の小丘陵地に立地しており，旧石器時代から縄文時代草創期までの文化層が6枚存在している。2層下部から3層上部では，細石刃や細石刃核とともに爪形文土器が出土している。これにより，細石刃と爪形文土器が共伴することが判明している。4層上部では2基の土坑が検出されており，旧石器時代の住居として報告されている。5層のパミス混じりのローム層がATに相当しており，6層はAT下位に相当する。6層は，さらに上層と下層に分けられ，上層からはナイフ形石器や台形石器，掻器，削器，折断剥片が出土し，下層からは礫器，礫核石器が出土した。

狸山遺跡は出水高校考古学部員によって発見され，池水氏により発掘された遺跡である。2層の上部からは縄文時代前期の曽畑式土器，2層の下部と3層上部からは縄文時代早期の塞ノ神式土器，3層下部からは縄文時代早期の撚糸文土器，4層からは旧石器時代の台形石器や石核，スクレイパーが出土した。このことから，狸山遺跡では，旧石器時代から縄文時代前期にかけて，継続的に生活が営まれていたと考えられ，重要な遺跡である。

縄文時代になると，遺跡の分布域が高台から平野部へと変化する。さらに，扇状地扇端部には，荘貝塚や出水貝塚，江内貝塚といった本県では数少ない貴重な貝塚も発見されている。

外畠遺跡に近接する荘貝塚は，出水市荘に所在し，高尾野川と野田川に挟まれた扇状地扇端の傾斜面に立地する。轟式土器を主体としており，全国的にも数少ない縄文時代前期の貝塚である。

昭和43年(1968年)に発見され，その後昭和48年(1973年）の第1次調査から昭和63年（1988年）の第4次調査まで発掘調査が行われているが，いずれも貝塚の周辺部の調査しかされておらず，貝塚の大部分は現在でも残存している。

第1次調査では，貝塚の北端を確認している。また，縄文時代前期の轟式土器を主体とする貝層（4層）が確認されており，当時の放射性炭素年代測定法によってBP5,496 ± 60の結果を得ている。

第2次調査では，台地の東側を南北方向に調査が行われた。その結果，貝塚の上層に複数の文化層が発見されたため，貝塚が形成されて以降，この一帯は繰り返し生活が行われていたと考えられている。第3次・第4次調査では，第1次調査と重複する地点の調査が行われた。

調査の結果，貝塚からは巻貝と二枚貝が出土しており，イノシシやシカ，キジなどの動物骨も出土した。また石器では，貝の採取具とされる双角状石器をはじめ，石鏃や石匙などの小型の石器が多量に出土しており，貝塚特有の構成を示している。

出水貝塚は，出水市上知識尾崎に所在し，現在の海岸線から約4km離れた扇状地の縁辺部に立地する。大正6年（1917年）に尾崎の台地先端に貝殻や石斧が散布していることが発見され，大正8年（1919年）の荒田道明氏による踏査により確認された。

大正9年(1920年)に山崎五十麿氏が試掘調査を行い，調査結果を『考古学雑誌』に発表した。同年，長谷部言人氏を中心に本県で初めて貝塚としての発掘が行われ，出水貝塚と名付けられた。その後，昭和28年（1953年）に河口貞徳氏による試掘調査が，昭和29年（1954年）に山内清男氏を中心に発掘が実施されたが，縄文時代中期の人骨と埋葬遺構が発見された。また，河口氏は出水貝塚出土の深鉢を，出水貝塚を標識遺跡とする出水式土器とし，縄文時代後期に位置づけた。

最近では，平成8年(1996年）から平成11年(1999年）にかけて，出水市教育委員会によって3度の確認調査が行われた。その結果，貝塚の範囲は台地縁辺部を巡るように，延長約100m，幅約30m，面積3,000㎡であることが判明している。

貝塚以外の縄文時代の遺跡としては，中里遺跡や大坪遺跡，柿内遺跡，下柊迫遺跡，沖田岩戸遺跡などが見つかっている。

大坪遺跡は，出水市美原町に所在し，米ノ津川の東に位置する沖積低地に立地する。九州新幹線建設に伴い，埋文センターによって，平成10年（1998年）に確認調査が，平成11年（1999年）から2年間に渡って本調査が実施された。

調査の結果，縄文時代から近世・近代に至る複合遺跡であることが判明した。縄文時代では，後期末から晩期にかけての上加世田式土器や入佐式土器，黒川式土器が主体をなし，37基の埋設土器や，多くの玉類が出土しているのが特徴である。

埋設土器は，底部に穿孔がみられる深鉢である。古いタイプのものには，浅鉢が蓋として被せてあるが，新しいタイプのものには，深鉢が蓋として被せられているものが1基みられたが，原則として蓋はみられなかった。この事から，新しいタイプの深鉢には木の蓋が使用されていた可能性を指摘されている。

また，大坪遺跡では多くの玉類が出土している。玉類の出土状況は，上加世田式土器の分布域と入佐式土器の

分布域に分かれており，明確な時期差が見られ，石材や仕上げの有無などに差異が認められる。上加世田式土器に伴う玉類は，透明感のある良質な石材が用いられ，薄手で規格性がみられる。それに対し，入佐式土器に伴う玉類は，濃い緑色の石材が用いられ，大きさや形にバリエーションを持っている。また，大坪遺跡出土の玉類は，完成品の他に，製作途中のものや原石，薄片などが見つかっていることから，玉類の生産遺跡として長期的に存続したと考えられている。

弥生時代になると，遺跡が希薄になる。牟田尻遺跡などの遺跡が発見されているが，遺構や遺物の出土量はごく少量である。

古墳時代になると地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）が分布しており，代表的な遺跡として溝下古墳群や堂前古墳群が挙げられる。

溝下古墳群は，出水市文化町に所在し，米ノ津川左岸の河岸段丘上に立地している。溝下古墳群は，地下式板石積石室墓７基，石蓋土坑墓１基などに伴い，多くの副葬品が出土している。特筆すべき点として，短甲や金環が出土している点を挙げられる。それらは，当時の権威の象徴であり，全国的にも大型の前方後円墳など限られた古墳から出土している。これらの資料は地下式板石積石室墓の築制を解明する上で，重要な資料である。しかしながら，遺構の詳細が不明であるため，遺跡の評価は定まっていない。

８世紀になると，「出水」は文字資料の中に出現する。天平８年（736 年）の『薩麻国正税帳』は，国の基本財政を示すもので，正税の収納，支出を記載していることから，律令制の地方行政及び支配形態を知る上で貴重な資料である。『薩麻国正税帳』は，保管期間を過ぎた後，写経等に再利用されて断片的に残存している。その残書に，出水郡の酒や穀物などの収納や支出に関することや，国司に関することと推定される記載が，17 行確認されている。

初めて「出水」の名が確実に文献に明記されているのは，平安時代初期に編纂された『続日本記』である。宝亀９年（778 年）11 月の条によると，遣唐使が薩摩国出水郡に漂着したとされている。

10 世紀に作られた『和名類聚抄』には，薩摩の郷名が記されており，薩摩国は 13 郡 35 郷から構成されているという。その中で和泉郡は５郷で構成されている。この中の一つである出内郷は，現在の野田や高尾野に位置したとされる。平安時代になると，山門院が設立することで，山内郷は和泉郡から独立した荘園となる。その後，12 世紀になると，鎌倉幕府によって島津荘が成立し，そのため山門院は消滅することになる。

元暦２年（1185 年）８月の『頼朝下文』により，惟宗忠久が島津荘下司職に補任され，初代島津氏となる。忠久は，木牟礼城に守護所を設置し，守護被官である本田貞親を入部させた。

本田貞親は守護所とは別に，出水市野田町屋地に役所を置いたとされている。屋地に所在する中郡遺跡群では，平成 21 年度から，南九州西回り自動車道建設に伴い埋文センターにより発掘調査が実施されている。その結果，中世に該当する堀立柱建物跡や方形竪穴建物等が検出されている。また，遺物では全国的にも出土例の少ない青白磁の龍首水注が出土している。これらの調査結果から，本田貞親が置いたとされる役所と関連の深い施設が想定されている。

木牟礼城は出水市江内に所在し，シラス台地上に立地している。木牟礼城は，亀ヶ岡城や亀井山城と並び，出水市最古の城跡である。現在は残存しておらず，記念碑を残すのみである。木牟礼城は，島津家５代貞久まで薩摩国守護所として守護勢力の拠点となっていた。

建久８年（1197 年）の『薩摩国図田帳』によると，山門院は 200 町あり，その中には，大宰府天満宮の別当寺である安楽寺領老松荘が含まれている。老松荘は現在の荘地区に所在していたと推定されており，24.4 町あるとされている。老松荘は他の薩摩国内の安楽寺領と異なり，地頭が置かれておらず，在地領主がいないことから，領家安楽寺の一円支配であったと考えられる。

承久３年（1221 年）に大宰府から，国司に対して安楽寺領を侵さないように宣旨が出されている。同年には，安楽寺領に対する武士の狼藉を停止するように，幕府からも六波羅下知状が達せられている。以上のことから老松荘も，山門院郡司や守護被官本田氏などの近傍の武士からの侵略を受けていた可能性がある。

外畠遺跡は，出水市荘上に位置し，中世の方形竪穴建物や堀立柱建物跡が発見されている。外畠遺跡は，老松荘の一部，もしくは隣接地として関連の深い遺跡である。

明徳３年（1392 年）に南北朝の統一がなされた後，薩摩と大隅では総州家と奥州家に分かれて，島津氏の内部抗争が起こる。薩摩国を領した総州家の久豊は，大隅国を領する奥州家の久豊らと各地で戦った。

永享２年（1430 年）に総州家の久林が，島津忠国によって殺害された。その後，忠国は弟の用久に薩州家を興させ，出水地方を与えることになる。この時に，老松荘もその支配下に入ることで，荘園としては消滅したと考えられている。

その後，戦国期を通して，出水地方では薩州島津家の支配が続く。豊臣秀吉による朝鮮出兵，いわゆる文禄・慶長の役において，薩州家７代忠辰が，島津本家である島津義弘の軍命に背いた。このため，文禄２年（1593 年）５月１日に秀吉の命により薩州家は改易されることとなり，出水郡は豊臣家直轄の蔵入地となった。その結果，大きな混乱が起こり，出水は荒廃したとされている。

秀吉の死後，朝鮮出兵の論功行賞により，慶長４年（1599 年）に出水は島津本家の領地となり，その後江戸幕府が崩壊するまで，出水は島津氏によって支配された。

また，近世を通して出水は，島津藩の 108 外城のひとつであり，いわゆる「麓」として機能していた。その中でも出水の「麓」は最大規模である。現在に至るまで武家集落は連綿と維持され，平成７年（1996 年）に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

昭和 18 年（1943 年）になると，大野原の台地に出水基地飛行場が建設され，海軍航空隊が設置された。出水基地はその後，昭和 20 年（1945 年）に特攻隊の基地となり，200 名以上の隊員が出撃したが，同年の空襲により基地は壊滅する。

現代の出水市は，林業や水産業も行われているが，稲作を中心とする田園都市である。その他，柑橘類の生産や養鶏が盛んに行われている。

主要参考文献

池水寛治ほか 1970「鹿児島県出水市溝下古墳群」『鹿児島考古』５

池水寛治 1974「鹿児島県上場遺跡発見の住居」『鹿児島考古』９

出水市教育委員会 1979『荘貝塚』出水市埋蔵文化財調査報告書１

出水市教育委員会 1989『荘貝塚』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書３

出水市教育委員会 2000『出水貝塚』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書 11

出水市郷土史編集委員会 2005『出水郷土誌』上巻・下巻

鹿児島県企画部土地対策課 1979『北薩地域土地分類基本調査出水』

角川書店 1983『角川日本地名大辞典』

平凡社 1998『鹿児島県の地名』

第２表　周辺遺跡地名（1）

	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物等	備考
1	竹林城跡	高尾野町江内木牟礼	台地	中世		『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
2	川骨	高尾野町江内	台地	縄文，古墳	土器，成川式土器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
3	木牟礼	高尾野町木牟礼	台地	弥生（後）		
4	木牟礼城跡	高尾野町江内尾崎	台地	中世		『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
5	東雲樹	野田町下名屋地	台地	古墳～中世	成川式土器，土師器，須恵器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
6	中林	野田町下名中林	丘陵地	中世	中世磁器	
7	北山田	野田町下名	台地	近世	薩摩焼，水田跡	平成 21 年度調査
8	六枝	野田町下名六枝	丘陵地	中世・近世	青磁，染付，陶器	
9	中郡遺跡群	野田町下名中郡	台地	縄文（早），中世	土器，土師器，陶磁器	平成 21 年度調査
10	木牟礼城屋形跡	野田町下名屋地ほか	丘陵地	中世	水の手，土塁，折れひずみ	『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
11	大園	野田町下名大園	台地	中世	土師器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
12	山内寺跡	野田町下名中郡	台地	建久７年		
13	木ノ上城跡	野田町下名中郡	丘陵地	中世		『野田町郷土誌』
14	崩上城跡	野田町下名中郡	丘陵地	中世		『野田町郷土誌』
15	感応寺跡	野田町下名八幡	台地	中世（鎌倉）建立		『出水風土記』
16	大島	野田町下名瀬戸大島	台地	縄文，中世	溝状遺構，柱穴，縄文土器，土師器，須恵器，陶磁器	『大島遺跡』野田町教育委員会
17	鉄之城跡	野田町下名鉄之城	丘陵地	中世	土塁，空堀	『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
18	松ヶ迫Ａ	野田町上名松ヶ迫	丘陵地	縄文，近世	チャート，近世陶磁器	
19	野田畠	野田町下名田多園	台地	縄文～中世	竪穴建物，ピット，晩期土器，土師器，瓦質土器	『野田畠遺跡』出水市教育委員会
20	春	野田町下名下田多園	台地	古墳～中世	成川式土器，土師器，染付	『大島遺跡』野田町教育委員会
21	松ヶ迫Ｂ	野田町上名松ヶ迫	丘陵地	中世，近世	青磁，近世陶磁器	
22	桜ヶ城跡	野田町下名桜ヶ城	丘陵地	中世	土塁，空堀	『野田町郷土誌』
23	茅迫	野田町下名茅迫	丘陵地	縄文	チャート	
24	城内貝塚	野田町上名城内	山麓緩斜面	縄文，中世	貝層（二枚貝）	
25	亀井山城跡	野田町上名本城	丘陵地	保元平治期	堀，空堀，土塁，ピット	『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
26	新城跡（野田）	野田町上名新城	丘陵地	中世	帯郭，空堀，土塁	『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
27	上名遺跡群	野田町上名	低地	中世	土師器	
28	下名遺跡群	野田町下名	低地	縄文～中世	押型文土器，石鏃，土師器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
29	湯之谷	野田町上名湯之谷	丘陵地	縄文，古墳	チャート，古墳時代土器	
30	藤原	野田町上名藤原	台地	縄文，近世	黒曜石，磨石，近世染付	
31	石倉Ａ	野田町上名石倉	河岸段丘	近世	近世染付，陶磁器	
32	大迫口Ｂ	野田町上名大迫口	台地	近世	近世染付，陶器	
33	石倉Ｂ	野田町上名石倉	山麓緩斜面	縄文，近世	黒曜石，チャート石核，染付	
34	大丸Ａ	野田町上名大丸	山麓緩斜面	縄文，近世	黒曜石，チャート剥片，瓦質土器，近世陶磁器	
35	大丸Ｂ	野田町上名大丸	山麓緩斜面	縄文，近世	磨石敲石，近世染付	
36	大丸Ｃ	野田町上名大丸	台地	縄文	チャート原石，剥片，チップ	

第３表　周辺遺跡地名（2）

	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物等	備考
37	原松	野田町上名原松	台地	近世	素焼瓦、近世陶器、染付	
38	丸尾	出水市荘下	扇状地縁辺	縄文、中世	黒曜石、陶磁器	『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査等報告書』出水市教育委員会
39	桑水流	出水市荘下	扇状地縁辺	平安、中世	土師器、陶磁器	『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査等報告書』出水市教育委員会
40	荘上	出水市荘上	台地	中世（鎌倉）	土師器、青磁	
41	荘上Ⅱ	出水市荘上	台地	古代	土師器、須恵器	
42	田面	出水市荘下	扇状地縁辺	縄文、古墳	貝殻、土器、須恵器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅵ）』
43	堀ノ内	出水市荘下	扇状地	平安、中世	青磁、土師器	『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査等報告書』出水市教育委員会
44	下高尾野	高尾野町下高尾野	台地	弥生（後）		
45	**外畠**	**出水市荘上**	**扇状地扇端**	**縄文～近世**	**土坑、配石状遺構、溝状遺構、方形竪穴遺物、土壙墓など 土器、石器、土師器など**	**本報告書**
46	宮田	出水市荘下	扇状地縁辺	平安、中世	土師器、陶磁器	『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査等報告書』出水市教育委員会
47	松ヶ角	高尾野町唐笠木	台地	古代	土師器	
48	小村	出水市荘上	扇状地	平安、中世	土師器、陶磁器	『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査等報告書』出水市教育委員会
49	松ヶ野	高尾野町下高尾野	台地	縄文、古墳、中世	貝殻円筒形土器、土師器、青磁、石鏃、打製石斧	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
50	出し道	高尾野町唐笠木	台地	縄文、中世	黒曜石、土器、土師器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
51	諏訪下	高尾野町唐笠木	台地	縄文、中世	貝殻円筒形土器、土師器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
52	放光寺	高尾野町下高尾野放光寺	扇状地	縄文～古墳、中世	土器、石器、人骨、土壙墓	『放光寺遺跡』鹿児島県教育委員会
53	新城跡（高尾野）	高尾野町下高尾野新城	河岸段丘	中世	堀、空堀、土塁	『新城跡』高尾野町教育委員会
54	船迫	高尾野町下高尾野高松	台地	縄文～弥生	中期土器、免田式土器	『放光寺遺跡』鹿児島県教育委員会
55	諏訪	高尾野町唐笠木	台地	縄文～弥生		
56	種馬場	高尾野町唐笠木	台地	縄文～弥生		
57	上石坂	高尾野町下高尾野上石坂	丘陵地	近世	近世陶磁器	
58	柴引遺跡群ａ	高尾野町下高尾野・柴引	台地	縄文～弥生		
59	芥田	高尾野町下高尾野芥田	台地	古代、近世	土師器、近世陶磁器	
60	本迫	高尾野町下高尾野本迫	台地	縄文、古墳、近世	縄文晩期土器、古墳時代土器、近世陶磁器	
61	道上	高尾野町下高尾野道上	台地	近世	近世陶磁器	
62	水天原	高尾野町下高尾野水天原	台地	古墳、近世	古墳時代土器、近世陶磁器、寛永通宝	
63	本城跡	高尾野町下高尾野高城	台地	中世		『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
64	高尾野焼窯跡	高尾野町下高尾野内野ノ下	山麓緩斜面	近世	大型陶器、摺鉢、窯道具	
65	建具堀	高尾野町下高尾野建具堀	台地	古墳、近世	古墳時代土器、近世陶磁器	
66	段の原	高尾野町下高尾野段の原	山腹緩斜面	縄文、近世	敲石、近世陶磁器	
67	青木	野田町上名青木	沖積地	縄文、古代、近世	土師器、近世陶器、黒曜石	
68	上平田	野田町上名上平田	沖積地	古代、中世、近世	土師器、青磁、青白磁、中近世染付、瀬戸焼、近世陶磁器	
69	七枝	野田町上名七枝	沖積地	中世、近世	中近世染付、青磁蓋筒底、産摩焼、近世陶磁器	
70	新田	野田町上名新田	沖積地	古代、中世、近世	朱塗土器、土師器、青磁、白磁、中近世染付、近世陶磁器	
71	野角	野田町上名野角	沖積地	古代、中世、近世	朱塗土器、瓦質摺鉢、青白磁、染付、鉄滓、近世陶磁器	
72	堂迫	高尾野町下高尾野堂迫	台地	中世、近世	青磁、近世陶磁器	
73	竜土山	野田町上名竜土山	台地	縄文、古代、中世	土師器、須恵器、土錘、瓦質土器、中世染付、磁器、黒曜石	
74	竹林	野田町上名竹林	台地	縄文、古代、近世	土器、土師器、近世陶磁器、黒曜石	
75	大迫Ａ	野田町上名大迫	山麓緩斜面	近世	鉄滓	
76	大迫Ｂ	野田町上名大迫	台地	縄文、中世、近世	瓦質摺鉢、近世陶磁器、チャート	
77	小野段	野田町上名小野段	河岸段丘	近世	近世陶磁器	
78	笠山Ａ	高尾野町下高尾野笠山	河岸段丘	縄文、古代、近世	黒曜石、チャート、土師器、近世陶磁器	
79	山仁田	野田町上名山仁田	河岸段丘	縄文、中世、近世	中近世染付、黒曜石	

第３図　周辺遺跡位置図（1:25,000）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法（第４図）

外畠遺跡は，標高約 13 ｍの出水平野を形成する扇状地の扇端に位置する。遺跡の西端は野田川によって形成された河岸段丘となる。野田川を挟んだ西岸の丘陵には，同じく南九州西回り自動車道建設に伴い発掘調査が行われた中郡遺跡群が所在する。

調査区の設定は，２級基準点「基Ⅱ－９」（世界測地系 X＝－102038.850，Y＝－67893.909，H=17.930）を基準点とし，２級基準点「基Ⅱ－８」（X＝－101791.897，Y＝－67404.479，H=15.199）を後視点として，解放トラバースを設定し，X・Y 座標値の一の位を０とした地点に測量杭を設定した。調査区は 10 ｍ間隔に東から西へ１，２，３，北から南へ A，B，C との調査区割りを設定した。

発掘調査は，平成 22 年５月 10 日から平成 23 年１月 28 日までの作業員実働 141 日間で実施した。調査対象面積は 10,500㎡である。

調査の方法は，重機（バックホウ）によって表土を除去した後に人力による発掘を進めた。第二節で詳しく述べるが，層堆積は全体的に不安定であり，さらに，遺跡の西側の大部分はシラス（Ⅶ・Ⅷ層）まで掘削を受けている状況であった。また，遺物包含層（Ⅲ層）は，遺跡の東側から中央の一部に残存しているのみであった。そのため，地形測量は，層堆積が比較的良好な部分のみで行い，遺構検出面であるⅣ～Ⅵ層の上面で一括して測量することとした。

Ⅲ層が残存している場合の遺物の取り上げは，遺構に関係のないと判断されるものについては，グリッドごとに一括で取り上げた。その後，層堆積の状況に応じて，Ⅳ～Ⅵ層の上面において遺構の精査を実施した。また，シラスまで掘削を受けている地点においても，表土直下での遺構の検出を試みた。

M・N－16～19 区及び L～P－20・21 区，調査区西端の河岸段丘面（O～T－34・35 区）については，トレンチ調査の結果，遺構及び包含層が確認されなかったため，全面調査は行わなかった。

旧石器時代の遺物包含層の有無を確認するために，層堆積が比較的良好な地点を選んでトレンチを設定し，Ⅶ～Ⅷ層まで掘り下げを行ったが，包含層及び遺物は確認されなかった。

２　遺構の認定と検出方法

検出された遺構については，遺構の種類に関わらず検出された順に遺構番号を付与し，遺構種類の略号と組み合わせたものを遺構名称として用いた。また，調査の過程で遺構でないと判断したものについては欠番とした。

遺構は，概ね２ｍ四方以上のものを方形竪穴建物・竪穴状遺構と認定し SI の略号を用いた。２ｍに満たないものについては，土坑として取扱い SK の略号を用いた。なお，土坑のなかで土壙墓と判断されるものには ST の略号を用いた。50cm に満たないものについては柱穴と判断した。掘立柱建物跡には略号 SB を用い，構成する柱穴には建物ごとに P と番号を組み合わせた名称を与えた。それ以外の柱穴については遺構配置図に記録した後に掘り下げを行い，遺物が出土したものには SP の略号を用いた。また，石器や礫がまとまって検出されたが，掘り込みを確認できなかったものは配石状遺構とし，SX の略号を用いた。

外畠遺跡では，遺構検出面であるⅣ～Ⅵ層の上面で縄文時代後期から中世までの遺構が混在した状況で検出された。遺構は，出土遺物と埋土によって，黒褐色土のものを中世，灰褐色土のものを古代，褐色から暗褐色土のものを縄文時代後期と判断した。

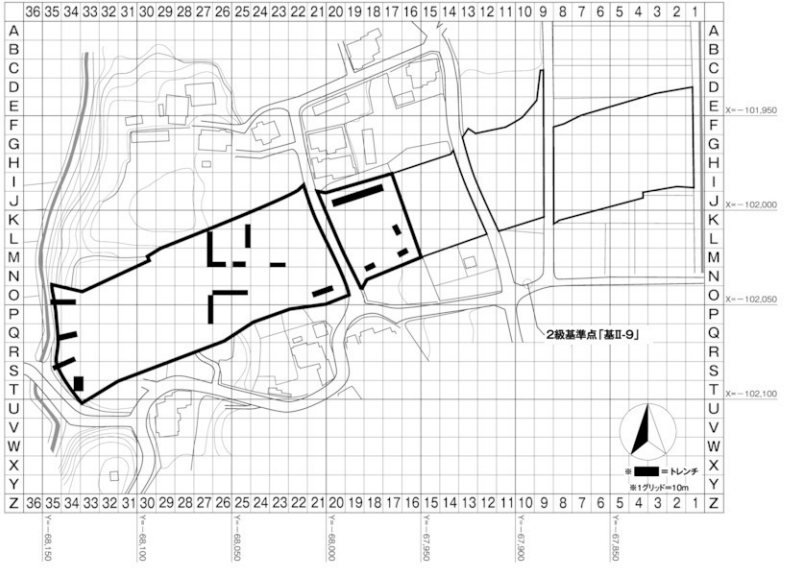
遺構の調査は，検出状況の写真撮影・実測を実施した後に，土坑については半裁，方形竪穴建物・竪穴状遺構については土層観察用のベルトを十字に設定し，４分の１区画ずつ掘り下げた。遺構の性格・状況に応じて遺物出土状況の記録作成や取り上げ，土層堆積状況の記録等を行った。遺構の認定については，埋土の状況や床面の状態，遺物出土状況等を基に判断した。

遺物の取り上げは，各時代を共通して土器の小破片については，掘り下げ時に，グリッドごとに一括で取り上げた。大型の土器片や石器類については検出面での遺物出土状況を観察し，遺構の検出を行った後，遺構に関係の無いと判断されるものについてはグリッドごとに一括で取り上げを行った。

３　整理作業の方法

遺物の水洗いは平成 22 年度中にその大半を実施し，残りを平成 23 年度に実施した。水洗作業の方法は，土器や陶磁器類，礫石器類に関してはブラシを用いたが，黒曜石や安山岩製の剥片石器類については超音波洗浄機を用いた。

注記は，注記記号「H ハタ」を頭に，包含層・表土から出土した遺物には続けて「区」，「層」の順番で記入した。遺構から出土した遺物については，「H ハタ」に続いて「遺構名称」，「取り上げ番号」を記入した。なお，土器の爪先大の小破片や摩滅の著しいものについては注記を省略した。



第４図　グリッド配置図・トレンチ配置図

遺物の接合は，土器類と陶磁器類を中心に行った。まず，土器類と陶磁器類の抽出・分類を行い，種類ごとに同一遺構内，同一グリッドでの接合作業を行い，徐々に接合範囲を広げていった。文様や胎土が特徴的なものに関しては適宜抽出して接合を行った。石器類については，石皿の破片のみ接合を行った。

4　出土遺物の分類について

(1)　土器類・陶磁器類

外畠遺跡では，包含層の残存状況が悪く，さらに沖積地という遺跡の立地状況から，縄文時代から近代に至る遺物が混在する状況で出土した。そのため，出土遺物の大部分については，整理作業の段階で時代・時期の判断を行った。分類については，各時代・時期に選別した後に行った。分類の視点・基準は時代・時期ごとに異なり，各節に詳しい。

(2)　石器類（第４・５表）

石器及び石材の分類は第４・５表のとおりである。石材の分類は肉眼観察を基本として，質感・不純物の混入具合等をもとに分類した。

剥片やチップ類については，石材の細分・石材産地の推定を可能なものはそれを行い，それぞれの出土量を重量で計測した。

第２節　層序

外畠遺跡の基本層序は第５図のように整理した。外畠遺跡は扇状地の扇端に立地し，土層の堆積状況が全体的に悪い。遺跡内における傾向として，東から西に向かって堆積はより不安定になる。なお，分層及びテフラの認定については，小林哲夫氏の指導を受けた。

Ⅱ層は黒褐色でしまりがない。斜面や凹地などごく一部にのみ堆積が確認された。

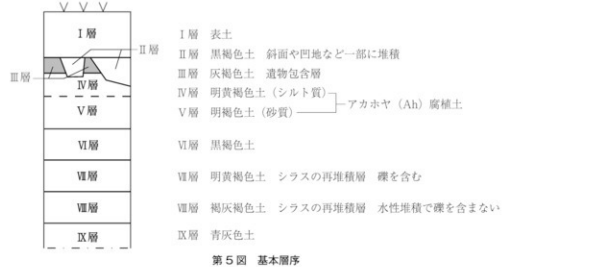
Ⅲ層は遺物包含層である。灰褐色でしまりがよい。縄文時代から中世までの遺物が混在していた。調査区の東側から中央部にかけての一部にのみ堆積が確認された。

Ⅳ層及びⅤ層はアカホヤ火山灰（Ah）の腐植土である。本来は同一のものであるが，調査区で土質が異なり，調査区の東側のシルト質のものをⅣ層，中央から西側の粒子が粗い砂質のものをⅤ層と区別した。

Ⅵ層は黒褐色で地点によって土質が異なる。調査区の西側ではしまりのないシルト質で，調査区の中央付近では粘性が強く，よくしまる。

Ⅶ層は明黄褐色の砂質で，１～３cm 程度の礫を含む。シラス（入戸火砕流由来）の再堆積層である。Ⅷ層はシラス（入戸火砕流由来）の水性堆積で，礫を含まない。

Ⅸ層は青灰色のシルト質で，粘性が非常に強く，とてもよくしまる。また，Ⅷ層とⅨ層の境界で湧水がみられる。



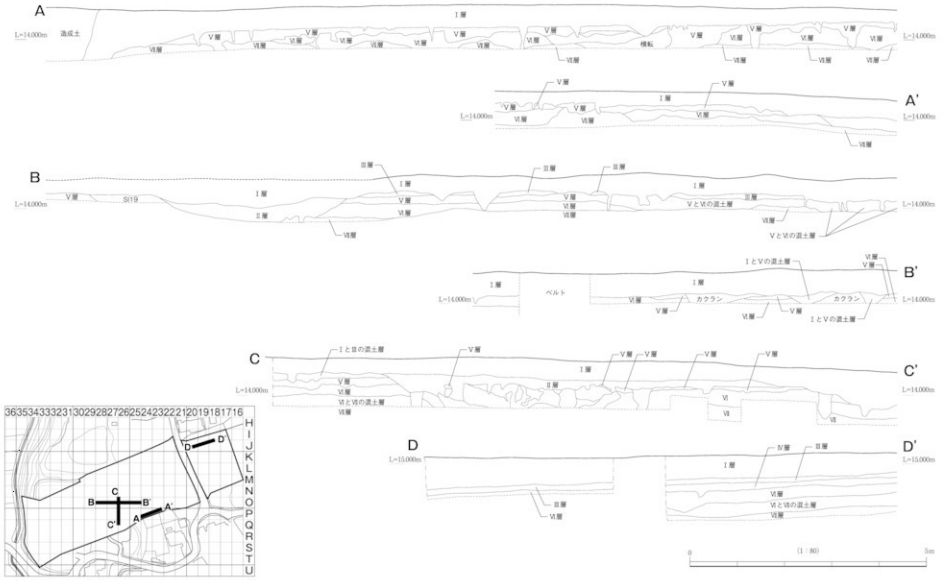
第５図　基本層序

第４表　石器分類表

器種	分類		概要
剥片石器	石鏃		剥片を素材として両側縁部に押圧剥離を施してある小型から中型の三角形状の石器群を石鏃とした。
		1	全体の形状がほぼ正三角形
		2	全体の形状がほぼ二等辺三角形
		3	全体の形状がほぼ五角形
	スクレイパー		剥片の素材などに二次加工を行い，刃部整形を施してあるものをスクレイパーとした。
	石匙		スクレイパーにつまみ部を作り出したものを石匙とした。
	楔形石器		ピエス・エスキーユとも称される。表面観は方形で，上縁端部及び下縁端部は直線的でほぼ平行に位置する。刃部断面観が凸レンズ状に鋭角をなす。基部及び刃部には使用による微細剥離痕が両面に観察される。
	ドリル		穿孔あるいは穿穴に使用された加工道具。つまみ部と棒状の錐部を有し，主要剥離面や礫皮面をつまみ部とするものなどがある。
石核			剥片石器素材の剥片を採取した残存石材。
石製品			上記石器に該当せず，用途が不明なもの。
礫石器	磨製石斧		礫に剥離調整や敲打調整を加えて形を整え，砥石で磨いた斧型の石器。 縄文時代以降に盛行するが，旧石器時代にも刃部の一部を磨いた局部磨製石斧や刃部磨製石斧がみられる。
	打製石斧		縄文時代後期以降に盛行する。形態的には短冊形，撥形，有肩形などがある。扁平な礫の周縁から剥離調整で加工される。
	磨石・敲石類		礫を素材とし，磨面・敲打痕・凹みのいずれかを有する。複数の機能を併せ持つものもある。
	石皿・台石		大礫を利用し，磨面・凹面を有する。周縁を敲打整形したものもある。
	砥石		礫を利用し，削痕が確認されるもの。
	石錘		左右一対の抉り部を有する。抉り部以外の側面に敲打痕等は確認できない。

第５表　石材分類表

器種	分類	概要
黒曜石	1	黒色のガラス質で，不純物が多く，光を通す黒曜石である。伊佐市日東周辺で産出する黒曜石に比定される。
	2	飴色のガラス質で，不純物をほとんど含まない良質の黒曜石である。伊佐市から熊本県人吉市の桑ノ木津留で産出される黒曜石に比定される。
	3	漆黒の弱ガラス質で不純物を含み，光を通さない黒曜石である。薩摩川内市樋脇町上牛鼻周辺で産出する黒曜石に比定される。
	4	黒色のガラス質で，不純物をまったく含まない良質の黒曜石である。佐賀県伊万里市腰岳で産出する黒曜石に比定される。
	5	黒色ガラス質で，白い小さな粒子が多く含まれ，ややざらつき感がある良質の黒曜石である。産地の推定は難しいが，県内産ではなく，西北九州産と推定される。
	6	青灰色の弱いガラス質で，不純物の少ない良質の黒曜石である。長崎県佐世保市針尾周辺で産出する黒曜石に比定される。
	7	灰白色の弱ガラス質で，ややざらつき感のある黒曜石である。大分県姫島村で産出する黒曜石に比定される。
安山岩	1	一般的な安山岩。輝石や石英，角閃石を多く含み，基質はややざらついた質感を呈する。
	2	一般的な安山岩に比べ，青灰色を呈する。
	3	一般的な安山岩に比べ，多孔質である。
蛇紋岩		緑色を基調とし，白色の斑紋が入る。
頁岩		泥や粘土の固結した岩石で，平行な平面で割れる傾向がある。黒色のものが多いが，褐色系の色のものもある。非常に細粒で，肉眼では粒子の識別が出来ないものが多い。粒度均質。さびが付着するものもある。
砂岩		砂粒・石英粒が集合して固まった堆積岩の一種。
ホルンフェルス		硬質化が著しく，鉱物が相累なって帯状もしくは斑状を成すもの。
チャート	1	灰色に黒い縞状を呈する。
	2	白色を呈する。



第６図　土層断面

第３節　調査の成果

１　縄文時代の調査

（１）　調査の概要（第７・８図）

縄文時代の調査は，主にＭ～Ｐ－23～28区で行った。第２節で述べたとおり，調査区全体の層堆積が非常に不安定で，残存状況も悪かった。そのため，遺構の検出は，Ⅲ層が残存している地点ではⅢ層直下で行い，それ以外の地点では表土直下で試みた。ほとんどの遺構は表土直下で検出された。

Ⅳ層以下の堆積状況も均一ではないため，遺構の検出は調査区の堆積状況に応じて行った。遺構検出面はⅣ層，Ⅴ層，Ⅵ層のいずれかということになる。このことは，古代及び中世の遺構についても同様のことを指摘できる。したがって，外畠遺跡に関しては各時代の生活面から下層で遺構を捉えていることになる。

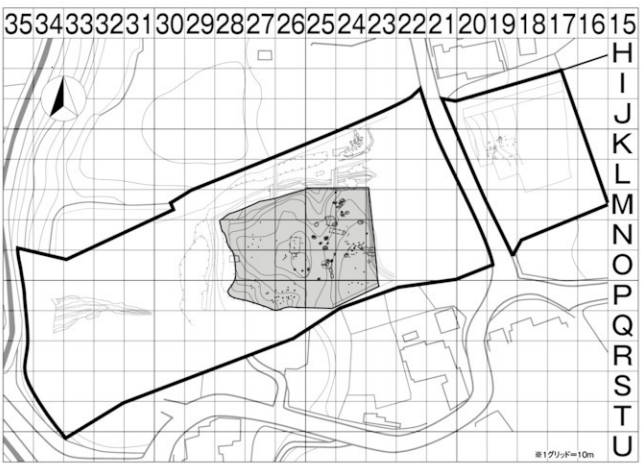
調査区の西側はシラスまで掘削を受けており，縄文時代の遺構を確認することはできなかったが，古代の溝状遺構（SD38）の埋土中から縄文時代の土器と石器類が多量に出土しており，縄文時代の遺構は調査区全体に拡がっていた可能性を示唆している。

縄文時代の遺構埋土は，褐色から暗褐色であり，土色・土質ともにⅣ～Ⅵ層に非常に類似しており，検出作業は困難を極めた。遺物や礫の散布状況を参考にし，遺構の存在の可能性がある地点では，わずかな土色・土質の違いを頼りに平面プランを推定した。平面プランが不明瞭なものについては，先行してトレンチを設定し，掘り込み等の有無の判断を行った。

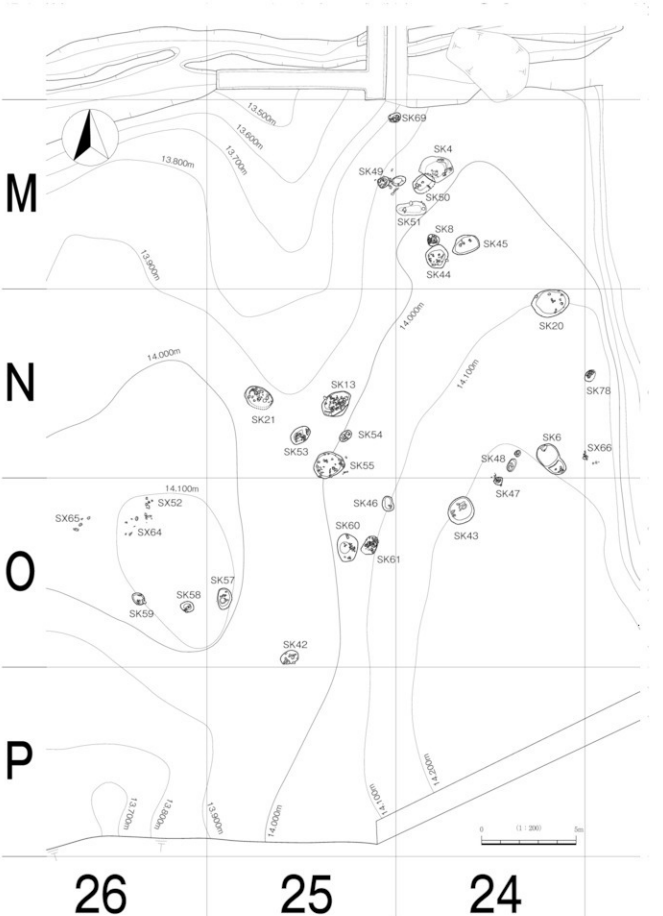
最終的に土坑26基，配石状遺構４基を検出することができたが，検出できなかった遺構もあると考えられる。

遺構の調査は，各時代を共通して，検出状況の記録写真を撮影し，必要に応じて検出状況の実測を行った。その後，半截もしくは土層観察ベルトを設定し，埋土の堆積状況を観察しながら掘り下げを行った。土坑の床面の判断は，埋土堆積状況の変化や埋土に含まれる炭化物の有無，硬化面等の把握に依った。床面の不明瞭なものについては，完掘後に断ち割りを行ったものもある。

遺構の配置状況は第８図のとおりである。検出された遺構は土坑と配石状遺構であり，住居跡や集石などは検出されなかった。ほとんどの土坑は石皿等の石器類や自然礫を伴っており，それが遺構検出や認定の大きな手がかりとなった。



第７図　縄文時代の調査範囲（アミの範囲）



第８図　縄文時代の遺構配置図

(2) 遺構

ア 土坑

土坑は26基検出された。全てⅤ層もしくはⅥ層上面での検出である。土坑にはいくつかのパターンがみられ，以下のように4つに分類した。

1類 石皿・台石の完形品ないし大型の破片，あるいは扁平な大型の礫を伴うものを1類とした。比較的掘り込みがしっかりしているものが多い。埋土に含れる土器片が少ないものと，大型の破片を含むものの2パターンがみられる。

2類 2類は，掘り込みはある程度深く，しっかりしているが，1類とは異なり石皿・台石を含まない。遺物が豊富に出土する。

3類 掘り込みが浅いものを3類とした。石皿・台石の破片を伴うものが多い。

4類 小型のものを4類とした。

ただし，上述のように，遺跡の残存状況が悪いため，本来の形状に即した分類ではない可能性がある。

(ア) 1類

1類の土坑は9基検出された。ただし，SK59については，3類に含めた方が良いかもしれない。

SK4（第9～12図）

検出状況 SK 4は，M－24区のⅤ層上面で検出された。遺構は中世の土坑（SK10・SK15）及び縄文時代の土坑SK50に切られる。さらに，中央から南西側は植物による撹乱を受ける。

切り合い 調査当初は単一の土坑であると考えていたが，埋土の堆積状況から，埋土1～3までの土坑Bと，埋土5・6の土坑Aの二つの土坑が切り合っていると判断した。

埋土 埋土は褐色から暗褐色を呈し，シルトから砂質で，Ⅳ層及びⅤ層に類似する。土坑Aの埋土の方が，土坑Bのものと比較して粘性が強くよくしまる。

形状・規模 平面形は土坑A・Bともに楕円形であったと想定される。規模は現状で，長軸147cm，短軸145cm，検出面からの深さ32cmである。想定される土坑Bの規模は，長軸約120cm，短軸約110cmである。

遺物 遺物は，完形の小形壺形土器が1点，石皿・台石が3点，土器の小破片が10点，礫12点，黒曜石チップ1点が出土した。出土状況から小形壺形土器（1）と石皿・台石（8）は土坑Bに伴うものであり，磨石・敲石類（4・5）及び石皿・台石の破片（6・7），礫は土坑Aに伴うものであると判断した。土器3点，石器5点を図化した。

土器 1は小形の壺形土器である。色調は浅黄色を呈し，胎土に1～3mm程度の白色の鉱物を含む。大きさは，器高9.3cm，口径4.7cm，頸部の最大径7.4cm，胴部の最大径10.6cmである。口唇部は幅1.5cm程度で平坦に作り出される。器壁は厚く，底部が2.0cm，胴部が1.0cm程度である。胴部は球形に近い形状をしているが，胴部の張り出す高さは一定ではなく，器形は歪む。面Aは，器面の調整が丁寧で，張り出した部分の稜がはっきりしている。面B・Dから面Cに向かい，器面の調整が雑になり，張り出しの稜が不明瞭になる。

口唇部及び胴部全体に，幅1～3mmの沈線で文様が描かれ，さらに刺突による擬似縄文も施される。口唇部の沈線文は，内から外に向かって鋸歯状の文様構成となる。頸部には，径が最小となる箇所に横方向の沈線が1周巡るが，沈線は最低7回に分けて施されている。

胴部は，面Aでは直線と曲線を組み合わせた抽象的な沈線文が描かれるが，面B～Dでは直線的な沈線2本1組を基本とし，菱形あるいは渦巻き状の文様が構成される。底部にも沈線が数本みられるが，文様は構成していない。

擬似縄文に規則性は確認できないが，菱形状の沈線文の中心付近に径2mm程度，深さ1～2mmで他の擬似縄文と比較して大きく深い刺突が行われる箇所がある。

胎土及び器面の調整，施文方法，文様構成から，縄文時代後期の磨消縄文系土器の影響を受けたものであると判断される。なお，第10図の実測図では，表現が煩雑になるため，擬似縄文は省略した。

2は土坑B埋土2から出土した。胎土中に1～3mm程度の白色の鉱物を含み，胎土は1のものと類似する。口縁を肥厚させ，口唇部に刻目状の沈線が施される。また，肥厚した口縁部が薄くなり胴部へと変化する箇所には，刺突状の痕跡もみられる。3は深鉢の底部である。検出面出土のものと接合したため混入の可能性がある。

石器 4・5は砂岩製の磨石・敲石類である。4は被熱により破砕している。4・5ともに表裏両面に磨面が認められ，側面には敲打痕が観察できる。4の裏面は，中央付近が凹む。

6～8は石皿・台石である。6は砂岩製である。表面中央部に凹凸のなめらかな面が，その周辺にざらざらした粗い面が残されている。中央部のなめらかな面は凹部にも及んでいるため，単純な磨り作業によるものと断定できない。7は安山岩製で，約4分の3が欠損している。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。使用面には顕著な光沢は認められないものの，明確な凹みがある。

8は安山岩製であり，欠損している。表面中央には使用による浅い凹みがあり，結果左側縁と前方に縁が残っている。右側縁は欠損しており，縁の有無は不明であるが，手前には縁は見られない。

SK6（第13・14図）

検出状況・切り合い　SK 6はN－24区のV層上面で検出された。SK 6も調査当初は単一の土坑と想定していたが，埋土堆積状況から，埋土1と埋土2のそれぞれが個別の土坑であると判断した。埋土は褐色から暗褐色で，シルト質である。

形状・規模　現状での平面形は，南北に長い楕円形で，規模は長軸192cm，短軸115cmである。検出面からの深さは，埋土1で29cm，埋土2で18cmである。断面形は，埋土1の土坑は，床面はほぼ平坦で，壁面の立ち上がりが明瞭で箱形となる。埋土2の土坑の断面形は，すり鉢状になると想定される。

遺物　遺物は，土器片44点，石器3点が出土した。土器片は小破片で摩滅しているものが多い。土器4点，石器3点を図化した。

土器　9～11は口縁部である。9は表面が摩滅している。口縁部が断面三角形で，市来式土器系の土器である。10・11は埋土1から出土した。10は，口縁部が断面三角形で，大きく開く。口唇部には刻目状の刺突文が施され，口縁部直下には，幅1mm程度の沈線文が巡る。11は，色調がにぶい黄色を呈する。胎土は1～3mm程度の鉱物を含み粗粒だが，内外面には丁寧なナデが施されていて，非常にきめ細かい。口唇部を平坦にして，刻目状の沈線文が施される。12は深鉢の胴部で，埋土2から出土した。

石器　13・14は埋土2から出土した。13は安山岩製の磨石・敲石類である。表裏面に磨面が形成される。14は頁岩製の打製石斧である。刃部及び基部の一部が欠損している。剥離により器体の整形を行っている。

15は安山岩製の石皿・台石である。検出面に一部露出し，埋土1から立位で検出された。表面は真っ平らで，使用による光沢が高い部分にのみ確認される。片側の側縁には表面側からの連続する剥離痕が観察される。

SK8（第15～17図）

検出状況　SK8はM－24区のV層上面で検出された。SK44が南側に位置していて，南側の一部はSK44に切られる。

形状・規模　平面形は円形で，長軸67cm，短軸64cm，検出面からの深さ20cmである。断面形はすり鉢状になる。他の1類と比較して小型である。

埋土　埋土は褐色で，しまりがない。

遺物　遺物は，大型の石皿・台石1点と縄文土器20点が出土した。検出状況は，石皿・台石は横位で検出され，その上と西側に土器が重なり合うように検出された。土器9点と石器1点を図化した。

土器　16・17は，口縁部が肥厚し文様帯を形成する。16は，口唇部は面取りされ平坦で，刻目状に沈線が施される。18は，口縁部が外反する。外面に磨消縄文あるいは擬似縄文と考えられる痕跡が観察されるが，摩滅していて断定はできない。色調と胎土が24と類似する。

19は市来式土器系の台付皿形土器の口縁部である。表面の摩滅が著しい。20は器壁が薄く，胎土が層状を呈する。器面には丁寧なナデが施され，きめ細かい。詳細は不明である。21・22は深鉢の胴部である。21は大型の深鉢だが，器面の摩滅が著しく詳細は不明である。21は，色調が橙色を呈する。23と同一個体の可能性がある。

23は，深鉢である。色調は橙色を呈する。口縁部はやや肥厚し，断面三角形となり，わずかに内側に屈曲する。口縁は波状になり，波頂部のほうが肥厚が大きい。口唇部には深さ2mm程度の2本の沈線文が施される。口縁部の形態や，施文方法は松山式土器に類似する。

24は磨消縄文系土器の鉢である。胴部下半は無いが，色調がにぶい黄色を呈し，胎土が同一であること，それが他に余りみられないこと，同一の土坑からまとまった状態で出土したことから同一個体と判断し図のように復元した。胴部下半は外傾し，胴部の張り出し部に沈線文と磨消縄文，「J」の字状の渦巻状の文様が施される。鐘崎式土器の可能性が高いが，鐘崎式土器の典型的な文様ではないことを本田道輝氏に指摘された。

石器　25は安山岩製の石皿・台石である。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。特に片側側面の赤化は2～3mmの厚さに及んでおり，顕著である。いくつかに破砕しているが，被熱によるものと考えられる。使用による光沢が表面の高い部分にのみ確認され，凹みはない。

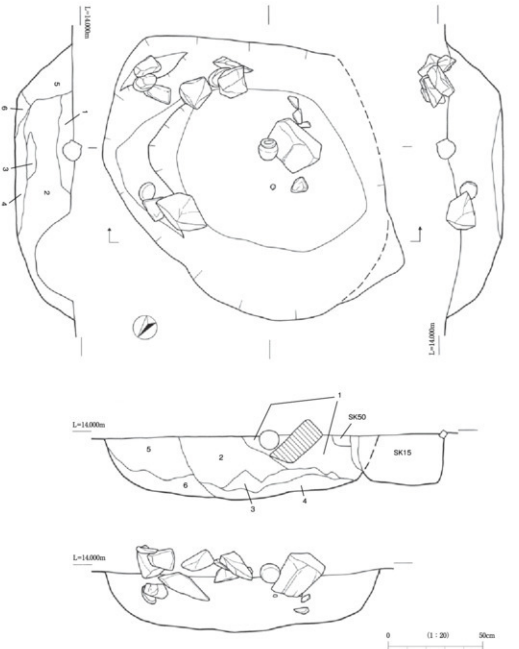
SK55（第18～20図）

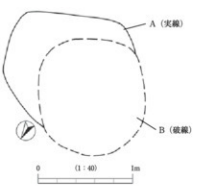
検出状況　SK55はN・O－25区，VI層上面で検出された。検出状況は礫や土器片が散乱している状況であった。平面形が不明瞭であったため，礫等の検出状況の記録作成後，長軸に沿ってトレンチを設定し，掘り込みの有無及び埋土の堆積状況の確認を行った。

形状・規模　平面形は南側が凹んだ円形で，規模は長軸163cm，短軸132cm，検出面からの深さ28cmである。床面が平坦で，壁面の立ち上がりが比較的明瞭で，断面形は箱形となる。

埋土　埋土は2層に分層され，床付近に暗褐色土が，その上にしまりのある褐色土が堆積していた。

遺物出土状況・撹乱の範囲　遺物は土器片25点，石器5点が出土した。検出面の遺物には，縄文時代晩期の土器片や土師器が含まれていた。第18図の遺物出土状況のように，晩期の土器片と土師器片が出土したレベルはL=14.000～14.100mの範囲に限られる。それは検出面付近で散乱していた礫のレベルと一致する。

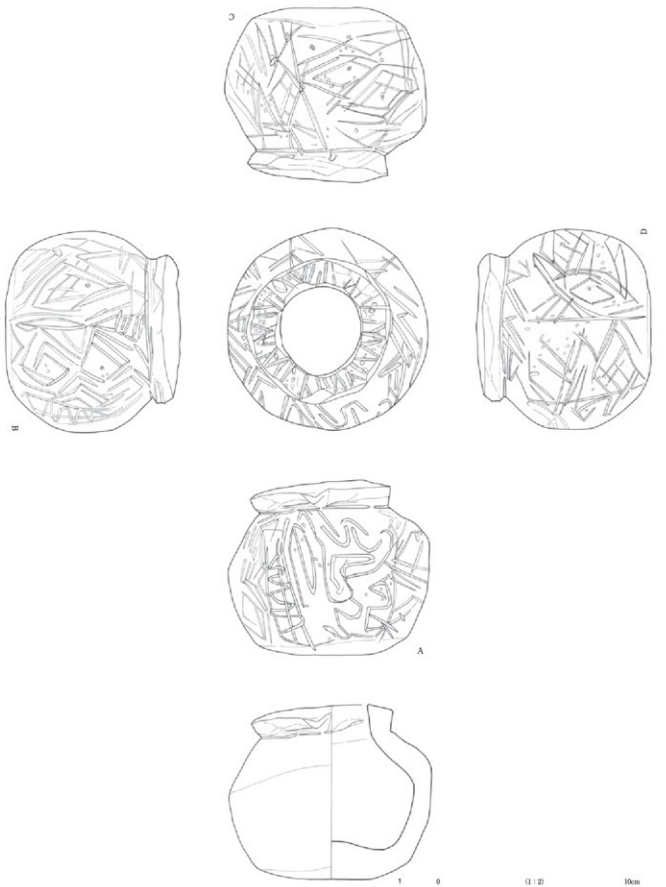




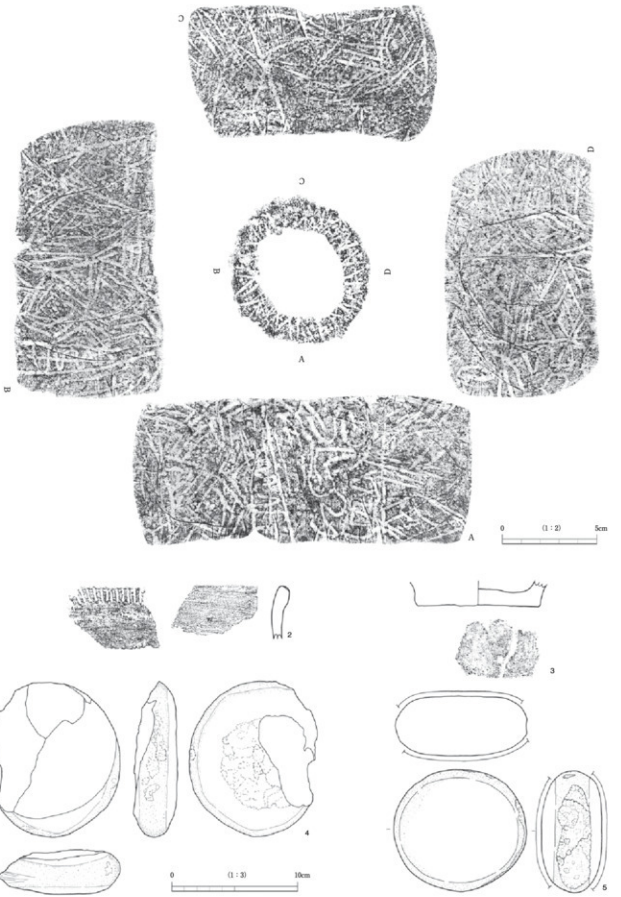
埋土注記

A	1	褐色土	(Hue10YR 4/4)	砂質～シルト質
	2	暗褐色土	(Hue10YR 3/4)	砂質～シルト質　炭化物を含む
	3	暗褐色土	(Hue7.5YR 3/4)	砂質～シルト質　しまりがない
	4	暗褐色土	(Hue10YR 3/4)	砂質～シルト質　よくしまる
B	5	褐色土	(Hue10YR 4/6)	シルト質　粘性が強い
	6	暗褐色土	(Hue10YR 3/4)	砂質～シルト質
		しまりがよく，⑤よりも粘性が強い		

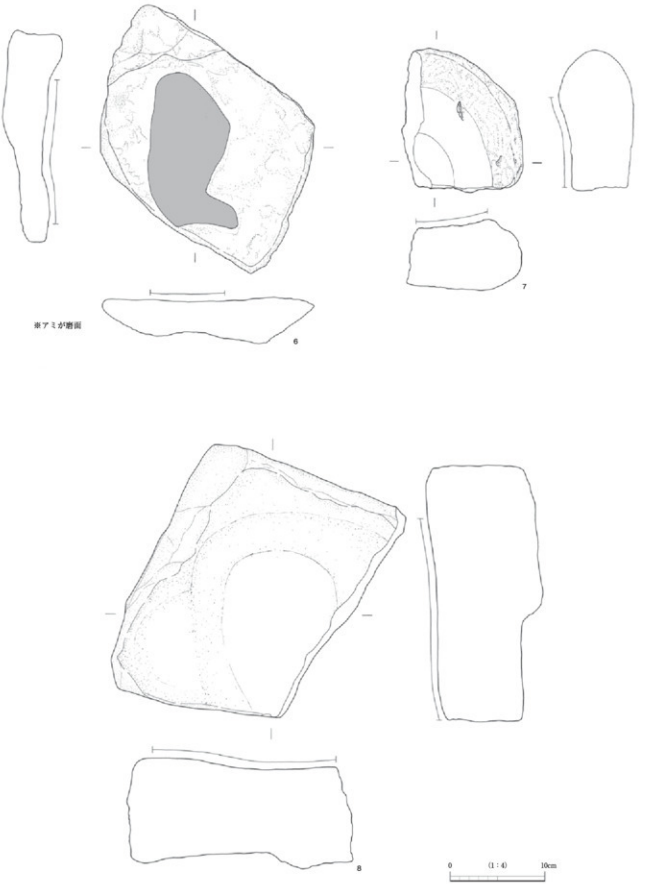
第９図　SK4



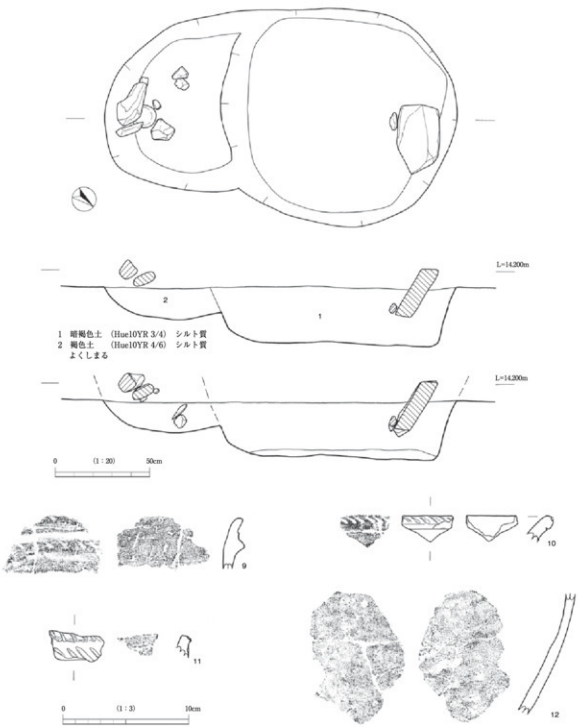
第 10 図　SK4 出土遺物①



第 11 図　SK4 出土遺物②



第12図　SK4出土遺物③



第13図 SK6・出土遺物①

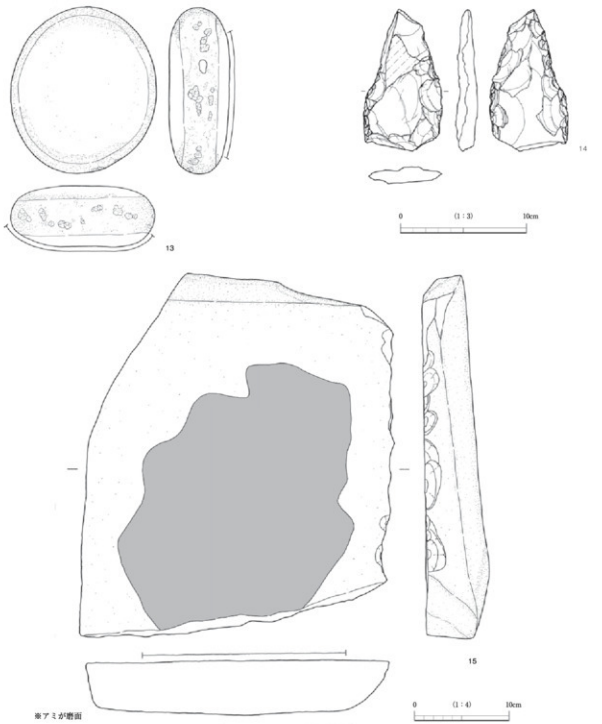
以上のことから，SK55 付近では，L=14.000 ～ 14.100m まで造成や撹乱が及んでいると判断される。したがって，埋土及び出土遺物から，SK55 は縄文時代後期の土坑であると判断した。

遺物 遺物は，検出面で出土したものを含めて，土器片7点，石器4点を図化した。

土器 26・27 は埋土から出土した。26 は，口縁が断面三角形を呈し，文様帯となる。市来式土器系の深鉢である。27 は深鉢の胴部である。胎土に角閃石を多く含む。

28 ～ 32 は，検出面で出土した。28 は無文の口縁部で，口唇部が平坦になる。29 は深鉢の胴部である。30 は上げ底状の底部で，内面に爪状の圧痕がみられる。31・32 は，内面にはミガキが施されるが，外面には条痕を残す。晩期の深鉢である。

石器 33 ～ 35 は磨石・敲石類である。33・34 は埋土から出土した。33 は扁平な花崗岩で，表裏面に凹みがみ



第 14 図　SK6 出土遺物②

られる。34 は安山岩で，表面は使用により大きく剝離する。表面の残存箇所と裏面全体に磨面が形成され，裏面の中央には凹みもみられる。35 は検出面で出土した。風化により使用痕を確認できなかった。

36 は安山岩製の石皿・台石である。上半が検出面に露出し，立位の状態で検出された。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。周辺の剝落は被熱によるものと考えられる。使用面は表裏両面ともに確認され，それぞれ顕著な光沢が見られる。表面にだけ浅い凹みがある。

SK78（第 21・22 図）

検出状況　SK78 は N － 23 区，V 層上面で石皿・台石が一部露出する状態で検出された。遺構の東側は，SX 1 及び SX 3 の調査時に設定したトレンチによって消滅した。

形状・規模　推定される平面形は楕円形で，残存する範囲における規模は長軸 66cm，短軸 49cm，検出面から

の深さ 26cm である。北西側の壁面の立ち上がりは明瞭だが，南東側は不明瞭で，断面形は，三角形状になる。

埋土　埋土はわずかに粘性のある灰黄褐色土である。

石器・礫の出土状況　SK78 は 1 類の土坑の中でも特殊な特徴を示す。石皿・台石 2 点が立位で平行に据えられ，検出面直下で，その中間から石核が 2 点検出された。その他，土坑内から 16 点の礫が出土した。石器と礫は土坑内の北側に偏り，平面長方形状に配置されていた。礫の内訳は，砂岩 13 点，頁岩 3 点である。なお，埋土中から土器は出土しなかった。

石器　石器 4 点を図化した。37 は西北九州系黒曜石の石核である。礫の表面と裏面の両面に作業面を設定し，それぞれ周縁から求心の剥離により剥片を剝出している。結果，残核が円盤状を呈している。38 は砂岩製の石核である。厚手の礫から剥片を剝出しており，打面転移により作業面は 2 か所設定されている。

39 は多孔質安山岩製である。礫周辺への敲打により，台形状に整形が行われている可能性が高い。表面には使用による浅い凹みがあり，結果左右と前方に縁が残っている。手前には縁は見られない。風化のためか，多孔質という特徴のためかは不明であるが，使用面に顕著な光沢はみられない。

40 は安山岩製であり，欠損している。使用面は表裏ともに確認され，それぞれ顕著な光沢が見られる。表面にのみ浅い凹みがある。

SK53（第 23 図）

検出状況・埋土　SK53 は N － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。埋土はにぶい黄褐色土で，植物による浸食を受け，しまりがない。

形状・規模　平面形は楕円形で，長軸 116cm，短軸 82cm，検出面からの深さ 10cm である。断面形は，床面は平坦だが，壁面の立ち上がりは緩やかではっきりしない。

礫の検出状況　土坑内からは，土器 1 点と礫 17 点が出土した。土坑の西側に扁平な砂岩が立位で出土したが，使用痕は確認されなかった。その他の礫は，土坑の中央付近で，やや散乱した状態で検出された。

土器　土器 1 点を図化した。41 は埋土中から出土した土器片である。口縁部は断面三角形を呈し，外傾する。市来式土器系の深鉢である。

SK54（第 24 図）

検出状況・埋土　SK54 は，N － 25 区，Ⅵ層上面で一部の礫が露出する状態で検出された。埋土は暗褐色で，植物による浸食を受ける。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 74cm，短軸 46cm，検出面からの深さ 14cm である。断面形はすり鉢状になる。

礫の検出状況　土坑内からは砂岩・安山岩の礫 9 点が出土した。土坑の中央からやや東側よりに，扁平な安山岩 2 点が「V」の字状に配される。ともに使用痕は観察されなかった。中央からやや西側では大型の安山岩が 1 点検出され，土坑中央には一段下がって 6 点の礫がまとまって検出された。

土器　土器 1 点を図化した。42 は SK54 の検出面で出土した。小破片であり詳細は不明である。

SK57（第 25・27 図）

検出状況・埋土　SK57 は O － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。埋土は暗褐色土で，植物による浸食を受けしまりがない。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 115cm，短軸 77cm，検出面からの深さ 11cm である。断面形は，床面は平坦で，壁面はなだらかに立ち上がる。

遺物　遺物は土器片 3 点と石皿・台石が 1 点出土した。

土器　43 は口縁を肥厚させ文様帯とする。44 は深鉢の胴部である。45 は，石皿・台石（47）の下から出土した。口縁部が肥厚し，外面の口縁部直下に二重に粘土を貼り付け，沈線状の文様を作り出している。波状口縁であり，波頂部の外面には，縦方向に粘土が貼り付けられる。北久根山式土器の強い影響を受けている。

石器　47 は安山岩製の石皿・台石である。検出状況は横位であったが，47 の下から 45 が出土していることから，本来は立位であった可能性もある。横位剥離痕が 1 か所，欠損が 1 か所確認される。使用面が表裏ともに確認され，それぞれ使用による顕著な光沢が見られるが，凹みはほとんどない。

SK59（第 26 図）

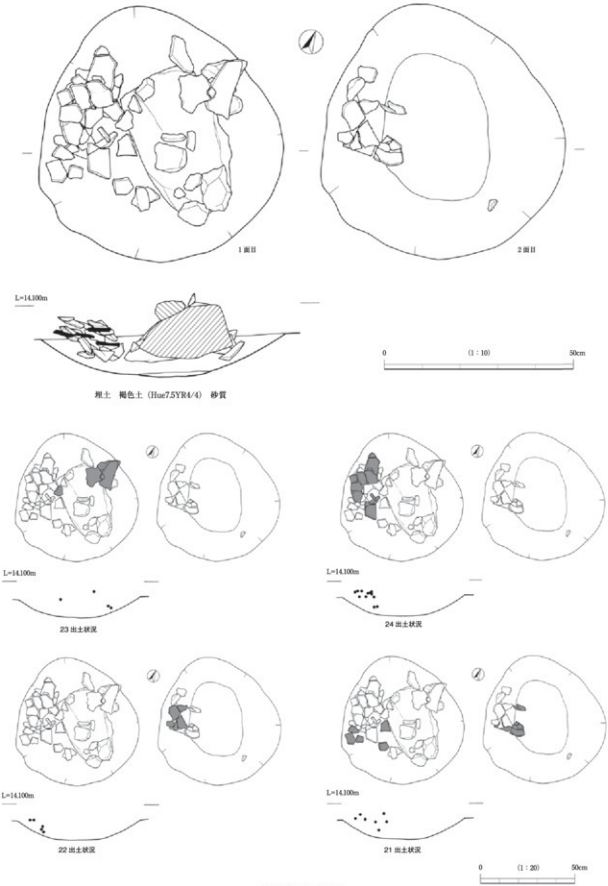
検出状況・埋土　SK59 は O － 26 区，Ⅵ層上面で検出された。検出時には土坑のプランを確認できず，大型の礫の中心を通るように実測の主軸を設定した。そのため，土坑の長軸と実測用の軸は一致しない。埋土は黄褐色土で，植物の浸食を受ける。1 類としたが，3 類のほうが妥当かもしれない。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 75cm，短軸 58cm，検出面からの深さ 10cm である。ただし，一部の礫が床面よりも下から検出されていることから，完掘していない可能性もある。

石器　遺物は，石皿・台石が 1 点出土した。46 は安山岩製で，欠損している。使用面には顕著な光沢が見られるが，凹みはない。

（イ）2 類

2 類は 5 基検出された。


1面目
2面目
L=14.100m
0
(1：10)
50cm
埋土　褐色土（Hue7.5YR4/4）　砂質
L=14.100m
23 出土状況
L=14.100m
24 出土状況
L=14.100m
22 出土状況
L=14.100m
21 出土状況
0
(1：20)
50cm

第 15 図　SK8

第 16 図　SK8 出土遺物①

SK13（第 28 ～ 30 図）

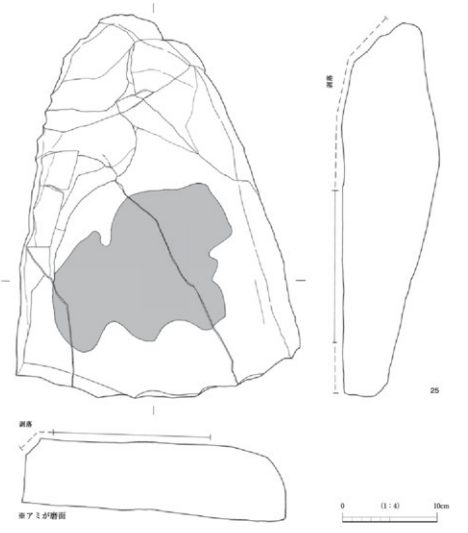
検出状況　SK13 は，N － 25 区，V 層上面で検出された。検出面では，砂岩や安山岩の礫や土器片が散乱している状況であった。

形状・規模　平面形は東西方向に長い楕円形だが，南側の掘り込みがはっきりしない。規模は長軸 174cm，短軸 125cm，検出面からの深さ 22cm である。

断面形は，床面はほぼ平坦で，壁面はやや外傾するが，立ち上がりは明瞭である。南側の壁面のみ緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は暗褐色砂質土を基本とする。

遺物　埋土中から多量の土器片が出土し，大型の破片だけでも 35 点にのぼる。大型の破片のみ出土状況を実測し，小破片は埋土一括で取り上げた。検出面付近では礫が出土したが，使用痕を観察できた石器は 1 点のみの出土である。土器 20 点，石器 1 点を図化した。



第 17 図　SK8 出土遺物②

石器　48 は砂岩製の砥石である。床面付近から出土した。表裏両面と右側面に使用痕が確認される。被熱により破砕している。

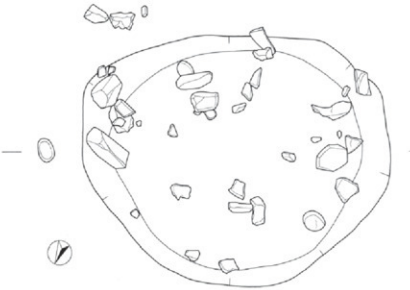
土器　49 は台付皿形土器の脚部である。検出面付近から出土した。色調は赤褐色を呈し，胎土に 1 ～ 5 mm 程度の白色の鉱物を含む。透かし孔をもち，底部の下端には，右下方向の刻目が施され，その上に 2 本の沈線文が描かれる。内面はミガキが施される。北久根山式土器の台付皿形土器である。

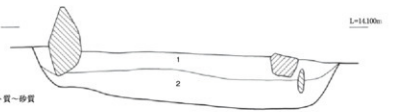
50 ～ 53 は深鉢の底部である。50・51 は，底部に脚台が付くタイプである。51 は底部内面を強く押圧した痕跡を観察できるが，胴部を制作した後に，底部に粘土を入れ，それを押し当てた痕跡だと考えられる。52・53 は平底で，安定する。

54 ～ 60 は磨消縄文系土器の鉢・浅鉢である。54 は浅鉢である。埋土中から破片の状態で出土したが，接合の結果ほぼ完形品となった。底部はやや上げ底状で，胴部は外傾する。胴部の張り出し部分に稜を形成して屈曲し，頸部となる。胴部の張り出しから，その下 1.5cm の幅で磨消縄文が施される。口縁部は断面三角形に肥厚し，口唇部の幅は広くなる。口唇部には，二重の沈線と，刻目が施される。口縁部の一部は張り出し，上方向から穿孔された 4 つの孔が文様の特徴となる。口唇部の張り出しは現状では 2 か所だが，口唇部の形状と，刻目の文様構成から，本来は 4 か所に設定されていたと想定される。ただし，文様の種類は不明である。

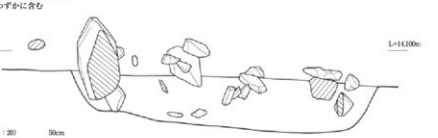
55 は口縁部で，沈線文と磨消縄文がみられる。外面と口唇部に赤色顔料の痕跡が認められる。56 は胴部の屈曲部で，外面に沈線文と刺突文がみられる。55 と 56 は色調と胎土が同一である。57 は，幅の広い縄文地による磨消縄文が施される。

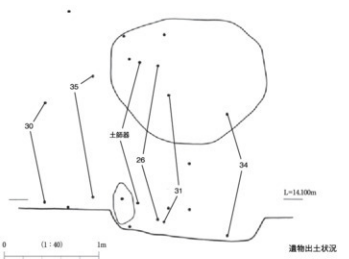
59 は浅鉢である。54 と同様に，胴部張り出しに稜が形成され，屈曲するタイプだと思われる。内外面に丁寧なミガキを施し，外面の胴部張り出しに 2 点の刺突文が確認される。60 は鉢である。内外面に丁寧なミガキが施される。胴部張り出し付近に，沈線文と磨消縄文がみ



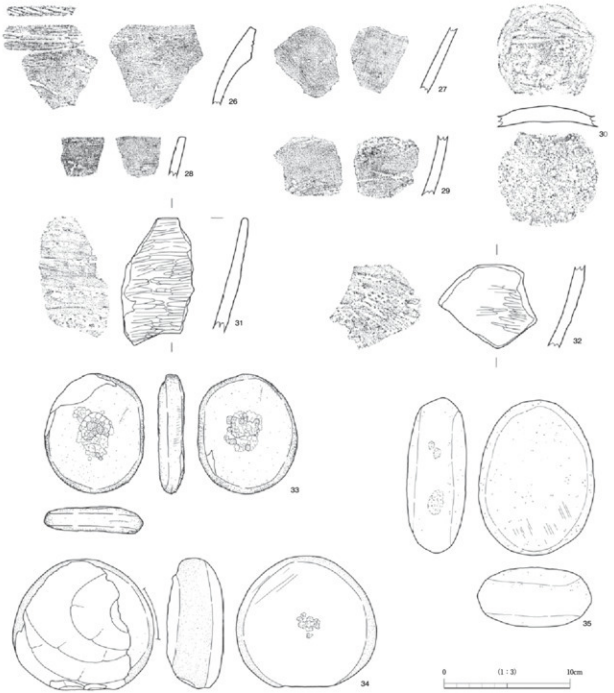


1　褐色土　（Hue7.5YR 4/4）　シルト質～砂質
　粘性があり，よくしまる
2　暗褐色土（Hue10YR 3/4）　砂質～シルト質
　3～5mm 程度の小礫をわずかに含む





第 18 図　SK55



第19図　SK55出土遺物①

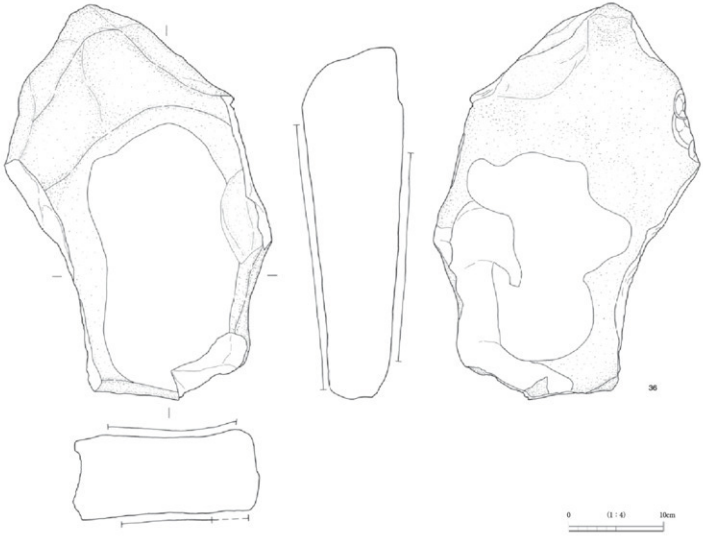
られる。胎土に角閃石を多く含む。

61～68は深鉢である。61は小型の深鉢で，口縁部は断面三角形で，口縁部付近が文様帯となる。口唇部は平坦で，沈線文が施される。62・63は同一個体の可能性がある。口縁部を肥厚させ，文様帯が形成される。

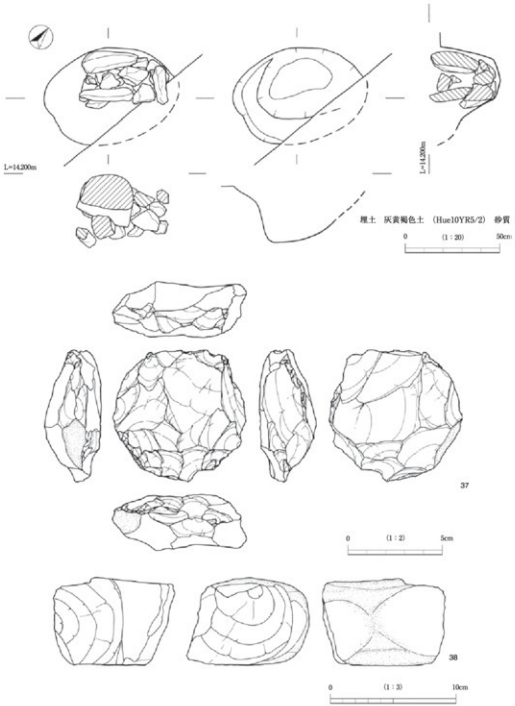
66は，内外面にミガキが施されている。深鉢としたが，鉢の可能性もある。67は胴部が張り出し，口縁部が外傾する形状になると思われる。68は大型の深鉢だが，表面が摩滅している。

SK20（第31･32図）

検出状況・形状・規模　SK20はN－24区，Ⅴ層で検出された。平面形は東西に長い楕円形で，規模は長軸202cm，短軸145cmで，今回の調査で検出された縄文時代の土坑で最大となる。Ⅴ層上面での検出作業段階で，SK20周辺には土器片が集中して出土したが，平面プランが不明瞭であり，Ⅴ層をやや掘り下げた段階で平面プランを確定した。そのため，本来はさらに大型の土坑であった可能性もある。



第 20 図　SK55 出土遺物②



第 21 図　SK78・出土遺物①

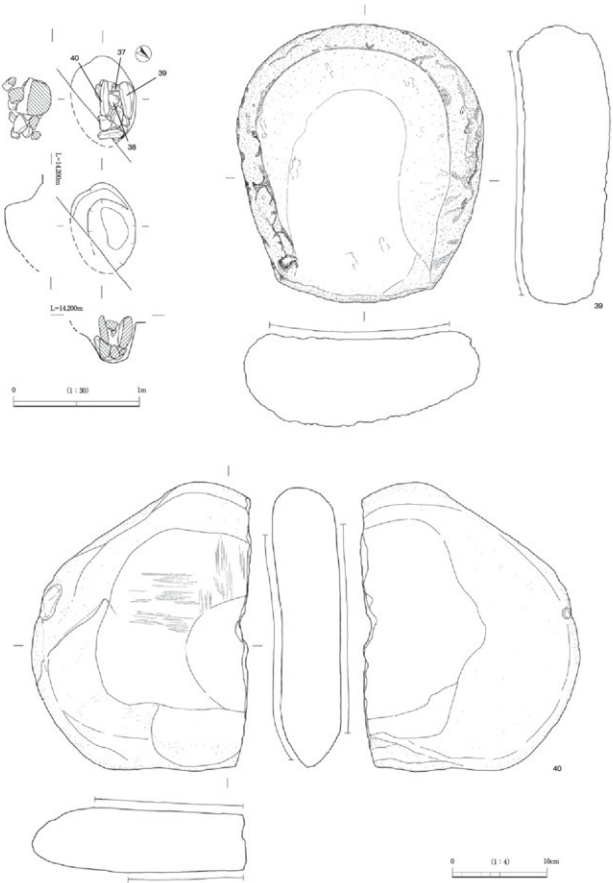
検出面からの深さは 20cm で，断面形はすり鉢状になる。

埋土　埋土は暗褐色から褐色土を基本とする。

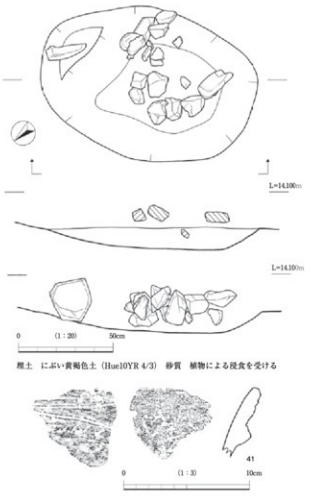
遺物　遺物は，土器片 104 点，礫 4 点，埋土 1 から炭化種子 1 点が出土した。土器 16 点を図化した。

土器　69 は口縁部が外反する。口縁部を肥厚させ文様帯とし，沈線により文様が描かれる。70 は摩滅が著しい。71 は胎土の色調がにぶい黄橙色を呈し，SK 8 出土の 18・23 と類似する。口縁部はやや肥厚し断面三角形状になり，外反する。

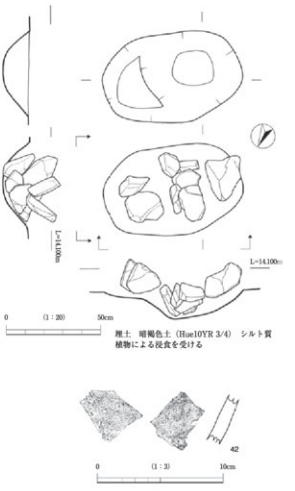
72・73 は深鉢の胴部である。74 は内面にミガキ様のナデが施され，鉢か浅鉢の可能性がある。76 は器種不明だが，内面には工具痕がみられる。75 は，器壁が厚手で，色調がにぶい黄橙色を呈する。77 は器壁が薄手で内傾し，内外面に貝殻条痕がみられる。78 は胎土中に 1 ～ 3 mm 程度の鉱物を含み，外面に貝殻による条痕がみられる。



第 22 図　SK78・出土遺物②



第 23 図　SK53・出土遺物



第 24 図　SK54・出土遺物

79 は深鉢の底部で，平底で安定する。80 は脚台タイプの深鉢の底部で，指頭による押圧の痕跡が観察できる。

81･83 は，磨消縄文系の鉢・浅鉢である。81 は口縁部で，口唇部に刺突文が施され，さらに一部が張り出す。83 は胴部で，色調が赤褐色を呈し，胎土に黒雲母を含む。外面には沈線文と磨消縄文が施され，内面の上部にも沈線文状の凹みが 3 か所みられる。

82 は浅鉢の胴部で，胴部が張り出し稜を形成して屈曲するタイプになると想定される。外面の張り出し部の下には幅 1 mm の沈線文が描かれる。

84 は台付皿形土器の脚部である。内面にはミガキが施され，外面の下部に 2 本の沈線文が巡り，一部に貝殻による刺突文も施される。市来式土器の台付皿形土器と判断したが，他の遺跡で出土しているものよりも大型であるという指摘を，本田道輝氏から受けた。

SK44（第 33 図）

検出状況　SK44 は M － 24 区，V 層上面で検出された。SK 8 と切り合いが認められ，SK44 が SK 8 を切る。東側 20cm には SK45 も隣接する。

形状・規模　平面形は，南側がやや突き出た円形で，規模は長軸 124cm，短軸 120cm，検出面からの深さ 14cm である。断面形はすり鉢状になる。

埋土　埋土は暗褐色土を基本とする。

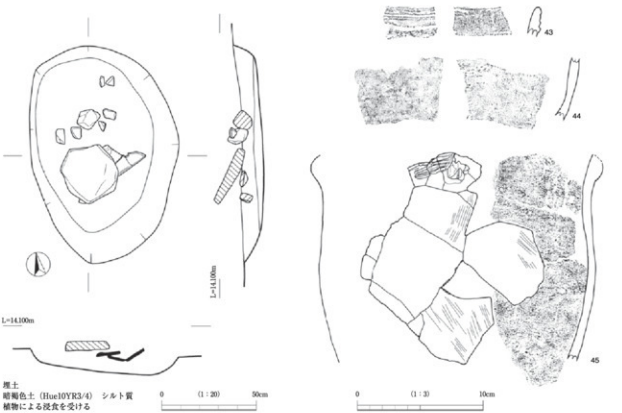
遺物　遺物は土器片 22 点，石器 3 点が出土した。また，床面直上から炭化種子 1 点が出土している。土器 5 点，石器 3 点を図化した。

土器　85･86･88 は，深鉢の口縁部で，口縁部が断面三角形を呈し，市来式土器に該当する。いずれも表面が摩滅していて，胎土に 1 ～ 5 mm 程度の鉱物を含むことが観察できる。85 は沈線と貝殻による刺突によって施文される。

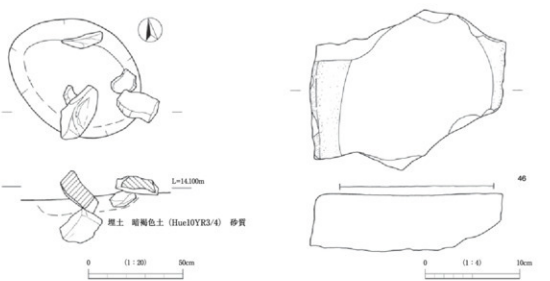
87 は小型の深鉢の胴部と考えられるが，詳細は不明である。89 は深鉢の胴部で，包含層から出土したものと接合した。

石器　90 は霧島山系黒曜石製の石鏃で二等辺三角形鏃である。凹基で，腹面・背面ともに素材剥片面を多く残す。

91 は安山岩製の石錘である。扁平な小型の礫の相対する側縁を剥離して抉りを形成している。92 は石灰岩



第25図 SK57・出土遺物①



第26図 SK59・出土遺物

製の磨石・敲石類である。一部破損しているが，形状は使用により算盤玉状になる。表裏両面に磨面が認められ，側面には顕著な敲打痕が認められる。

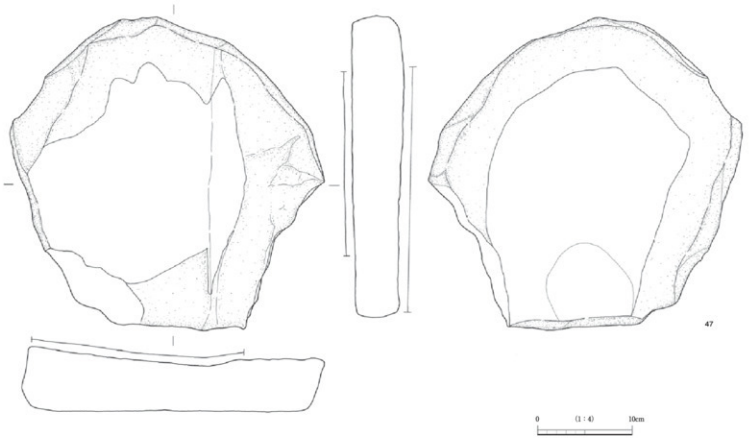
SK60（第34図）

検出状況 SK60はO－25区，Ⅵ層上面で検出された。中世の竪穴状遺構（SI19）と隣接していて，南側の3分の2は，SI19に切られて消滅している。

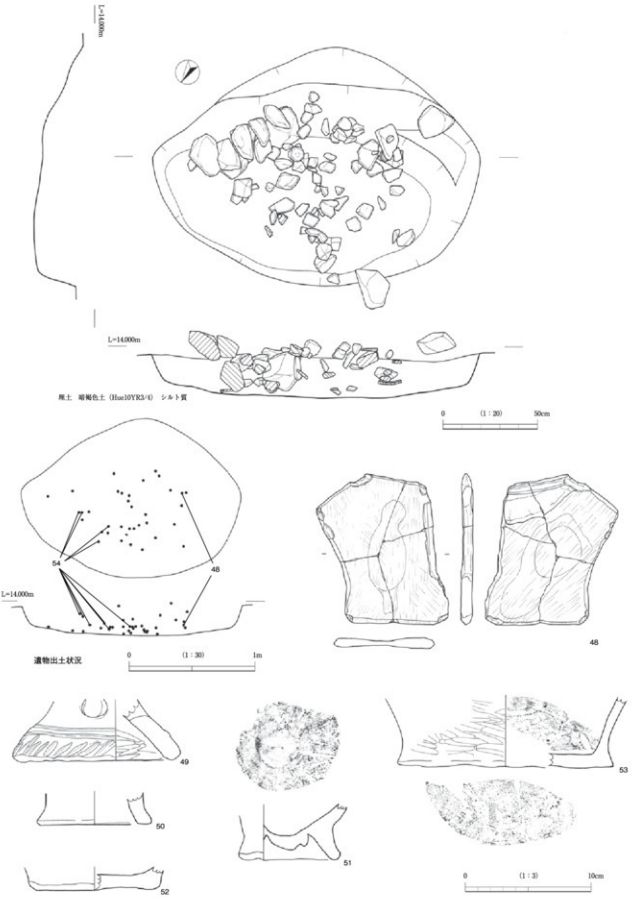
形状・規模 想定される平面形は楕円形で，現状での規模は，長軸150cm，短軸105cmである。検出面からの深さ25cmで，床面から壁面の立ち上がりははっきりしない。

埋土 埋土は暗褐色からにぶい黄褐色でシルト質である。一部にSI19からの浸食が認められる。

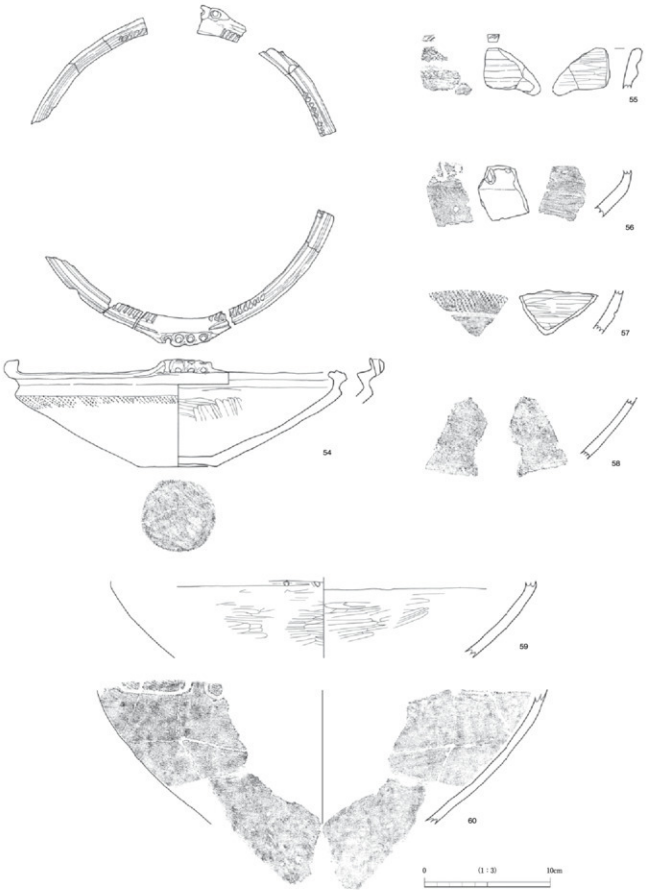
遺物 遺物は土器片11点，石器1点が出土した。土器8点，石器1点を図化した。



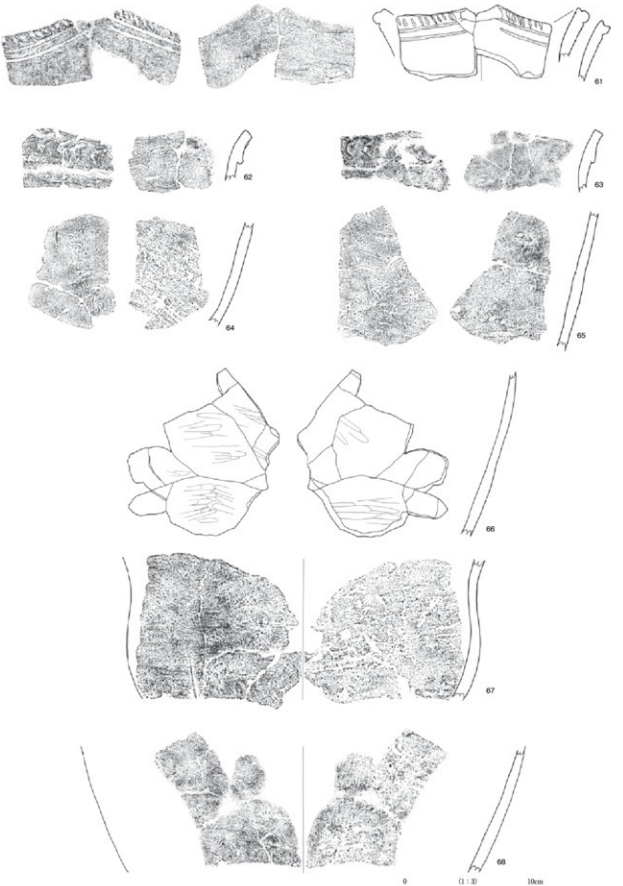
第 27 図　SK57 出土遺物②



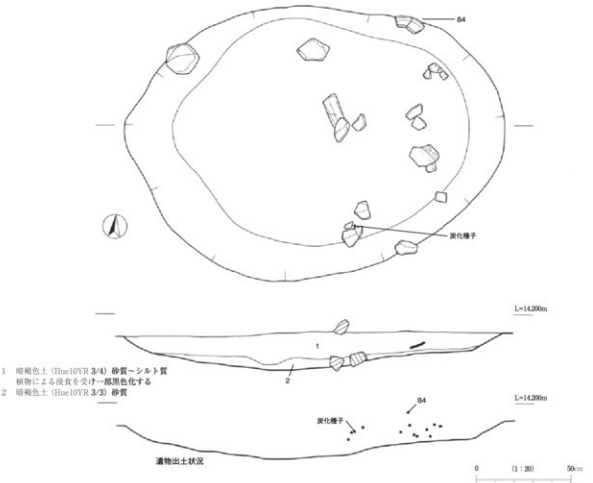
第 28 図　SK13・出土遺物①



第29図　SK13出土遺物②



第30図　SK13出土遺物③



第 31 図　SK20

石器　93 は砂岩製の磨石・敲石類である。被熱による破砕で，大部分が欠損している。表裏両面に磨面が形成される。

土器　94・98 は胎土に滑石を含む。縄文時代中期の阿高式系統の土器で，流れ込みである。94 は凹線により施文される。

95 は，皿形土器もしくは台付皿形土器の口縁部である。色調がにぶい黄橙色を呈し，器壁が厚く硬質である。胎土及び焼成の状況は SK20 の 75 に類似する。口縁部が肥厚し断面三角形状となり，わずかに内側に屈曲する。口唇部には沈線文が施され，波頂部には沈線状の刻目が 8 か所入れられる。口縁部の形状と施文方法は松山式土器と類似する。

97 は深鉢の胴部である。96 は，内外面にミガキが施される。鉢もしくは浅鉢の胴部である。99 は深鉢の胴部で，脚部付近である。胎土に黒雲母を含む。100 は台付皿形土器の脚部で，沈線と貝殻による刺突によって施文される。

SK61（第 35･36 図）

検出状況　SK61 は O － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。SI19 と隣接していて，南西側の一部が SI19 に切られる。

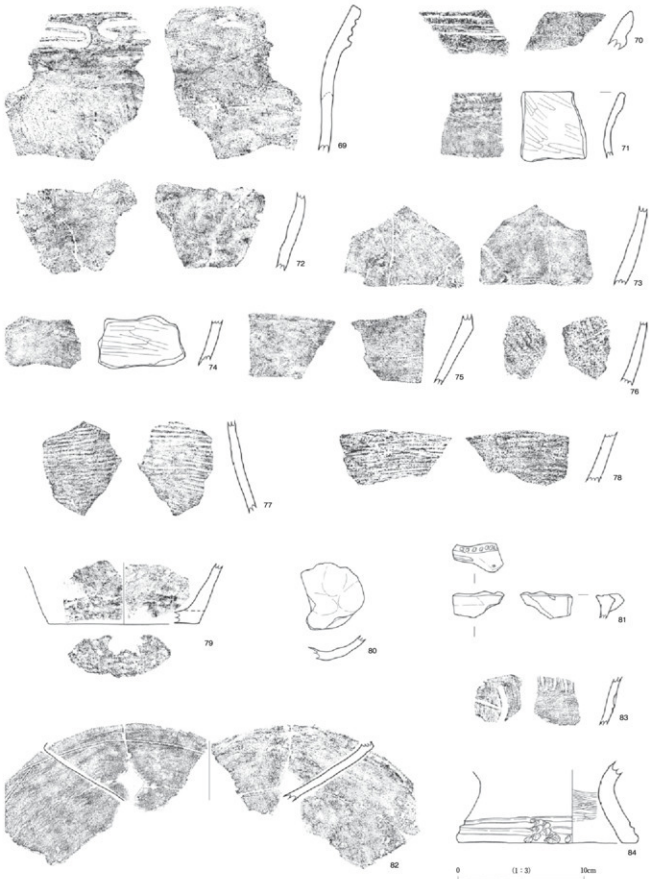
形状・規模　平面形は楕円形で，現状での規模は，長軸 104cm，短軸 74cm である。検出面からの深さ 20cm で，断面形はすり鉢状になる。

埋土　埋土は褐色土・にぶい黄褐色土をベースとして，床面付近の暗褐色土には炭化物が含まれる。

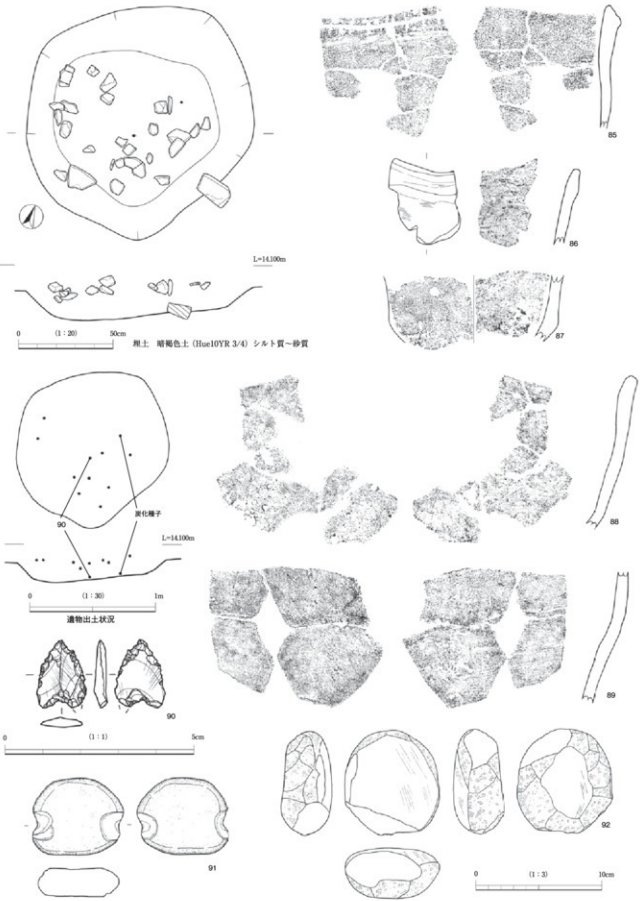
遺物　土器片 49 点，石器 4 点が出土した。そのうち土器 10 点，石器 4 点を図化した。

石器　101 ～ 104 は磨石・敲石類である。101 ～ 103 は砂岩製である。101 は，表裏両面に磨面が形成される。102 は目の粗い砂岩製で，短軸側の両面に敲打痕が認められる。103 は三角柱状の形状を呈し，長軸及び短軸に敲打痕が認められる。104 は安山岩製で，表裏両面に磨面が形成され，裏面にはわずかに凹みもみられる。短軸の側面には敲打痕も観察される。

土器　105･109 は，胎土に滑石を含む。105 は摩滅しているため表面は非常に滑らかである。口縁部の一部に渦巻状の突起をもち，口唇部及び口縁部外面に凹点文がみ



第 32 図　SK20 出土遺物



第 33 図 SK44・出土遺物

られる。109は深鉢の胴部で，内面の摩滅が著しい。両者とも縄文時代中期の阿高式土器系統の土器で，流れ込みである。

106は北久根山式土器の深鉢である。胎土に1～5mm程度の鉱物を含む。胴部は張り出し，口縁部は外反する。口縁部はわずかに波状となる。口縁部には2本の沈線によって，「V」の字状の文様と横方向の沈線文が描かれる。口唇部には貝殻による刺突文が施される。

107は深鉢の口縁部で，口縁部は肥厚し，断面三角形となる。市来式土器の系統である。108は深鉢の胴部である。

110～112は磨消縄文・擬似縄文が施される。110は，外面は灰黄色，内面は黒褐色を呈し，胎土に3～5mm程度の鉱物を含む。口縁部がわずかに肥厚し，外反する。口縁部の外面には貝殻による擬似縄文が施される。胴部には沈線文と，沈線間に擬似縄文が施文される。内面には，丁寧なミガキが施され，黒色を呈する。北久根山式土器の鉢に該当する。

111は，SK57の埋土中から出土したものと接合した。胎土に1～2mm程度の白色の鉱物を多く含む。口縁部は肥厚し，文様帯となり，沈線文と磨消縄文が施される。口唇部は平坦に成形され，沈線文と刺突文が施される。いわゆる縁帯文土器の初期のものと考えられる。SK61とSK57は約8.5mの距離がある。

112は胴部の破片で，沈線文と擬似縄文，渦巻文が施される。113は，鉢もしくは浅鉢の底部である。底部外面に何らかの圧痕が認められる。114は深鉢の底部である。

（ウ） 3類

3類は5基検出された。

SK49（第37図）

検出状況 SK49は，M－24・25区，V層上面で検出された。検出時は，砂岩・安山岩の礫が散乱している状況であり，東西方向に長い楕円形の土坑を想定した。

形状・規模・埋土 調査の結果，66×53cmの土坑①と，77×50cmの土坑②が並列することが判明した。検出面からの深さは，土坑①が16cm，土坑②が8cmである。土坑①・②ともに埋土は黄褐色土である。

遺物 遺物は土器片2点，礫22点が出土した。礫には使用痕等は観察されなかった。土器2点を図化した。

115はⅢ層出土の土器片と接合した。内外面に丁寧なミガキが施され，器壁は薄い。縄文時代晩期の精製の浅鉢と想定される。外面には焼成後につけられた線刻状のものがみられる。116は，深鉢の胴部である。器壁が厚い。晩期に該当するものと考えられる。

SK50（第38図）

検出状況・切り合い SK50は，M－24区，V層上面で検出された。遺構の南東側は中世の土坑（SK15）に切られる。また，埋土堆積状況の検討の結果，SK 4を切ることが判明したが，SK 4調査時に判明したため，遺構の北東側はSK 4の調査時に掘削した。

形状・規模 想定される平面形は楕円形で，現状での規模は，長軸123cm，短軸80cm，検出面からの深さ10cmである。断面形は，床面は平坦で，壁面は緩やかに立ち上がる。

埋土 埋土は黄褐色土で，SK 4の埋土よりも明るい。

遺物 遺物は，土器4点，石器1点，礫3点が出土した。土器1点と石器1点を図化した。

土器 117は，口縁が肥厚し，断面が三角形を呈する。市来式土器である。2本の沈線文がみられる。表面の摩滅が著しい。

石器 118は安山岩製の磨石・敲石類である。表裏両面に磨面と凹みが観察される。磨面は面の全体ではなく，限定的に観察される。側面には敲打痕がみられる。

SK51（第39･41図）

検出状況 SK51は，M－24区，V層上面で検出された。

形状・規模 平面形は楕円形で，規模は長軸158cm，短軸74cm，検出面からの深さ9cmである。断面形は，床面は平坦で，壁面は緩やかに立ち上がる。

埋土 埋土は褐色土で，V層に類似する。

遺物 土器8点，石器2点が出土した。土器4点，石器2点を図化した。

石器 119は安山岩製の磨石・敲石類である。表面の中央に顕著な凹みがみられる。本遺跡から出土している他の磨石・敲石類と比較してサイズが大きいため，台石としての機能も推定される。

127は石皿・台石の破片である。SK42とSX64から出土したものと接合した。SK42の項目で報告する。

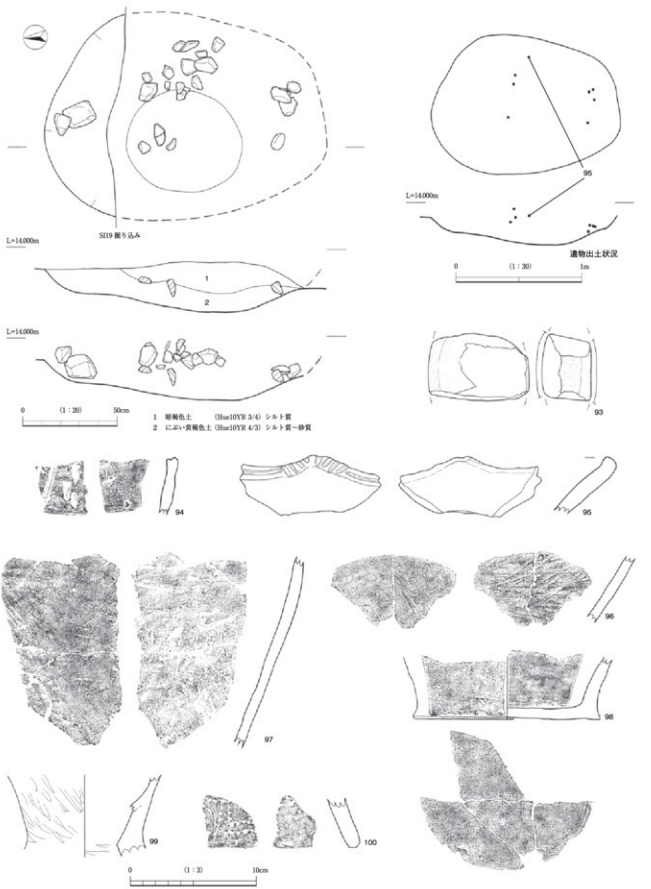
土器 120は深鉢の胴部である。121・122は鉢もしくは浅鉢の胴部で，磨消縄文と沈線文の組み合わせがみられる。123は浅鉢の底部である。胎土中に2～8mm程度の鉱物が含まれる。

SK42（第40・41図）

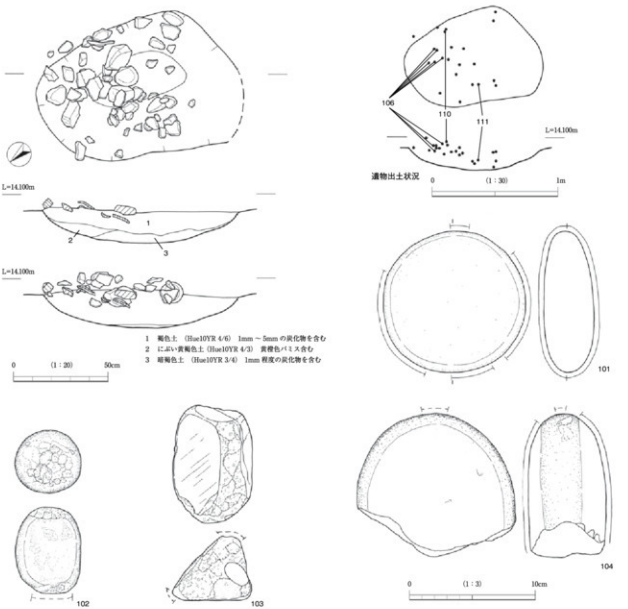
検出状況 SK42はO－25区，Ⅵ層上面で検出された。検出時に礫が散乱している状況で，礫を取り上げた後に，土坑が検出された。植物による浸食を受けており，土坑の残存状況は悪い。

形状・規模 平面形は楕円形で，規模は長軸98cm，短軸71cmである。検出面からの深さが6cm程度だが，床面を特定することはできなかった。

遺物 遺物は土器片2点，石器2点が出土した。



第 34 図　SK60・出土遺物



第 35 図　SK61・出土遺物③

土器　125・126 は深鉢の胴部である。126 は，内外面にミガキが施される。

石器　124 は花崗岩製の磨石・敲石類である。約 2 分の 1 が欠損している。表裏面に磨面が形成され，側面に敲打痕が確認される。

127 は安山岩製の石皿・台石で，約 3 分の 1 が欠損している。残存部は 3 点に破損しており，それぞれ SK42・SK51・SX64 から出土したものが接合した。礫周辺は敲打により長円形に整形されている。使用面には顕著な光沢が見られ，明確な凹みが確認される。

各遺構間の距離は，SK42 － SK51 間が約 24.5m，SK42 － SX64 間が約 11m，SK51 － SX64 間が約 22m である。

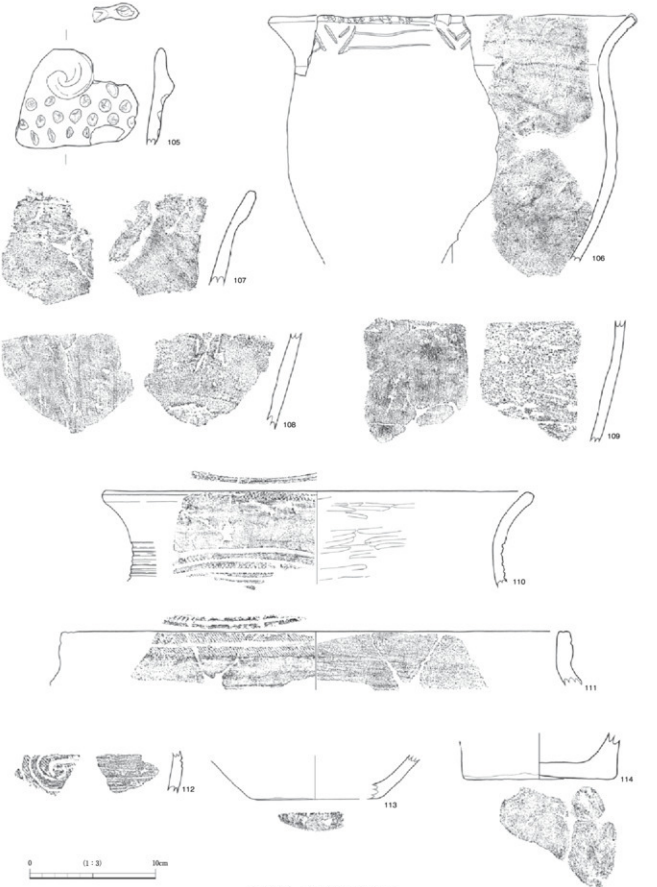
SK43（第 42 図）

検出状況　SK43 は O － 24 区で検出された。SK43 は，土層が横転している地点に掘り込まれていた。

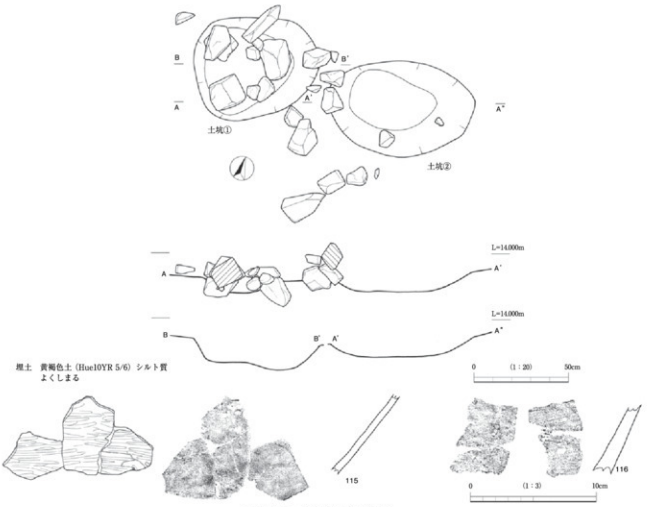
形状・規模　平面形は円形で，規模は直径 138cm である。検出面からの深さは 23cm で，断面形はすり鉢状になると想定される。

埋土　埋土は褐色で，植物による浸食を受ける。

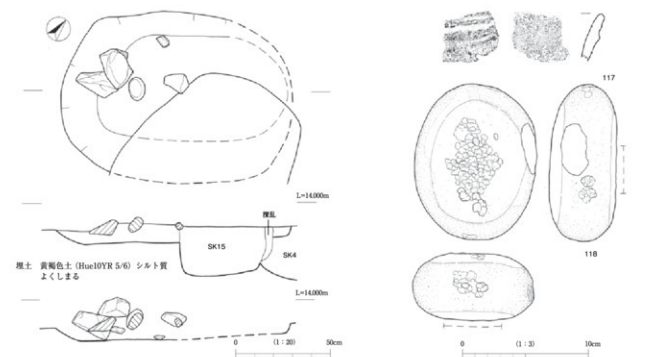
礫の検出状況　埋土中からは，土坑の中央からやや北寄りに大型の安山岩が 2 点，その他に拳大の礫が 8 点，合



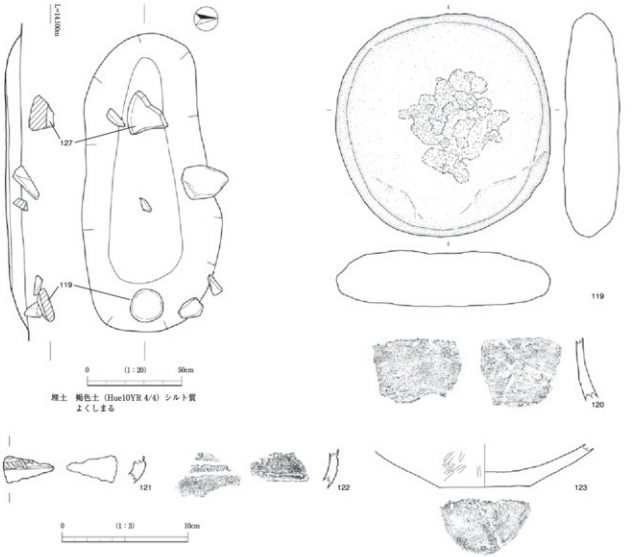
第36図　SK61出土遺物②



第 37 図　SK49・出土遺物



第 38 図　SK50・出土遺物



第 39 図　SK51・出土遺物

計 10 点の礫が出土した。大型の安山岩は，平らな面が向かい合った状態で検出されたが，いずれも使用痕は確認されなかった。

（エ）　4 類

4 類は 5 基検出された。平面の規模が 50 ～ 80cm 程度のものを 4 類としたが，検出面からの深さや，礫の有無など様々なものがある。

SK48（第 43 図）

検出状況・形状・規模　SK48 は N － 24 区，V 層上面で検出された。検出時は配石状遺構と想定していたが，トレンチを設定し，土坑の有無を確認した結果，72 × 40cm の楕円形の土坑①と，35 × 30cm の円形の土坑②が検出された。

埋土　土坑①・②ともに埋土は褐色土である。

遺物　土坑①から石皿・台石が 1 点出土した。128 は安山岩製で，欠損している。一部に被熱による赤化がみられ，二次利用された可能性が高い。使用面には顕著な使用痕は確認されないものの，浅い凹みがあり，片側のみに縁が残っている。

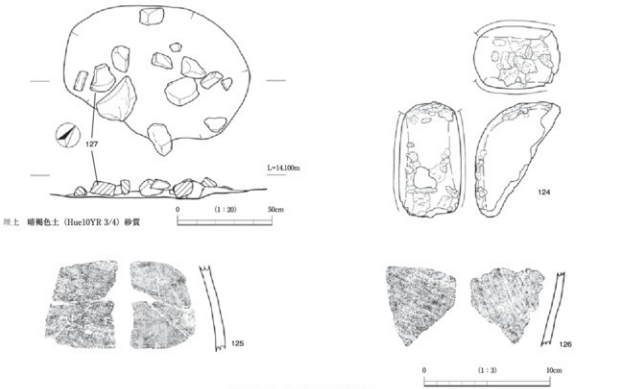
SK46（第 44 図）

検出状況　SK46 は O － 25 区，VI 層上面で検出された。植物による浸食を受け，残存状況は悪い。

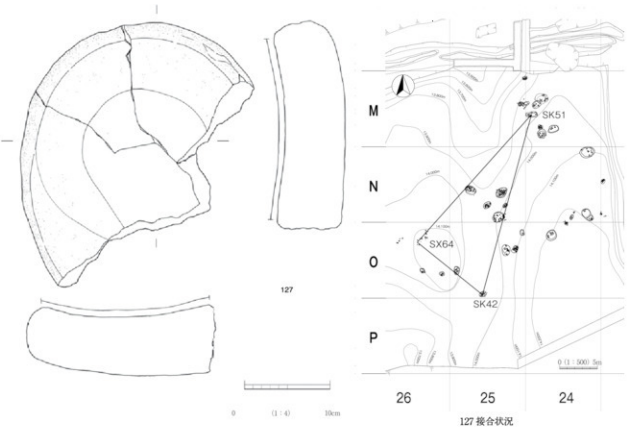
形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 82cm，短軸 60cm，検出面からの深さ 10cm である。

埋土　埋土は褐色土で，植物の浸食を受けしまりがない。

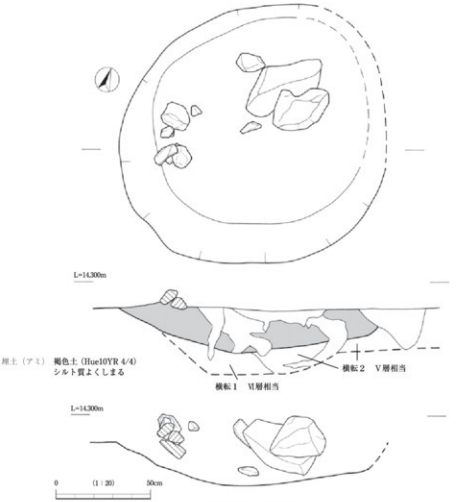
遺物　遺物は，検出面で土器片 2 点と礫 1 点が出土した。129 は深鉢の底部である。胎土に滑石を含み，内外面にミガキが施される。



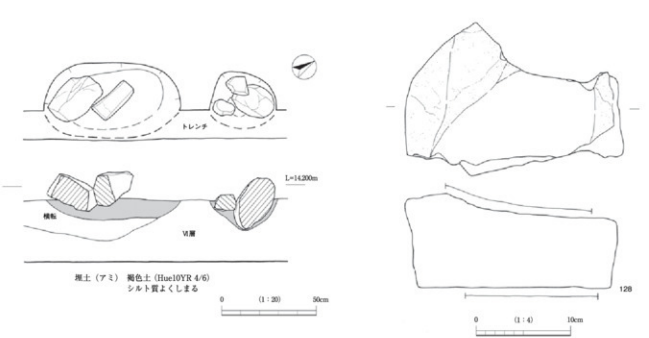
第 40 図　SK42・出土遺物



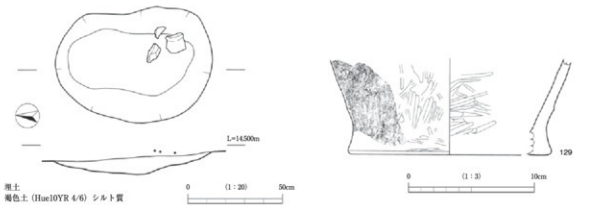
第 41 図　SK51・SK42・SX64 出土石器　接合状況



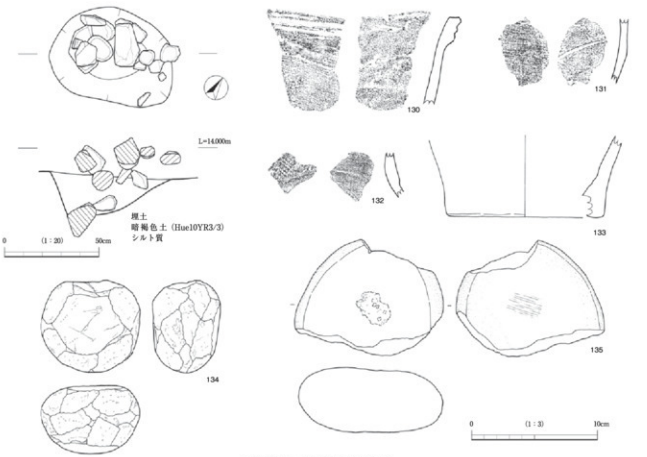
第 42 図　SK43



第 43 図　SK48・出土遺物



第 44 図　SK46・出土遺物



第 45 図　SK69・出土遺物

SK69（第 45 図）

検出状況　SK69 は M－24・25 区，Ⅵ層上面で検出された。

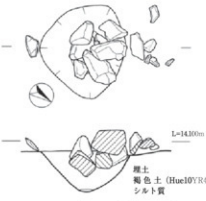
形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 64cm，短軸 48cm である。検出面からの深さ 22cm で，植物による浸食で，床面は一部破壊されている。

埋土　埋土は暗褐色土で，植物の浸食を受け，しまりがない。

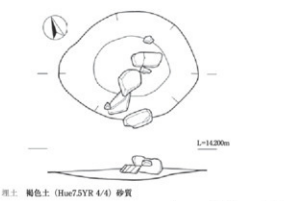
遺物　遺物は土器片 12 点，石器 2 点，礫 10 点が出土した。土器 4 点，石器 2 点を図化した。

土器　130 は深鉢である。Ⅲ層出土のものと接合した。口縁部を肥厚させ文様帯とし，2 本の沈線文が施される。口唇部は平坦に成形される。131 は深鉢の胴部である。133 は深鉢の底部で，表面の摩滅が著しい。

132 は磨消縄文系の土器である。器面は黒色を呈するが，一部に赤色顔料を塗布されていた痕跡が認められる。



第46図　SK47



第47図　SK58

石器　134は石灰岩製の磨石・敲石類である。側面に顕著な敲打痕が確認され，使用により形状は算盤玉状になる。135は安山岩製の磨石・敲石類で，被熱により破砕する。表面に磨面が形成される。表面の中央に凹みが観察される。

SK47（第46図）

検出状況　SK47は，O－24区，Ⅴ層上面で礫が露出する状態で検出された。

形状・規模　平面形は南西がわずかに突き出した円形で，規模は長軸49cm，短軸46cm，検出面からの深さ21cmである。

埋土　埋土は褐色土である。

礫の検出状況　礫は土坑の北東側に集中して13点出土した。いずれも使用痕は確認されなかった。

SK58（第47図）

検出状況・埋土　SK58はO－26区，Ⅵ層上面で，礫が露出した状態で検出された。埋土は褐色土で，植物による撹乱を受けしまりがない。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸74cm，短軸57cm，検出面からの深さ6cmである。なお，遺物は出土しなかった。

イ　配石状遺構

石器及び礫がまとまって検出されたが，掘り込みを確認できなかったものを配石状遺構とした。配石状遺構は4基検出された。

SX52（第48図）

検出状況・規模　SX52はO－26区，Ⅵ層上面で，石皿・台石2点と礫10点が140×50cmの範囲にまとまった状況で検出された。

遺物　土器1点と石器2点が出土した。

土器　136は，外面は黒色を呈し，胎土中に1～2mm程度の白色の鉱物が含まれる。

石器　137・138は石皿・台石である。両者とも立位に近い状況で検出された。137は安山岩製である。全面に被熱による剥落が見られ，わずかに残された使用面に光沢が見られる。凹みはない。

138は砂岩製であり，約2分の1が欠損している。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。使用面は表裏ともに確認され，それぞれ顕著な光沢が見られるが，凹みはない。表面には磨面と共に敲打痕が確認される。

SX64（第49図）

検出状況・規模　SX64はO－26区，Ⅵ層上面で，石皿・台石の破片1点と礫8点が116×60cmの範囲にまとまって検出された。

石器　127はSK51・SK42から出土したものと接合した。詳細は上述のとおりである。

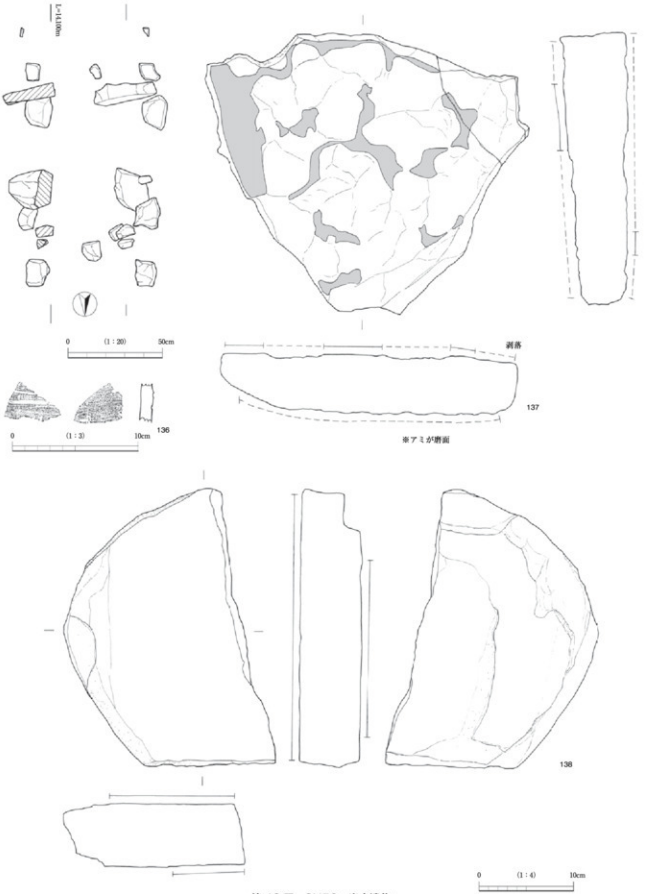
SX65（第50図）

検出状況・規模　SX65はO－26区，Ⅵ層上面で，礫6点が115×55cmの範囲にまとまって検出された。礫に使用痕は認められなかった。

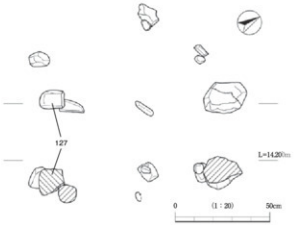
SX66（第51図）

検出状況・規模　SX66はN－23・24区，Ⅴ層上面で検出された。磨石・敲石類1点と礫9点が，100×58cmの範囲にまとまった状況で検出された。礫の1点は日東産の黒曜石の原石である。

石器　139は安山岩製の磨石・敲石類である。表裏両面に磨面が形成され，表面には凹みもみられる。側面には敲打痕が確認される。

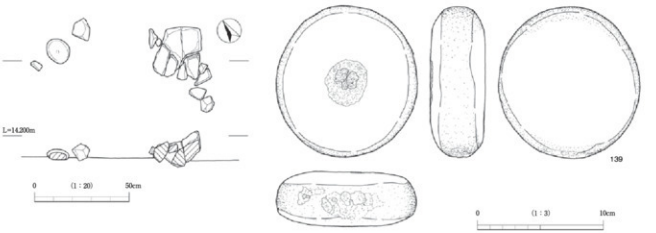


第 48 図　SX52・出土遺物



第 49 図　SX64

第 50 図　SX65



第 51 図　SX66・出土遺物

ウ　その他

その他は，埋土や検出状況は縄文時代の土坑と類似するが，遺物の混入がみられるなど時代決定の不確定なものである。2 基を報告する。

SK45（第 52 図）

検出状況　SK45 は M － 24 区，V 層上面で検出された。西側 20cm には SK44 が隣接する。

形状・規模　平面形は楕円形である。西側がやや突き出しているのは，調査時に掘り過ぎたためである。規模は長軸 151cm，短軸 99cm，検出面からの深さ 13cm である。

埋土　埋土はにぶい黄褐色土で，隣接する SK44 の埋土よりも明るい。埋土は他の縄文時代のものと類似する。

遺物　遺物は土器片が 15 点出土した。4 点を図化した。

140 は土器の底部である。器形は半球状で，内外面にミガキが施される。型式は不明だが，古墳時代の塊の可能性が想定される。140 は床面付近から出土しているが，混入か遺構に伴うものなのか判断できなかった。

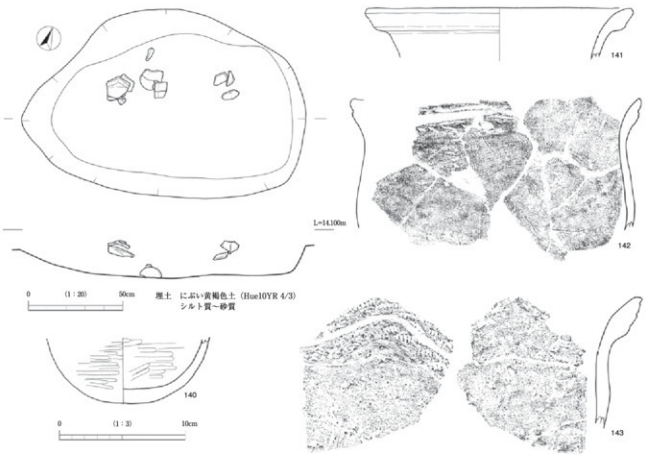
SK21（第 53 図）

検出状況　SK21 は N － 25 区，V 層上面で検出された。検出時は，砂岩と安山岩がまとまって確認されたが，土坑の平面形が不明瞭であった。そこで，検出状況の記録作成後に南側の 4 分の 1 を断ち割り，埋土の堆積状況を観察し土坑の平面形を決定した。

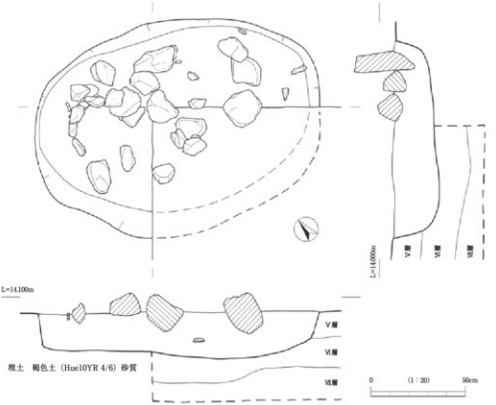
形状・規模　平面形は東西方向に長い楕円形で，規模は長軸 149cm，短軸 115cm，検出面からの深さ 21cm である。断面形は，床面は平坦で，壁面の立ち上がりがはっきりし，箱形となる。

埋土　埋土は褐色で，しまりのない粘質土である。

礫・遺物　検出された礫は全て安山岩と砂岩で，使用痕等は確認されなかった。また，埋土からは，時代・時期を特定可能な遺物は出土しなかった。



第 52 図　SK45・出土遺物



第 53 図　SK21

(3)　遺構外出土土器（第 54 ～ 64 図）

Ⅲ層・表土・撹乱等から出土した土器を，遺構外出土土器として，一括して報告する。土器は，縄文時代中期から晩期のものが出土している。

ア　阿高式土器・阿高系の土器（第 54 図）

145 と 152 は胎土に滑石を含み，凹線文が描かれる。縄文時代中期後半の阿高式土器である。144・146 ～ 148 は，胎土に滑石は含まないが，凹線文が描かれることから阿高式系統の土器である。

イ　南福寺式土器（第 54 図）

149 ～ 151・153 は，凹線がやや狭くなり，文様が口縁部に集中することから，南福寺式土器に該当する。151 は，外面から口縁部内面に赤色顔料が塗布される特徴的なものである。

ウ　貝殻文系土器（深鉢）（第 54 ～ 56 図）

松山式土器　154 は口縁が断面三角形を呈し，内側にわずかに屈曲する。口唇～口縁部には沈線文と刺突文が施される。縄文時代後期中頃の松山式土器に相当する。

市来式土器系　155 ～ 173 は口縁部を肥厚させ断面三角形とし，そこを文様帯とする。文様帯には，沈線文や貝殻による刺突文，刻目が施される。縄文時代後期中頃の市来式土器が大半を占めるが，後述の様に，御手洗 C 式土器なども含まれるので，市来式土器系とした。

155 の口唇部は平坦に面取され，刻目が施される。159 も口唇部が平坦に成形され，刻目が施される。さらに内面は，沈線で「S」の字状の文様が描かれる。

163 は，波状口縁で，波頂部に「S」の字状の貼り付け文と沈線文が施される。

167・168 は，色調が赤褐色を呈する。口縁部の文様帯には，沈線文と貝殻による刺突文が施される。168 は口唇部にも貝殻刺突文が認められる。172 は，色調が赤褐色を呈し，胎土に白色の鉱物を含む。口縁部には貼り付け文が施される。167・168・172 には，中九州地方の御手洗 C 式土器や北久根山式土器の影響が認められる。

北久根山式土器　178 ～ 181 は北久根山式土器の深鉢である。178・179 は，色調がにぶい黄橙色を呈し，胎土に角閃石を多く含む。わずかに肥厚させた口縁部に「W」の字状の貼り付け文をもち，ヘラ状工具で羽状の沈線文を入れられる。180 は，口縁部に「W」の字状の貼り付け文をもつ。口縁帯には押し引き状に刺突する疑似縄文が施される。口縁部は，実測図よりも外反が大きくなる可能性がある。

181 は，胎土に角閃石や，1 ～ 5 mm 程度の鉱物を含む。口縁部は大きく外反し，口縁下 4 cmと口唇部を肥厚させて文様帯を作る。傾斜した口唇部には，左下がりの短沈線が刻目状に施される。また，口縁部文様帯の下半には，右下がりの沈線を巡らす。外面の器面調整はミガキ様のナデである。182 は，実測図よりも外反が大きくなる可能性がある。

その他　183 は，口縁部をゆるく内湾させ肥厚した文様帯をもち，沈線により三角形状の文様が描かれる。西平式土器もしくは太郎迫式土器に該当すると考えられる。

底部（平底）　184 ～ 190 は深鉢の底部で，平底のものである。185 や 186，190 の底面には，圧痕状の凹みがみられるが，何に由来するものかは不明である。

底部（脚台）　191 ～ 198 は脚台付きの深鉢である。194 ～ 198 は，製作手法が窺える。198 のような丸餅状の底がみられることから，脚台部分と胴部を作り上げた後に，丸めた粘土を内側から押し当てて成形したと思われる。

エ　磨消縄文系土器（鉢・浅鉢）（第 57 ～ 59 図）

鐘崎式土器　199 ～ 203 は鐘崎式土器の口縁部である。199 は直線上に開く体部から，丸く内湾した胴部をもち，口唇部を断面三角形に肥厚させる。口縁部から胴部の張り出し付近までを文様帯とする。R 撚りの縄文地に，太めの沈線による文様を施し，一部には鉤手文もしくは渦巻状の文様が描かれる。口唇部には沈線文と刺突文が施される。また，口唇部の一部を張り出させ，上方から貫通させた 2 か所の穿孔が文様の特徴となる。色調が灰色であることや，胎土に茶色の微粒子や透明の火山ガラスが含まれることも含めて，県内で出土する鐘崎式土器と共通する。

201 は幅広の磨消縄文がみられる。202 は，口唇部の文様構成が 199 と共通する。203 の口唇部には，竹管状の工具による刺突文がみられる。

北久根山式土器　204 ～ 209 は北久根山式土器に該当する。204 と 205 は，肩部は内傾し頸部となり，そこから大きく外反する口縁部をもつものである。沈線文とその間に粗い縄目の磨消縄文が施される。206 は，口縁部には磨消縄文と沈線文が施され，口唇部は平坦に成形され連続刺突文が施される。207・208 は口縁端部に磨消縄文を巡らす。209 は，肥厚させた口縁部外面と貫通孔のある口縁部内面に，L 撚りの縄文が施される。

辛川式土器　210 は，ゆるく外反した口縁部に，内側に屈曲させた幅の狭い文様帯がつくもので，2 条の沈線が巡る。ミガキによる丁寧な仕上げで，色調は黒色を呈する。213 は大ぶりではあるが 210 と同様の器形をなし，文様帯には沈線文と R 撚りの縄文が施される。210・211 は辛川式土器に該当する。

鐘崎式土器・胴部　212 ～ 218 は胴部で，鐘崎式土器に該当する。214 は，縦方向の沈線文と刺突文がみられる。215 には，沈線文と磨消縄文，「J」の字状もしくは鉤手状の文様がみられる。

西平式土器・胴部　219は，沈線を引いた後に，沈線間に縄文を充填し，沈線間をナデ消す磨消縄文がみられる。西平式土器に該当する。

太郎迫式土器・胴部　220は，色調が黒褐色を呈する。R撚りの粗い縄文と窓枠状の沈線がみられる。太郎迫式土器に該当すると判断した。

底部　221～228は鉢・浅鉢の底部で，底面は平底もしくはやや上げ底状になる。磨消縄文系土器から縄文時代後期終末の上加世田式土器までの磨研土器に伴うものである。

オ　台付皿形土器・皿形土器（第59図）

229～242は台付皿形土器もしくは皿形土器と考えられるものである。

市来式土器系　229・230・232・237・238・241は市来式土器あるいは御手洗C式土器に該当する。229・232は，内外面及び口唇部に沈線文が施される。230は，貝殻による刺突文がみられる。237・238・241は脚台部である。脚部下端に文様帯が形成される。

磨消縄文土器系　231・233・234・235・236・239・240は磨消縄文系の土器に伴うものである。231は瘤状の突起部で，刺突文がみられる。233は，胎土に黒雲母や1～2mm程度の白色の鉱物を含む。234は内面に「S」の字状の沈線文が描かれる。北久根山式土器に該当する。235・236は，口縁部内面に浮線状の文様帯をもつ。239・240は脚台部で，竹管状の工具による沈線文と，渦巻状の文様，さらに透かし孔がみられる。

その他　242は台付皿形土器の脚台と判断したが，内面がハケ目状の調整であり，土師器甕の可能性もある。

カ　縄文時代後期末～晩期相当の深鉢（第60～62図）

口縁部　243は内側に強く屈曲する口縁部で，口縁帯に2条の凹線を巡らす。上加世田式土器もしくは御領式土器に該当すると考えられる。

244～285は縄文時代後期から晩期に該当すると考えられる深鉢である。条痕地のものは，入佐式土器新段階以降の縄文時代晩期に位置付けられるが，詳細は不明である。

244～270は口縁部である。244・245は，胴部上半から口縁部がやや内傾する。246～252は，口縁付近が外反する。248は，胴部に焼成後の穿孔が施され，口縁部外面には押圧による幅1cmほどの浅い凹みがみられる。253・254は，口縁付近が直線的である。255～263は，胴部上半から口縁部がわずかに内湾する。261は口縁部がやや肥厚する。263は，口縁がやや肥厚し，内側に屈曲する。

270・271は，細い沈線が巡るもので，入佐式土器新段階に該当する。269は貫通した刺突がみられるものだが，孔列文に関するものか不明である。

胴部　271～285は深鉢形土器の胴部片である。280・283にはミガキがみられるが，それ以外は条痕による器面調整である。一般的に器面調整はミガキから条痕へ変遷することから，ミガキ調整は入佐式土器古段階以前で，条痕調整は入佐式土器新段階から黒川式土器にかけてのものであると判断される。275は頸部と口縁部の境界にリボン状に小さな突起を貼り付けるもので，入佐式土器新段階から黒川式土器への過渡期のものと考えられる。

底部　286～298は張り出しのある底部である。入佐式土器新段階から黒川式土器に特徴的なものである。底部に圧痕条の凹みがみられる資料があるが，何に由来するものかは不明である。

キ　縄文時代後期末～晩期相当の鉢・浅鉢（第63図）

口縁部　299～301は口縁部に凹線状の文様帯をもつものであり，三万田式土器に該当する。299は，三万田式土器でも新しいタイプのもので，胎土に角閃石が目立つ。

302・303・306は，わずかに外反しながら開く口縁部に，断面が楕円形で肥厚した玉縁状の口唇部が付くものである。内外面が沈線状となるが，口縁部と一体化していることから，入佐式土器から黒川式土器にかけてのものである。

304・305は口縁の一部に突起をもつもので，黒川式土器に該当する。308は扁平な胴部に外反する長めの口縁部をもち，口唇部は丸く肥厚する。口縁部にはヒレ状の突起が付く。胴部は丸く仕上げるもので，橋状把手からリボン状に推移する過程にある突起をもつ。口縁部が長い点や胴部の丸みがきついこと，胴部突起が橋状把手の雰囲気を残すことから，入佐式土器に近いと考えられる。309は，丸い胴部に短い口縁部が付くもので，黒川式土器の中でも新しいタイプである。307は，胴部が「く」の字に屈曲するもので，入佐式土器以前のものである。

胴部　310～317は胴部である。310～313は，胴部が「く」の字に屈曲するもので，入佐式土器以前の段階のものと考えられる。317は，他と比較して器壁が厚い。詳細は不明である。

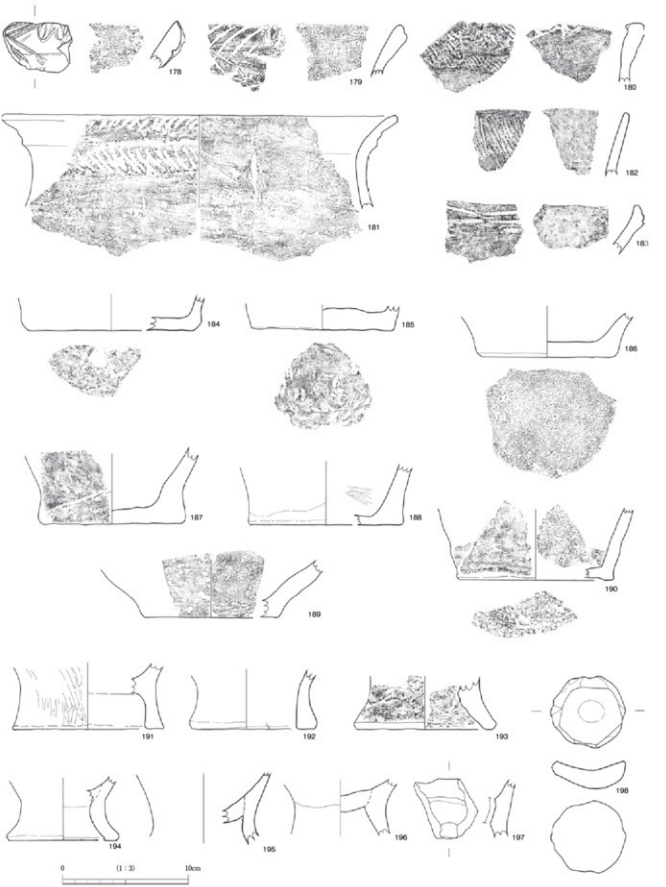
ク　不明土器（第64図）

318～332は詳細不明の土器を一括して掲載した。318は，色調が赤褐色を呈し，条痕地に不規則な浅い沈線がみられる。指宿式土器の影響を受けている可能性がある。319・321・322にも浅い沈線がみられるが，どの型式になるか不明である。322は，胎土中に2mm程度の白色の鉱物が含まれる。

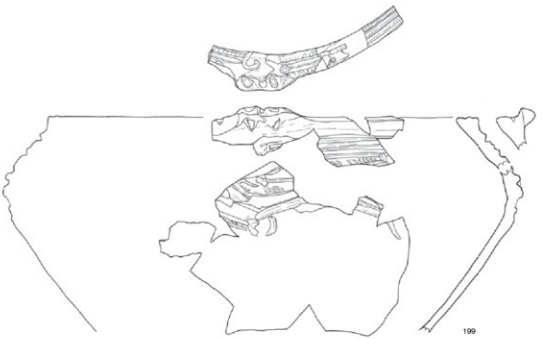
320は刻目のある突帯で区画された口縁部文様帯に羽状の沈線が施されるもので，南福寺式土器や出水式土器の系譜を引くものと思われる。

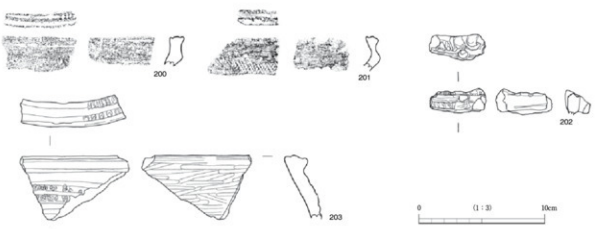
第54図　遺構外出土土器①

第55図　遺構外出土土器②



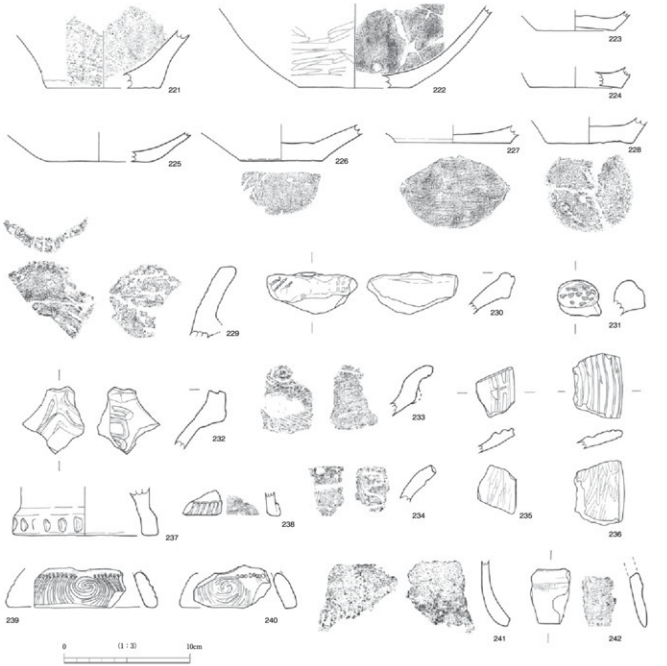
第56図　遺構外出土土器③





第57図　遺構外出土土器④

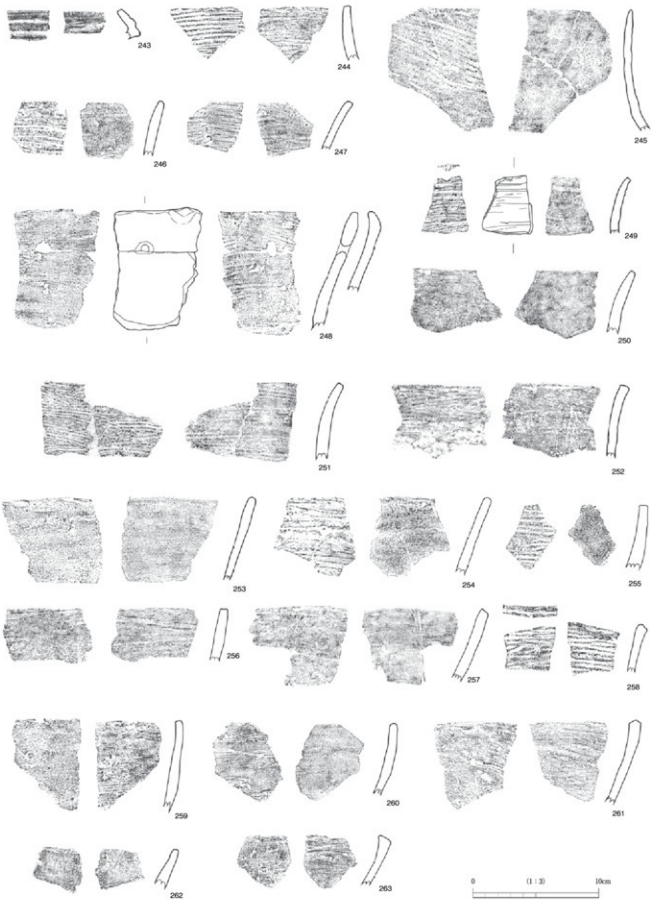
第58図　遺構外出土土器⑤



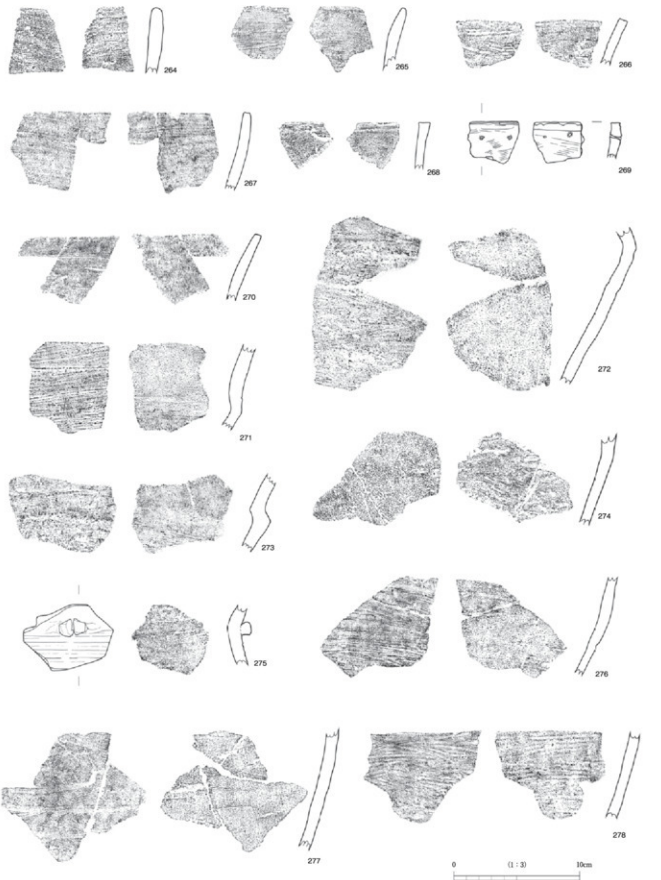
第 59 図　遺構外出土土器⑥

323 は口縁端部のみを内傾に折り曲げるもので，口唇部には 2 列の押し引き文が巡る。側縁部には太めの刻目を入れ，鶏冠状となる。この様な特徴は，縄文時代中期後半の中尾田Ⅲ類土器の中にみられる。

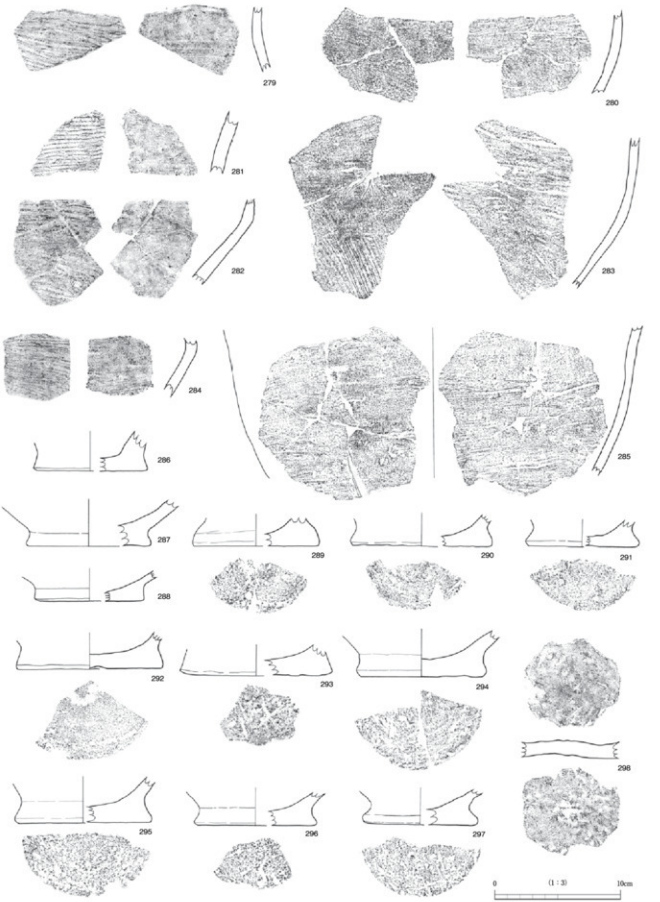
324・325 は口縁部を肥厚させ，凹線を巡らす。口縁帯が狭いことから，上加世田式土器よりは古く位置付けられる。326 は，沈線端部に刺突する。327 は傾き不明である。R 撚りの縄文と沈線文をもつもので，沈線の延長上には刺突文もみられる。326・327 は，胎土や色調が北久根山式土器に類似する。328 は口縁部端に沈線が施される。329 は，器壁が厚手で，胴部から口縁部は内湾する。口唇部の一部に突起が付けられ，左下方向の沈線状の刻目が入れられる。331 は，器壁が薄く，内外面にハケ目状の痕跡がみられる。



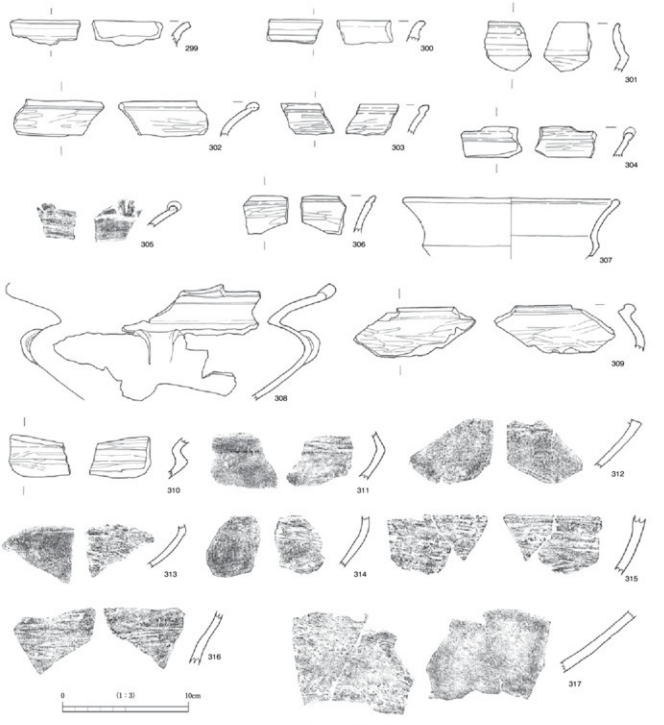
第 60 図　遺構外出土土器⑦



第61図　遺構外出土土器⑧



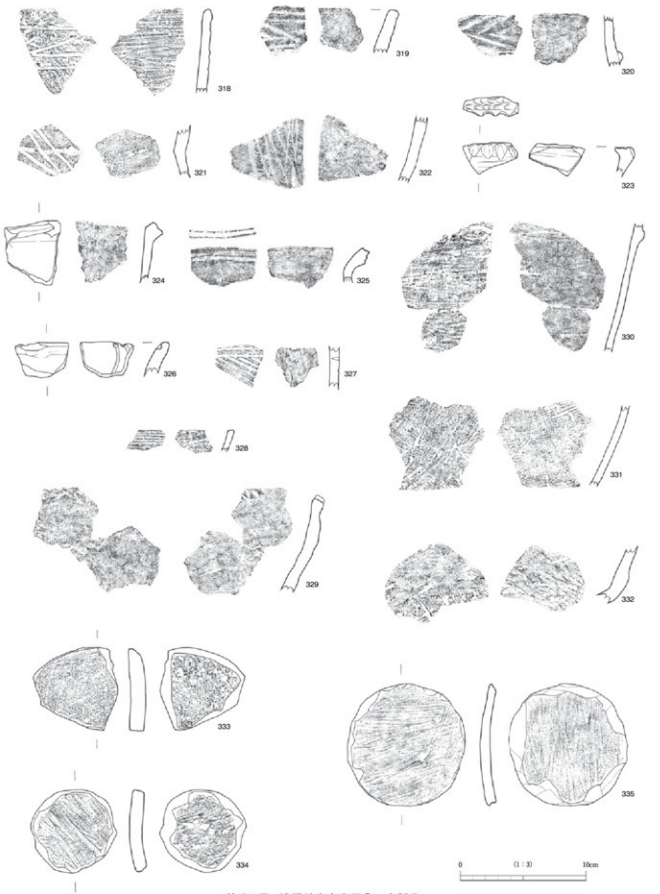
第62図　遺構外出土土器⑨



第 63 図　遺構外出土土器⑲

(3)　土製円盤加工品（第 64 図）

333 ～ 335 は，土器片に剥離を加え円形に加工したものである。縄文時代後期に一般的にみられるが，335 のような大型の土製円盤加工品は少ない。



第64図　遺構外出土土器⑪・土製品

(4) 石器（第 65 ～ 74 図）

石器も土器と同様に，包含層及び表土，撹乱から出土した。包含層の残存状況が悪く，さらに，出土数が少ないので，一括で報告する。

石器の出土の傾向としては，石鏃をはじめとする剥片石器類は少なく，磨石・敲石類や石皿・台石などの礫石器類が多い。

ア 石鏃（第 65 図）

石鏃は 21 点出土している。石鏃はその形状から正三角形鏃及び二等辺三角形鏃，五角形鏃の３つに分類され，全て無茎鏃である。

(ア) 正三角形鏃（第 65 図 336 ～ 343）

336 は安山岩製である。凹基で，先端部は僅かに欠損している。337 は桑ノ木津留産黒曜石製である。平基で，基部の一部に自然面を残す。338 は霧島山系黒曜石製である。浅い凹基で，腹面に剥片素材面を多く残す。339 は霧島山系黒曜石製である。凹基で，片側の基部が欠損している。

340 は腰岳産黒曜石製である。凹基で，両側辺はやや内湾する。先端部からの衝撃で器体の半分が欠損している。342 は腰岳産黒曜石製である。凹基で，抉りは U 字状に深い。返しの先端は直線状に仕上げられている。片側の返しの欠損は，調査時のものである。

343 は霧島産系黒曜石製である。凹基で，返しの先端は直線状に仕上げられている。上方からの衝撃で先端部が欠損している。341 はチャート製である。凹基で，素材剥片の縁辺のみに簡易な加工を施し全体を整形している。

(イ) 二等辺三角形鏃（第 65 図 344 ～ 354）

344 は腰岳産黒曜石製である。浅い凹基で，腹面に剥片素材面を多く残す。先端部は僅かに欠損している。345 は濃い青灰色を呈する西北九州産の黒曜石製である。浅い凹基で，腹面に剥片素材面を多く残す。先端部は僅かに欠損している。

346 は姫島産黒曜石製である。凹基の長身鏃で，抉りは U 字状である。腹面に剥片素材面を多く残している。347 は霧島山系黒曜石製である。凹基の長身鏃である。

348 は安山岩製である。凹基の長身鏃で，両側縁は鋸歯状に仕上げられている。

349 は西北九州産黒曜石製である。凹基で，抉りは直線状で深い。両側縁の返し部分は鋸歯状に仕上げられている。350 は霧島山系黒曜石製である。凹基で，抉りは直線状で深く，片側が欠損している。

351 はチャート製である。凹基で，抉りは直線状で深い。352 はチャート製である。抉りは直線状で深い。両側縁は鋸歯状に仕上げられている。先端部の欠損は調査時のものである。

353 は上牛鼻産黒曜石製である。凹基で，側縁は外湾している。先端部と基部は欠損している。354 は霧島山系黒曜石製である。凹基で，抉りは U 字状である。腹面に剥片素材面を多く残し，背面には一部自然面を残す。上方からの衝撃で先端部は欠損している。

(ウ) 五角形鏃（第 65 図 355・356）

355 は西北九州産黒曜石製である。平基で背面の一部に自然面を残している。先端部は欠損している。両側縁基部付近も角がみられ，七角形とも言える。356 は白色を呈するチャート製である。浅い凹基で，両側縁は内湾している。上方からの衝撃で先端部が欠損している。

イ 不明（第 66 図 357）

357 は腰岳産黒曜石製である。上辺と両側辺に微細剥離痕が認められる。

ウ 楔形石器（第 66 図 358 ～ 360）

358 は腰岳産黒曜石製である。打撃面には背面・腹面の両側に微細剥離痕が観察される。機能部には背面にのみ微細剥離痕が観察される。359 は腰岳産黒曜石製である。打撃面，機能部ともに背面・腹面の両側に微細剥離痕が観察される。背面の一部に自然面を残す。

360 は腰岳産黒曜石製である。縦長の剥片を利用し，打面側を打撃面として，剥片端部を機能部として使用している。打撃面，機能部ともに背面・腹面の両側に微細剥離痕が観察される。特に打撃面から腹面にかけて，大きな剥離痕が観察される。

エ 石匙（第 66 図 361・362）

361 は灰色に黒色の縞状を呈するチャート製である。横形で，器体の一部が欠損している。362 は玻璃質安山岩製である。横長の剥片を縦位に利用し，腹面と背面に素材剥片面を多く残している。横型で，片側の欠損は調査時のものである。

オ スクレイパー（第 66 図 363・364）

363 は日東産黒曜石製である。厚手の剥片を素材とし，腹面からの二次加工により内湾する刃部を形成している。刃部には微細剥離痕が観察される。

カ ドリル（第 67 図 365・366）

365 は腰岳産黒曜石製である。横長剥片を横位に利用し，打面から背面方向への二次加工と，打面に対する側縁から腹面・背面への二次加工により刃部を形成している。刃部には使用による顕著な摩滅が観察される。二次加工の施されない剥片の縁辺には，微細剥離痕が観察される。366 は腰岳産黒曜石製である。

キ　石核（第 67 図 367 ～ 369）

367 は西北九州産黒曜石製である。368 は日東産黒曜石製である。小型円礫の縁辺に打面を設定し，半周程度剥片を剥出した後，作業面に打面を転移し，再び半周程度剥片を剥出している。

369 は日東産黒曜石製である。厚手の剥片を素材とし，腹面側，背面側への交互剥離により剥片を剥出している。作業面と対する側縁は腹面からの二次加工により刃部を形成し，スクレイパーとして転用している。

ク　磨製石斧（第 68・69 図 370 ～ 383）

370 は安山岩製の石斧である。刃部は両刃である。基部から側面に向けて一部欠損している。剥離による整形の後，器面全体を磨いている。371 は安山岩製の石斧であり，刃部は欠損している。基部形状は棒状をなし，敲打により整形している。

372 は砂岩製の石斧であり，刃部は欠損している。礫素材の形状を利用しながら基部を中心に敲打により整形している。373 は砂岩製の石斧であり，刃部が欠損している。敲打による整形の後，器面全体を磨いている。

374 はホルンフェルス製の石斧であり，刃部は欠損している。敲打による整形の後，器面全体を磨いている。基部から表裏両面に剥離痕が見られる。375 は砂岩製の石斧であり，刃部は欠損している。基部形状は棒状をなし，礫素材の形状を利用しながら一部敲打により整形している。

376 はホルンフェルス製の石斧であり，基部は摂理面で欠損している。刃部は両刃で，幅５～６㎜の潰れが確認される。敲打による整形の後，器面全体を磨いている。

377 は砂岩製の石斧であり，基部が欠損している。刃部は両刃であり，先端には幅２～３㎜の潰れが確認される。敲打による整形の後，側面のみが磨かれている。378 は砂岩製の石斧である。基部は欠損している。刃部は両刃である。敲打による整形の後，器面全体を磨いている。

379 は頁岩製の石斧である。基部は欠損している。刃部は両刃である。敲打による整形の後，器面全体を磨いている。欠損時の剥離が基部側から刃部に到達しており，その剥離面に向けて側縁から細かい剥離痕が見られることから，欠損後も何らかの形で再利用されていると考えられる。380 は頁岩製の石斧の刃部である。刃部は片刃で，バチ状に開いている。器体が扁平なため刃角が鋭角である。剥離による整形の後，器面全体を磨いている。

381 は蛇紋岩製の石斧の刃部である。刃部は片刃で，一部欠損している。敲打と剥離による整形の後，器面全体を磨いており，側面には一部敲打痕が残されている。382 はホルンフェルス製の石斧の刃部の一部である。両刃で，刃部には表裏両面に欠損剥離が見られる。

383 は頁岩製の小型の石斧である。刃部は鑿状を呈し，細かい欠損剥離が見られる。敲打と剥離による整形の後，器面全体を磨いている。

ケ　打製石斧（第 69 図 384 ～ 388）

385 は蛇紋岩製の打製石斧である。剥離により器体の整形を行っており，一部礫皮面を残す。刃部には著しい潰れが観察される。

384 は頁岩製の打製石斧である。剥離により器体の整形を行っている。386 は頁岩製の打製石斧である。全体的に風化が進んでいる。器体が半分剥離しており，本来の半分の厚さになっている。器体の基部近くに抉りが見られる。387 は頁岩製の打製石斧であり，基部が欠損している。剥離により器体の整形を行っている。388 は頁岩製の石斧の未製品である。剥離整形の途中で器体が折れたものと考えられる。全体的に風化が進んでいる。

コ　石製品（第 69 図 389）

389 は砂岩製の石製品である。穿孔具による穿孔のある石が遺跡内に持ち込まれたものである。

サ　石錘（第 70 図 390・391）

390・391 は安山岩製の石錘である。いずれも扁平な小型の安山岩の相対する側縁を剥離して抉りを形成している。

シ　磨石・敲石類（第 70・71 図 392 ～ 408，第６表）

磨り・敲き・凹み等，それぞれ単独の機能のものと複数の機能を有しているものを一括して取り扱った。各石器の使用状況については，第６表のとおりである。

ス　石皿・台石（第 72 ～ 74 図 409 ～ 414）

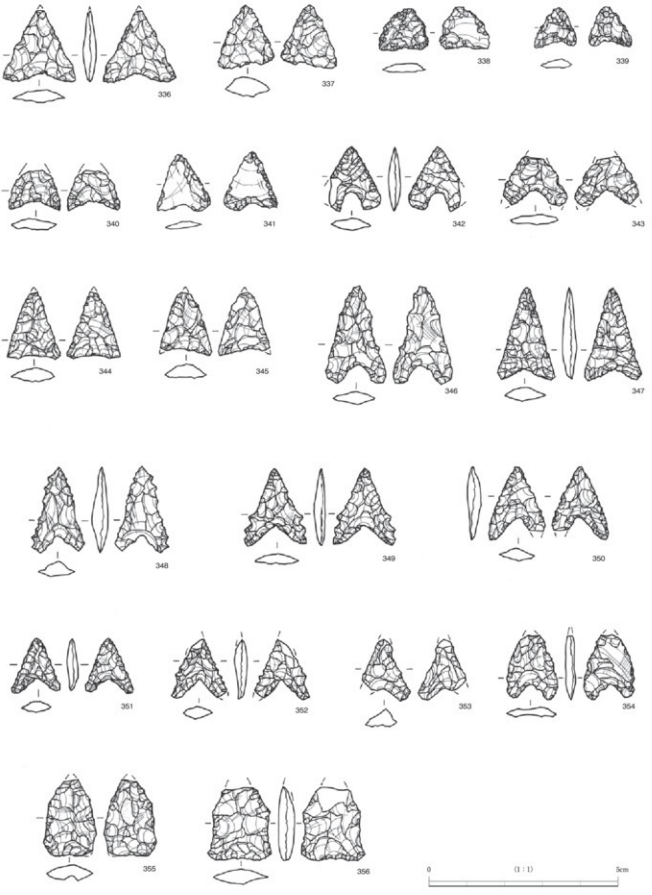
409 は安山岩製である。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。周辺の剥落は被熱によるものと考えられる。使用面には顕著な光沢が見られるが，凹みはない。

410 は安山岩製で，欠損している。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。裏面の剥落は被熱によるものと考えられる。使用面には顕著な光沢が見られるが，凹みはない。

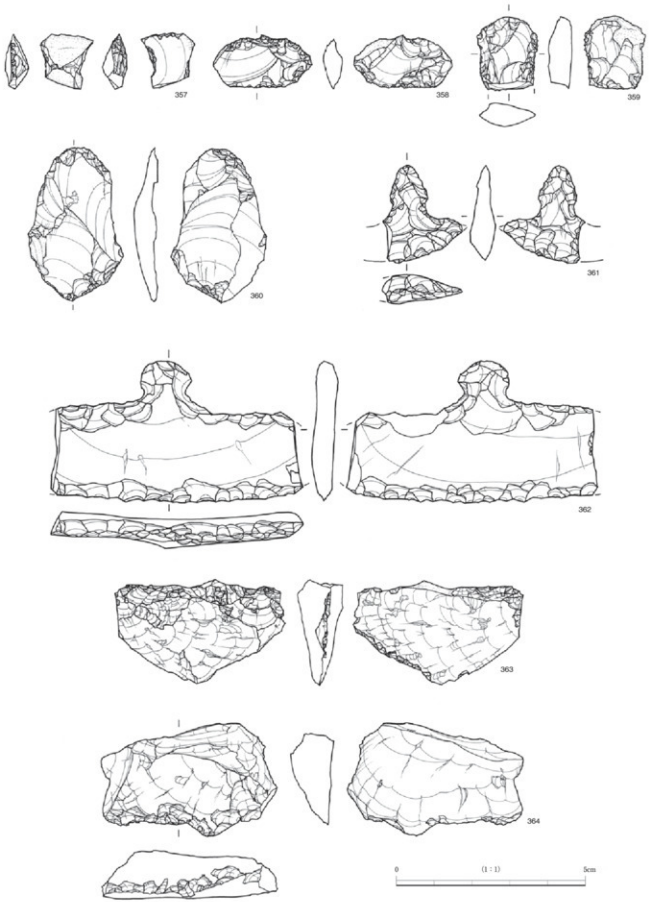
411 は安山岩製である。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。周辺の剥落は被熱によるものと考えられる。使用面は表裏ともに確認され，それぞれ顕著な光沢が見られ，浅い凹みがある。

412 は安山岩製で，欠損している。使用面は表裏ともに確認され，それぞれ顕著な光沢が見られる。表面にのみ浅い凹みがある。

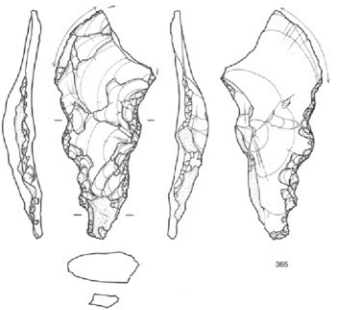
413 は安山岩製である。礫には被熱による赤化が確認

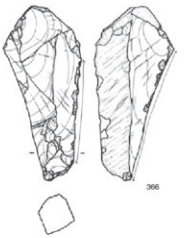


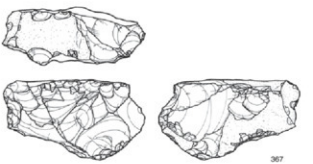
第65図　遺構外出土石器①

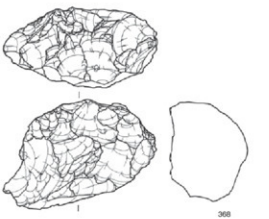


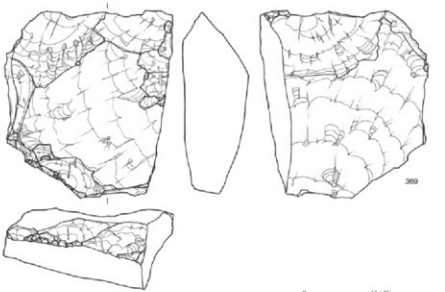
第66図　遺構外出土石器②





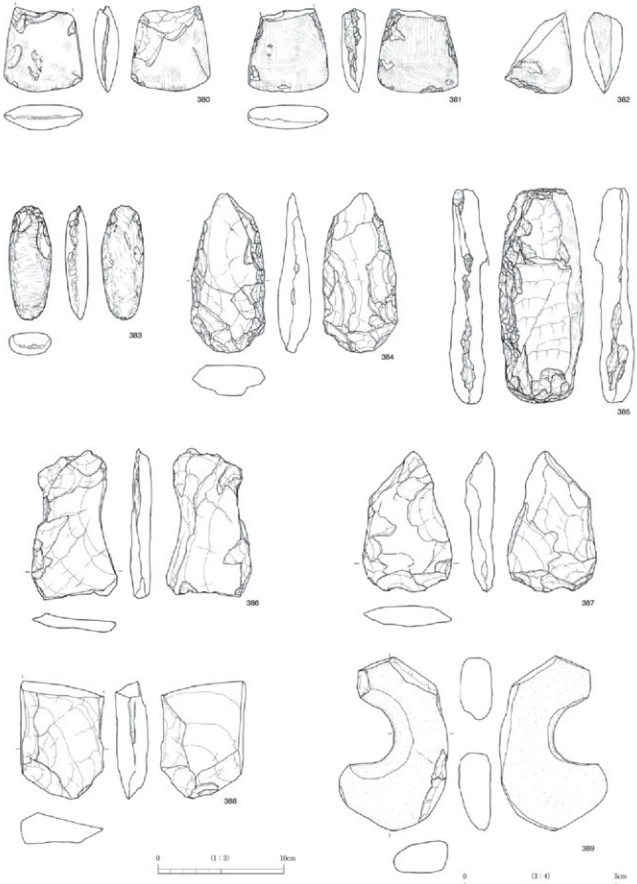




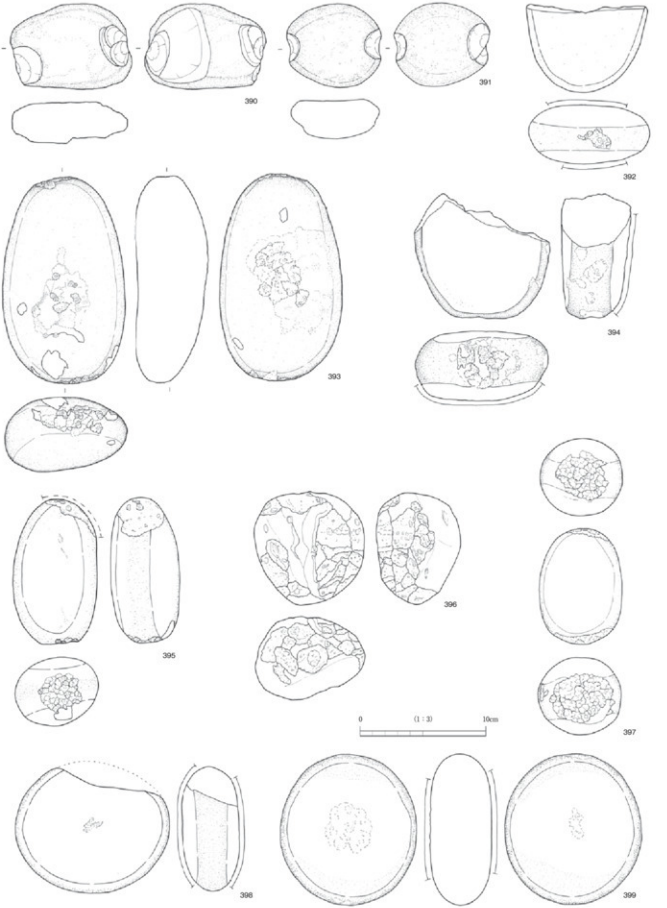


第67図　遺構外出土石器③

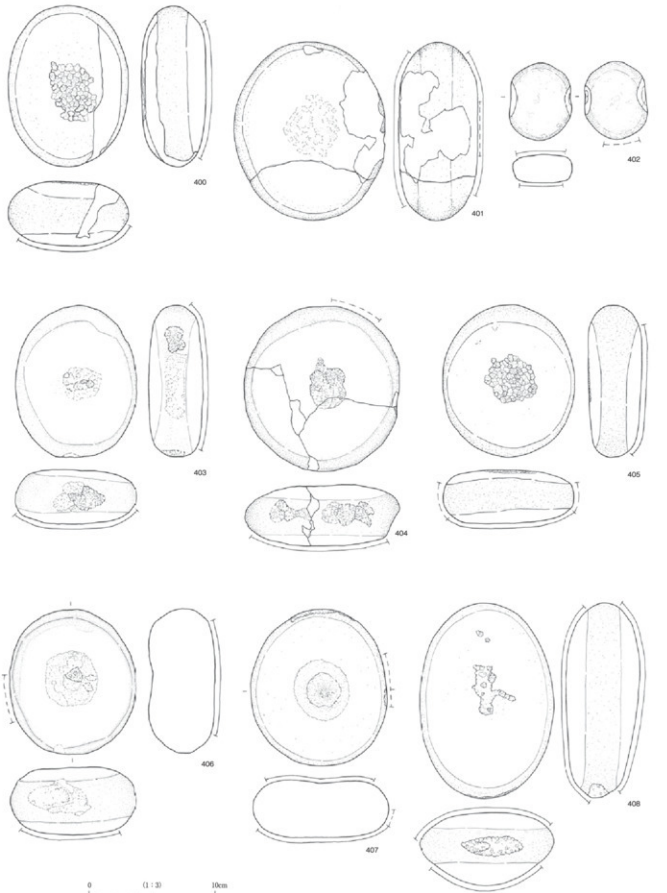
第68図　遺構外出土石器④



第69図　遺構外出土石器⑤



第 70 図　遺構外出土石器⑥



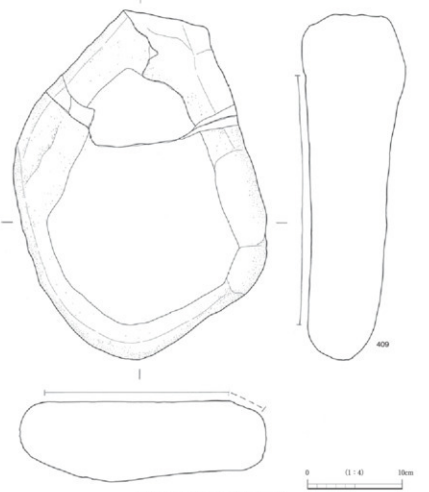
第71図　遺構外出土石器⑦

され，二次利用された可能性が高い。周辺の剥落は被熱によるものと考えられる。使用面には顕著な光沢が見られ，浅い凹みがある。

414は安山岩製で，約4分の3が欠損している。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。使用面には顕著な光沢が見られ，明確な凹みがある。

第6表　磨石・敲石類使用状況観察表

遺物番号	石材	器種	磨		敲		凹		備考
			表	裏	短軸側	長軸側	表	裏	
391	砂岩	磨・敲石	○	○	○	○			裏面中央への垂直打撃により破損
392	安山岩	敲・凹石			○		○	○	
393	安山岩	敲石	○	○	○	－			被熱による破砕
394	安山岩	敲石			○	○			
395	石灰岩	敲石			○				
396	砂岩	磨・凹石	○	○			○		
397	砂岩	磨・凹石	○	○			○	○	欠損
398	砂岩	磨・凹石	○	○			○		
399	砂岩	磨・凹石	○	○			○	○	
400	安山岩	磨・凹石	○	○			○	○	被熱による破砕
401	安山岩	磨・敲・凹石	○	○	○		○		
402	砂岩	磨・敲・凹石	○	○	○	○	○	○	
403	安山岩	磨・敲・凹石	○	○	○	○	○		被熱による破砕
404	安山岩	磨・敲・凹石	○	○	○	○	○		
405	安山岩	磨・敲・凹石		○	○		○		
406	砂岩	磨・敲・凹石	○	○	○	○	○		
407	砂岩	磨・敲・凹石	○		○		○		



第72図　遺構外出土石器⑧